

和田遺跡

—秋月海南線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

2015年3月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

和田遺跡

—秋月海南線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

2015年3月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

序

和歌山市和田所在の和田遺跡は、和歌山県北部を西流する和田川の流れによって形成された低湿な沖積氾濫原に位置しています。

和田遺跡の北側には、神前遺跡や井辺遺跡などの弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡が展開しています。遺跡の北東に位置する福飯ヶ峯の山塊には井辺八幡山古墳を含む井辺前山古墳群が所在しており、集落と墓域の解明が期待されているところです。また、和田遺跡の立地する和田川周辺には、県内でも著名な河南条里が広がり、古代から中世にかけての開発史の中でも注目される地域の一つに挙げられます。

公益財団法人和歌山県文化財センターでは、秋月海南線道路改良工事に伴い平成 24 年度と 25 年度に発掘調査を実施しました。ここでは、弥生時代から奈良時代に断続的に続く生活遺構や自然流路を発見し、往時の一景観を明らかにすることができました。

平成 26 年度に整理作業を行い、このたびその成果をまとめることができましたので、発掘調査報告書として刊行する次第です。本書が県民の皆様のみならず、広く一般の活用に資することができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書の作成にあたりご指導・ご協力を賜りました関係各位、地元の皆様に対し厚くお礼申しあげます。

平成 27 年 3 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター
理事長 工 樂 善 通

例 言

- 1 本書は、和歌山県和歌山市和田に所在する和田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、秋月海南線道路改良工事に先立つもので、平成24・25年度に発掘調査業務を行い、同26年度に出土遺物等整理業務を実施した。
- 3 発掘調査及び出土遺物等整理業務は、和歌山県の委託を受けた公益財団法人和歌山県文化財センターが、和歌山県教育委員会の指導の下に実施した。
- 4 発掘調査及び出土遺物等整理業務に要した経費は、和歌山県（海草振興局）が負担した。
- 5 現地調査に際し、海草振興局をはじめ、和歌山市教育委員会・関係機関および隣接する地元の方々から多大なご協力を得た。
- 6 本書は、発掘調査業務担当者と協議のうえ、土井が執筆・編集した。
- 7 図版に使用した遺構写真は、調査担当者が撮影し、遺物写真は土井が撮影した。
- 8 発掘調査及び出土遺物等整理業務で作成した図面・写真及び台帳等の記録資料は、公益財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が保管している。
- 9 発掘調査及び出土遺物等整理業務の調査組織は、以下に示すとおりである。

調査組織

事務局	平成24年度	平成25年度	平成26年度
事務局長	渋谷 高秀	勝浦 久和	嶋田 文紀
管理課長	渋谷 高秀	勝浦 久和	嶋田 文紀
埋蔵文化財課長	村田 弘	井石 好裕	井石 好裕
発掘調査業務担当		出土遺物等整理業務担当	
埋蔵文化財課	(技師) 津村かおり	(主任) 佐伯 和也	(課長補佐) 土井 孝之
		(技師) 山本 光俊	

凡 例

- 1 遺構実測図及び地区割の基準線は、平面直角座標系第VI系(世界測地系)に基づき、値はm単位で使用している。また、図面に示した北方位は、座標北を示す。
- 2 遺構実測図の基準高は、東京湾標準潮位(T.P.+)表示である。
- 3 発掘調査及び整理作業で使用した調査コードは、以下のとおりである。

12-01・301	(2012年度-和歌山市・和田遺跡)第1次調査
12-01・301-2	(2012・2013年度-和歌山市・和田遺跡-第2次調査)

出土遺物・記録資料の整理に当って、全て上記の調査コードを使用している。
- 4 遺構番号は、第1次調査の第1遺構面遺構は001番から、第2遺構面遺構は201番からの通し番号である。第2次調査では、遺構番号の前に各地区的地区名を冠し、1区を1001番から、2区を2001番から、3区を3001番から、4区を4001番からの通し番号とし、遺構番号には必要に応じて末尾に種類(性格)を付した。但し、遺構が2地区に跨る場合は、先行して調査を行った地区的遺構番号を付して使用している。なお、本書における遺構番号は、全て調査時のものをそのまま使用した。
- 5 本書の遺構・断面土層実測図は、特に縮尺を統一していないが、各々に明示している。
- 6 遺物番号は、本文・実測図・写真図版において一致する。
- 7 遺物実測図の縮尺は、土器類は原則として1/4で、それ以外の場合は必要に応じて縮尺を明示している。遺物写真の縮尺は、特に統一していない。
- 8 調査時の土層の色調・土壤の粒径区分及び出土遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修 小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』(2010年版)を使用した。
土層名で2種類以上の記載のある場合は、前者が主体で、後者が副になることを示す。

本 文 目 次

第Ⅰ章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第Ⅱ章 位置と環境	3
第1節 位置と地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3節 既往の調査と文献史料	7
第Ⅲ章 発掘調査の方法と資料整理	8
第1節 調査現場の記録作業	8
1 写真撮影作業	8
3 航空写真撮影・基準点測量	8
第2節 出土遺物等資料の整理	9
1 出土遺物応急整理	9
2 実測図作成作業	9
第3節 調査区の設定	11
第Ⅳ章 調査成果	14
第1節 第1次調査の成果	14
1 第1次調査の概要	14
3 各遺構の調査成果	15
(1) 第2遺構面の検出遺構	15
(2) 第1遺構面の検出遺構	20
4 小結	26
第2節 第2次調査の成果	32
1 1・2区	32
(1) 調査の概要	32
(2) 基本層序と遺構面	32
(3) 各遺構の調査成果	35
2 3区	47
(1) 調査の概要	47
(2) 基本層序と遺構面	47
(3) 各遺構の調査成果	48
3 4区	61
(1) 調査の概要	61
(2) 基本層序と遺構面	61
(3) 各遺構の調査成果	61
4 小結	65
第V章 まとめ	69
出土遺物一覧	73
写真図版 検出遺構・出土遺物	

挿 図 目 次

図 1 和田遺跡と周辺の地形分類図	3
図 2 和田遺跡と周辺の遺跡	4
図 3 区画割模式図(1 km 区画)	12
図 4 調査位置と区画割(100 m 区画)	12
図 5 調査範囲と地区割(4 m 区画)	13
図 6 第1次調査の基本層序 1	15
図 7 第1次調査の基本層序 2	15
図 8 第1次調査 第2遺構面 遺構全体平面図	16
図 9 第1次調査 018 井戸実測図	17
図 10 第1次調査 037 小穴実測図	17
図 11 第1次調査 209 土坑実測図	18
図 12 第1次調査 205 自然流路断面土層図	19
図 13 第1次調査 第1遺構面 遺構全体平面図	20
図 14 第1次調査 206 土坑実測図	21
図 15 第1次調査 012 土坑実測図	21
図 16 第1次調査 011 井戸実測図	22
図 17 第1次調査 005 井戸実測図	23
図 18 第1次調査 004 井戸実測図	23
図 19 第1次調査 032 落込み断面土層図	24
図 20 第1次調査 001 井戸実測図	25
図 21 第1次調査 出土遺物実測図 1	28
図 22 第1次調査 出土遺物実測図 2	29
図 23 第1次調査 出土遺物実測図 3	30
図 24 第1次調査 出土遺物実測図 4	31
図 25 第2次調査 2-1 区の基本層序	32
図 26 第2次調査 1-2 区第2遺構面、3 区遺構全体平面図	33・34
図 27 第2次調査 1・2 区 2010 自然流路 E レンチ断面土層図	36
図 28 第2次調査 2-2 区 2010 自然流路 F レンチ断面土層図	36
図 29 第2次調査 1・2 区 第1遺構面 遺構全体平面図	37
図 30 第2次調査 1 区 2005 土坑実測図	38
図 31 第2次調査 2-1 区 2003 土坑実測図	38
図 32 第2次調査 2-1 区 2011 自然流路 G レンチ断面土層図	40
図 33 第2次調査 1・2-2 区 2021 溝状遺構・土坑列実測図	41
図 34 第2次調査 1・2 区 出土遺物実測図 1	42
図 35 第2次調査 1・2 区 出土遺物実測図 2	43
図 36 第2次調査 1・2 区 出土遺物実測図 3	44
図 37 第2次調査 1・2 区 出土遺物実測図 4	45
図 38 第2次調査 1・2 区 出土遺物実測図 5	46
図 39 第2次調査 3 区の基本層序	47
図 40 第2次調査 3 区 3019 土坑実測図	48
図 41 第2次調査 3 区 3032 井戸実測図	50
図 42 第2次調査 3 区 3031 井戸実測図	50
図 43 第2次調査 3 区 挖立柱建物 1 実測図	51
図 44 第2次調査 3 区 挖立柱建物 2 実測図	52
図 45 第2次調査 3 区 3027 土坑実測図	53
図 46 第2次調査 3 区 3062 土坑実測図	53
図 47 第2次調査 3 区 3039 土坑実測図	54
図 48 第2次調査 3 区 3108 土坑実測図	54
図 49 第2次調査 3 区 3115 井戸実測図	55
図 50 第2次調査 3 区 出土遺物実測図 1	56
図 51 第2次調査 3 区 出土遺物実測図 2	57
図 52 第2次調査 3 区 出土遺物実測図 3	58
図 53 第2次調査 3 区 出土遺物実測図 4	59
図 54 第2次調査 3 区 出土遺物実測図 5	60
図 55 第2次調査 4 区の基本層序	61
図 56 第2次調査 4 区 遺構全体平面図	62
図 57 第2次調査 4 区 4040 土坑実測図	63
図 58 第2次調査 4 区 溝・溝状遺構断面土層図	64
図 59 第2次調査 4 区 出土遺物実測図	66
図 60 各時代の遺構変遷図	71・72

表 目 次

表 1 発掘調査・出土遺物等整理業務工程	2
表 2 和田遺跡と周辺の遺跡地名一覧	5
表 3 第1次調査 各層序別遺物数量	27
表 4 第2次調査 1・2-2 区 土坑列一覧	46
表 5 第2次調査 3 区 3019 土坑出土の弥生土器文様構成	49
表 6 第2次調査 4 区 杭列(小穴)一覧	65
表 7 第2次調査 各層序別遺物数量	67・68

写真目次

写真 1 第1次調査 第1遺構面 032 落ち込み 掘削状況(北東から)	1
写真 2 現地公開風景(第1次調査)	2
写真 3 現地公開風景(第2次調査)	2
写真 4 神前遺跡出土の弥生土器(5区 5040 自然 流路)	5
写真 5 井辺遺跡出土の弥生土器(市13次調査)	6
写真 6 井辺遺跡 2011-4区 4259 自然流路(北 北東から)	6
写真 7 坂田遺跡出土の琴柱型石製品	6
写真 8 神前遺跡(和歌山橋本線)2011-7・8区 (北東から)	7
写真 9 出土遺物(土器)への登録コード注記作業	9
写真 10 土器の接合作業	9
写真 11 遺物充填による土器の補強作業	10
写真 12 遺物充填による土器の復元作業	10
写真 13 出土遺物の実測図作成(土器)	10
写真 14 出土遺物の実測図作成(石器)	10
写真 15 遺物実測図のトレース作業	10
写真 16 遺物実測図トレース図のレイアウト作業	10
写真 17 遺構図面のトレース作業	10
写真 18 遺構図面トレース図のレイアウト作業	10
写真 19 各種データのPC入力	11
写真 20 遺構写真の整理	11
写真 21 第1次調査 調査区西壁断面土層(東から)	15
写真 22 第1次調査 調査区東壁断面土層(西から)	15
写真 23 第2次調査2-1区 調査区西壁断面土層 (東から)	32
写真 24 第2次調査3区 調査区東壁断面土層 (西から)	47
写真 25 第2次調査4区 調査区東壁断面土層 (西から)	61

写真図版目次

写真図版1 第1次調査 第2遺構面

調査地全景・調査遺構

- 1 調査地全景(北東上空から)
- 2 調査地全景(真上上空から)
- 3 調査遺構全景(北北西から)

写真図版2 第1次調査 第2遺構面 調査遺構

- 1 018 井戸完掘状況・木杭検出状況(南東から)
- 2 018 井戸断面土層・遺物出土状況(南から)
- 3 018 井戸遺物出土状況(南西から)
- 4 018 井戸 木杭検出状況(東から)
- 5 037 小穴土器出土状況(南から)
- 6 037 小穴断面土層(北から)
- 7 209 土坑断面土層(南から)

写真図版3 第1次調査 第2遺構面 調査遺構

- 1 205 自然流路 遺物集中4出土状況(南から)
- 2 205 自然流路 遺物集中4出土状況(南から)
- 3 205 自然流路 遺物集中9出土状況(北から)
- 4 205 自然流路 遺物集中13出土状況(北西から)
- 5 205 自然流路 B-B断面土層(南東から)

写真図版4 第1次調査 第1遺構面

調査地全景・調査遺構

- 1 調査地全景(南南西上空から)
- 2 調査地全景(真上上空から)
- 3 調査遺構全景(南西から)

写真図版5 第1次調査 第1遺構面 調査遺構

- 1 206 土坑完掘状況(北東から)

2 206 土坑断面土層(北から)

- 3 012 土坑断面土層(北東から)
- 4 011 井戸完掘状況(南から)
- 5 011 井戸上層遺物出土状況(西から)
- 6 011 井戸断面土層(南東から)
- 7 005 井戸完掘状況(南から)
- 8 005 井戸下層遺物出土状況(南西から)

写真図版6 第1次調査 第1遺構面 調査遺構

- 1 032 落ち込み遺物出土状況(西から)
- 2 032 落ち込み礫出土状況(南西から)
- 3 004 井戸断面土層(北西から)
- 4 001 井戸木枠出土状況(北から)
- 5 001 井戸遺物出土状況(北から)
- 6 001 井戸板石出土状況(北から)
- 7 001 井戸断面土層(北から)

写真図版7 第2次調査1・2区 第2遺構面

調査地全景・調査遺構

- 1 調査地全景(東上空から)
- 2 調査地全景(北上空から)
- 3 調査遺構全景(北から)

写真図版8 第2次調査1・2区 第2遺構面

調査遺構

- 1 2010 自然流路 下層確認Eトレンチ断面土層
(北東から)
- 2 2010 自然流路より下位層遺物出土状況
(北西から)

- 3 2010 自然流路 下層確認Fトレンチ断面土層
(西から)

- 4 2010 自然流路上層 土器溜まり(南から)

写真図版9 第2次調査1・2区 第1遺構面

調査地全景・調査遺構

- 1 調査地全景(真上上空から)

- 2 調査遺構全景(北から)

- 3 2011 自然流路 下層確認Gトレンチ断面土層
(南東から)

写真図版10 第2次調査1・2区 第1遺構面

調査遺構

- 1 2005 土坑完掘状況(南から)

- 2 2005 土坑断面土層(南から)

- 3 2003 土坑完掘状況(南から)

- 4 2003 土坑断面土層(南から)

- 5 2021 溝状遺構・土坑列(東から)

- 6 2021 溝状遺構・土坑列断面土層(西南西から)

写真図版11 第2次調査3区 調査地全景・調査遺構

- 1 調査地全景(西上空から)

- 2 調査地全景(南上空から)

- 3 調査遺構全景(南から)

写真図版12 第2次調査3区 調査遺構

- 1 3019・3099 土坑掘削状況(南東から)

- 2 3032 井戸掘削状況(南南東から)

- 3 3032 井戸上位層断面土層(東から)

- 4 3032 井戸下位層断面土層(東から)

- 5 3031 井戸断面土層(北から)

- 6 掘立柱建物1掘削状況(南東から)

写真図版13 第2次調査3区 調査遺構

- 1 掘立柱建物2完掘状況(南東から)

- 2 3027 土坑遺物出土状況(北北西から)

- 3 3027 土坑遺物出土状況(北東から)

- 4 3062 土坑遺物出土状況(南東から)

- 5 3062 土坑遺物出土状況(南から)

- 6 3039 土坑断面土層(北西から)

- 7 3108 土坑断面土層(南から)

写真図版14 第2次調査3区 調査遺構

- 1 3115 井戸とその周辺(南西から)

- 2 3115 井戸掘削状況(西から)

- 3 3115 井戸断面土層(西から)

写真図版15 第2次調査4区 調査地全景・調査遺構

- 1 調査地全景(南上空から)

- 2 調査地全景(真上上空から)

- 3 杭列・溝群(南東から)

写真図版16 第2次調査4区 調査遺構

- 1 4040 土坑遺物出土状況(南南西から)

- 2 4003 溝断面土層(南東から)

- 3 4004・4009 溝断面土層(南東から)

- 4 4007 溝断面土層(南から)

- 5 4012 溝断面土層(西から)

- 6 4017 溝断面土層(南東から)

- 7 4042 溝状遺構断面土層(南東から)

写真図版17 第1次調査第2遺構面 出土遺物

写真図版18 第1次調査第1遺構面 出土遺物 1

写真図版19 第1次調査第1遺構面 出土遺物 2

写真図版20 第2次調査1・2区 出土遺物 1

写真図版21 第2次調査1・2区 出土遺物 2

写真図版22 第2次調査1・2区 出土遺物 3

写真図版23 第2次調査1・2区 出土遺物 4

写真図版24 第2次調査3区 出土遺物 1

写真図版25 第2次調査3区 出土遺物 2

写真図版26 第2次調査3区 出土遺物 3

写真図版27 第2次調査3区 出土遺物 4

写真図版28 第2次調査3区 出土遺物 5

写真図版29 第2次調査4区 出土遺物

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

今回の調査対象となる「秋月海南線」は、和歌山市の紀の川南岸を南北に縦断し、南側の海南市に連絡し、市街地へのアクセス道路としての役目を担っている。現状では、既設路線としての「県道秋月海南線」は2車線で歩道も不十分であるため交通混雑の悪化と安全性の低下が進み、主要幹線道路として十分に機能を発揮できない状況にあった。そのため、対象となる新設路線は、現道の交通問題に対処し、地域に活力とゆとりをもたらすために、4車線道路として整備することになっている。

このような役目を担って和歌山県により秋月海南線道路改良工事が計画されたが、その事業予定地の一部が埋蔵文化財泡蔵地「和田遺跡」(図2の301)内に位置するため、平成22年11月4日付け海建工第92号で和歌山県知事により文化財保護法第94条の通知が提出された。これを受けて、平成22年11月26日付け文第57号の(45)で確認調査を必要とする旨の通知を和歌山県教育委員会が行った。

以上を受けて、平成24年2月15日付け海建工第95号で和歌山県知事より和歌山県教育委員会に発掘調査の依頼があり、平成24年2月21日付け文第75号の(13)でこれを受諾し、和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課(以下、県文化遺産課)で秋月海南線道路改良工事に伴う第1次試掘確認調査・工事立会調査が平成24年3月1日～3月27日に実施された。その後、平成24年6月19日付け海建工第30号で発掘調査の依頼があり、これに対し、平成24年6月21日付け文第123号の(5)でこれを受諾し、秋月海南線道路改良工事に伴う第2次試掘確認調査として平成24年6月29日に実施された。

次いで、平成24年10月時点で試掘調査が可能な範囲について、平成24年10月1日付け海建工第58号で和歌山県知事より和歌山県教育委員会に発掘調査の依頼が提出され、平成24年10月11日付け文第123号の(8)でこれを受諾し、県文化遺産課で秋月海南線道路改良工事に伴う第3次試掘確認調査として平成24年11月5日～12月3日に実施された。

その結果、一部について記録保存目的の本発掘調査が必要と判断された。そこで、県文化遺産課の指導のもと、公益財団法人和歌山県文化財センターが「秋月海南線道路改良工事に伴う和田遺跡発掘調査業務」としてこれを受託し、発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過(図4・5、表1)

第1次調査は、工事請負方式で実施し、発掘調査工事として有限会社芳野組に、基準点測量及び航空写真撮影・測量は株式会社ウエスコに再委託した。調査は平成24年11月27日より機械掘削を開始し、その後、道路計画用地の買収に伴い、調査面積を追加し平成24年12月5日付けで変更契約を行った。調査対象の遺



写真1 第1次調査 第1遺構面 032 落ち込み
掘削状況(北東から)

構面は2面で、第1遺構面の掘削(写真1)作業終了後、平成24年12月25日にラジコンヘリコプターを使用して航空写真測量を行った。調査記録作業を行った後、第2遺構面まで掘り下げ、調査を行い、平成25年2月7日に第2回目の航空写真測量を実施した。調査記録作業終了後に埋め戻しを行い、平成25年2月28日に現地での調査を終了した。本調査面積は、1,557m²である。

発掘調査と並行して応急整理作業(主に出土遺物洗浄作業)を行った。

第2次調査地は、中央を現有用水路の本線が南北方向に流れしており、東西も本線から分岐する用水路が流れ。調査の便宜上、調査地が用水路によって分断されているため、調査区を1区～4区と呼称し調査を進めた。

第2次調査も工事請負方式で実施し、発掘調査工事として株式会社桂組に、基準点測量及び航空写真撮影・測量はワコウコンサルタント株式会社に再委託した。調査は、平成25年5月13日から機械掘削を開始し、平成25年9月5日に埋戻しを完了した。本調査面積は、4,548m²である。

1区・2区については、2面の遭構面の調査を行った。このため、航空写真測量はラジコンヘリコプターを使用し、平成25年7月8日に1区・2区の第1遭構面及び4区、平成25年8月22日に1区・2区の第2遭構面及び3区の2回行った。

第2次調査においても発掘調査と並行して応急整理作業(主に出土遺物洗浄作業・注記作業)を行った。

表1 発掘調査・出土遺物等整理業務工程

この他、普及活動として、周辺住民の方を対象とした現地公開を第1次調査に伴い平成25年2月9日に実施し、約80名の参加者を得た(写真2)。また、第2次調査に伴い平成25年8月24日(土)に実施し、本遺跡の調査内容及び出土遺物の説明等を行った。当日は雨天にも関わらず40名の参加者を得た(写真3)。



写真2 現地公開風景（第1次調査）



写真3 現地公開風景（第2次調査）

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 位置と地理的環境（図1）

和田遺跡（図2の301）は、和歌山市和田に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲は東西約300m、南北約500mに広がる。

和歌山市は、和歌山県の北西部に位置し、北は大阪府との府県境となる和泉山脈が東西に延びる。その麓には大台ヶ原を源流とする紀の川が西流し、和歌山市の西部で紀伊水道に注いでいる。紀の川北岸で中央構造線が東西に横断し、この断層によって北側の内帶と南側の外帶とに分けられる。内帶は、砂岩・泥岩の互層からなる和泉層群であり、当遺跡が位置している外帶は、結晶片岩を主体とする三波川変成帯で構成されている。

和田遺跡は、紀の川南岸の和歌山市南東部の和田盆地に位置し、和歌山市山東地区から西流する和田川により形成された低温なラグーン性低地である。和田盆地はかつての構造運動によって生じた溺れ谷で、周囲の独立丘陵は、地盤の沈降が生じる以前の山頂部である。また、和田盆地は、縄文海進時に湾となっていたと推測され、紀の川本流の堆積作用は及ばず三角州下位面となり、長期間入江であったと推測される。

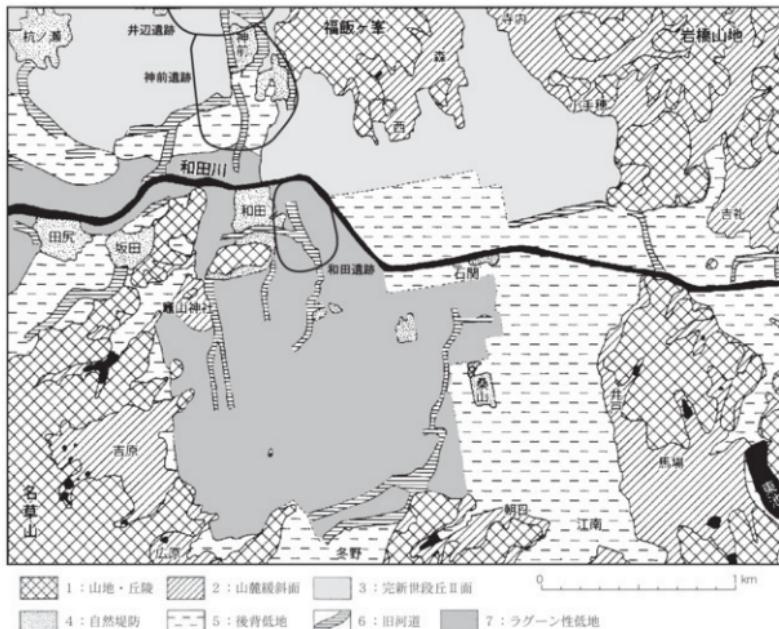


図1 和田遺跡と周辺の地形分類図(1 : 25,000)

(出典: 2013 篠田雅裕「和歌山平野南部の地形と土地開発」
『和歌山市立博物館 研究紀要 28』和歌山市教育委員会を一部改変。)

今回の調査地は、遺跡範囲の中央北側に位置しており、調査地を南北に縦断する位置には、古墳時代に起源をもつ宮井用水が流れる。また、周辺一帯は河南条里(和田条里区)が良好に残り、小字名にも当時の地割名や坪名が残る。調査地周辺の現況は、水田が一面に広がっている。

第2節 歷史的環境（図2、表2）

和田遺跡(301)が所在する紀の川南岸の和歌山平野には、国の特別史跡である岩橋千塚古墳群(185)をはじめ、周辺の丘陵に多くの古墳群が所在する。また、丘陵麓から平野部にかけても集落や古墳など多くの遺跡が展開している。以下、周辺の遺跡について概略を記述する。

縄文時代 縄文時代には、低丘陵の裾部に貝塚が形成される。主な遺跡としては、福井貝塚、鳴神貝塚、吉礼貝塚、岡崎縄文遺跡(309)などが挙げられる。岡崎縄文遺跡では、縄文時代後期～晩期の土器や石器・石匙・磨製石器・石錘などが出土し、ハマグリを主とした貝屑とその下に



図2 和田遺跡と周辺の遺跡（1:25,000）

力キのみの貝層が確認されている。また、鳴神貝塚は近畿地方で初めて確認された貝塚で、昭和6年に国の史跡に指定されており、縄文時代晩期の土坑墓からは抜歯された女性の伸展葬人骨が確認されている。

弥生時代 弥生時代には前期から中期にかけて紀の川南岸の平野部で多くの遺跡が展開する。主な遺跡は、JR 和歌山駅東側に所在する太田・黒田遺跡をはじめ、秋月遺跡、神前遺跡(307)などがある。太田・黒田遺跡では、弥生時代前



写真4 神前遺跡出土の弥生土器
(2010-5区5040自然流路)

表2 和田遺跡と周辺の遺跡地名一覧

埋蔵文化財包蔵地

遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	時代	立地	摘要
185	岩橋千塚古墳群	羽根・御所・赤谷・寺内	古墳群	古墳	山腹	前方後円墳13基、方墳4基、円墳45基からなる
186	井辺前山古墳群	井辺・御所・西内・内・神内・森内・森小屋	古墳群	古墳	山腹	前方後円墳15基、円墳60基からなる
187	寺内古墳群	寺内・森小屋	古墳群	古墳	山腹	円墳33基からなる
188	森小手遺跡	森小手	散布地	古墳～中世	丘陵	須恵器、土師器、瓦等
189	寺内イフ折石屋出土地	寺内	出土地	古墳	丘陵	破片イフ折石器
254	萬葉谷遺跡	芦井	散布地	弥生～古墳	丘陵	方形壙溝墓、台状墓、土師器、須恵器
257-258	丹戸古墳群	相坂	古墳群	古墳	丘陵	円墳3基
260	馬場古墳群	相坂	古墳群	古墳	丘陵	1基
261	馬場古墳	相坂	散布地	弥生	丘陵斜面	弥生土器
267	松原ノ遺跡	松原	散布地	古墳?	丘陵端	土師器、須恵器
268	松原ノ遺跡	松原	散布地	古墳?	丘陵	土師器、須恵器
269	〔裏原〕谷遺跡	江南	散布地	縄文	丘陵	縄文土器、石器
291	〔曾根〕日置遺跡	江南	散布地	古墳	丘陵端	上野原色、甕、鉢
292	〔曾根〕日置遺跡	江南	散布地	古墳?	丘陵端	土師器
294	城の前日置遺跡	朝日	散布地	古墳	中世?	須恵器、瓦器
295	城の前遺跡	朝日	散布地		丘陵端	土師器
296	大池遺跡	朝日	散布地	中世?	油坪	瓦器、土師器、椎鉢、大池の西～南斜面
297	赤津古墳群	朝日	古墳群	古墳	丘陵	1基からなる
301	和田遺跡	和田	散布地	弥生～奈良	冲積地	〔原柱建物、井戸、土坑、土坑溝、溝、弥生土器、土師器、須恵器、石器（石器、石盾）〕・石製品、木製品
302	和田日置遺跡	和田	散布地	弥生～古墳	冲積地	弥生土器、土師器、須恵器、土師器
303	和田日置群	和田	古墳群	古墳	丘陵	14基
305	瀬山神社古墳	和田	古墳	古墳	丘陵	円墳
306	坂田遺跡山古墳	坂田	古墳	古墳	丘陵	円墳6基、横六式石室、扇刀、須恵器
307	神前遺跡	神前	集落跡	弥生～江戸	沖積地	〔原柱建物、原柱建物、土坑、溝、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、瓦、石器（石器、石盾）、斧錐車〕
308	井辺遺跡	井辺・神前	集落跡	弥生～古墳	沖積地	〔原柱建物、土坑、土坑溝、溝、前方後方圓周溝墓、方形周溝墓、自然沈入路、弥生土器、土師器、須恵器、各種木製品〕
309	岡崎櫛文遺跡	井辺	散布地	縄文	丘陵端	縄文土器、石器多數
310	森小手砂輪窯跡	森小手	窑跡	古墳	山麓	〔砂輪窯、形跡〕
311	大日山遺跡	井辺	集落跡	古墳～奈良	丘陵端	〔原柱建物、新立柱建物、土師器（小形盆、甕、高环、环、瓶）、須恵器（环、高环）、鳥糞土器、滑石製勾玉、有孔円板〕
312	井辺ノ遺跡	井辺	散布地	弥生～古墳	平地	弥生土器、土師器
313	井辺日置遺跡	井辺	散布地	弥生～古墳	平地	弥生土器、土師器、須恵器
352	津泰寺群	津泰寺	散布地	弥生	沖積地	弥生土器、サヌカイト
358	〔アント〕の島古墳	二島	古墳	古墳	丘陵	〔原柱式石室、土師器（巻巻）〕
359～342	三古田古墳群	二島	古墳群	古墳	丘陵	14基
343	吉原古墳	吉原	古墳	古墳	丘陵	前方後円墳?
361	冬野遺跡	冬野	散布地	中世	丘陵端	土師器（甕、皿）、土師質土器（カマド、土釜）
367	升辺日置遺跡	升辺	散布地	縄文	丘陵端	縄文土器
370	日向石船出土地	日向	出土地	弥生	平地	石船
383	神前日置遺跡	神前	散布地	古墳～室町	冲積地	土師器、須恵器、土鍤、瓦器、陶器
407	津泰寺遺跡	津泰寺	散布地	古墳～奈良	冲積地	土師器、須恵器
408	和田日置遺跡	和田	集落跡?	弥生	丘陵	溝状構造、弥生土器
412	城ノ前日置遺跡	朝日	古墳	古墳	丘陵	〔円墳、周溝状遺構、横六式石室〕、須恵器（丸形容）
422	朝日藏骨器出土地	朝日	填墓	奈良	山腹	須恵器（藏骨器）、土坑、溝、弥生土器、須恵器、土師器、黑色土器、瓦器、陶器、等、往形石製品、勾玉、有孔円板
435	坂田遺跡	坂田	集落跡	弥生～室町	沖積地	〔原柱建物、井戸、溝、弥生土器、須恵器、土師器、黑色土器、瓦器、陶器、等、往形石製品、勾玉、有孔円板〕

遺跡内の調査履歴有り

和歌山県教育委員会「和歌山県埋蔵文化財包蔵地名表」2007年3月
31日発行を一部改変・補革

期から中期にかけて堅穴建物跡などが多数検出されている。また、2重の環濠を廻らす県内最大級の弥生時代の集落と考えられている。遺物は、多量の弥生土器と共にシカや高床建物を線刻した絵画土器、また、遺跡東側の河川改修工事に伴い外縁付紐式1式四区製表擦文銅鐸も出土している。

神前遺跡(写真4)では、弥生時代前期から中期にかけての10条以上の平行する溝や土坑が検出されている。複数の平行する溝は、地形沿つて北側から南西方向に延び、水路の機能をもつものと考えられている。

一方、弥生時代中期後葉から後期前半にかけては、平野部での遺跡の展開が激減し、周辺部の丘陵部で滝ヶ峯遺跡や橋谷遺跡などの高地性集落が見られるようになる。弥生時代後期後半になると、再び平野部で集落が見られるようになり、太田・黒田遺跡と和田遺跡の間には、秋月遺跡、津秦遺跡(332)、神前遺跡、井辺遺跡(308)などが存在する。多くの遺跡では、弥生時代後期後半から終末期にかけて再び遺構・遺物が認められ、古墳時代前期に継続して集落が展開する。

井辺遺跡(写真5)では、遺跡範囲の北東側で弥生時代後期後半から古墳時代前期を主体とした堅穴建物・周溝墓が検出され、集落の間を縫うような位置で大量の土器・木器・木製品が埋没した自然流路が検出されている(写真6)。

古墳時代 古墳時代には、岩橋千塚古墳群を始め、各支群において多くの古墳群が築造される。また古墳時代の集落遺跡として音浦遺跡、鳴神II遺跡、鳴神V遺跡、大日山I遺跡、秋月遺跡、神前遺跡、井辺遺跡があり、和田遺跡の西側には坂田遺跡(435)が展開する。

岩橋千塚古墳群は、岩橋山塊に築かれた古墳群で各支群を含めて総数は数百基に及ぶものとされている。古墳の築造は、4世紀後半から7世紀前半まで継続し、6世紀の主要な石室の構造は岩橋型石室とよばれる横穴式石室に石棚や石梁をもつものが見られる。鳴神V遺跡では、堅穴建物や掘立柱建物の他、大規模な溝が検出された。また、音浦遺跡においても大規模な溝が検出され、和歌山平野を灌漑する現在の宮井用水路に平行するように掘削されていることから宮井用水路の起源と考えられる。秋月遺跡では、遺跡の東半で居住城がみられ、西半で墓域が確認され、県内最古の前方後円墳が検出され



写真5 井辺遺跡出土の弥生土器(市13次調査)
(出典:2013『和歌山市内遺跡発掘調査概報 一平成23年度』
和歌山市教育委員会)



写真6 井辺遺跡 2011-4区 4259 自然流路
(北北東から)



写真7 坂田遺跡出土の琴柱形石製品

ている。和田遺跡の西側には龜山神社が所在し、和歌山県唯一の陵墓とされる龜山神社古墳(305)が所在する。この龜山神社に隣接する北側に坂田遺跡が所在し、古墳の存在を示唆する琴柱形石製品(写真7)が出土している。

古代 古代の遺跡としては、鳴神V遺跡、太田・黒田遺跡、薬勝寺廃寺が見られ、日前宮・国懸宮、龜山神社が創建される。鳴神V遺跡では、奈良時代から平安時代の官衙の存在を窺わせる円面硯や初期貿易陶磁器、綠釉陶器などが出土している。また、太田・黒田遺跡では奈良時代の井戸が検出され和銅開珎 42枚、万年通寶 4枚が出土している。日前宮は紀伊国一宮として『延喜式神名帳』にその名が見られ、日前宮より南側一帯には、河南条里と呼ばれる条里型地割が良好に残り、地割方位はN-5°~6.5°-Wである。

中世 中世以降にも、太田・黒田遺跡、秋月遺跡、鳴神V遺跡などで遺構や遺物が見られる。神前遺跡では、掘立柱建物が検出されている。また、幅7m以上の大溝が検出されており(写真8矢印)、現在の宮井用水路に重複するように掘削されていることから、宮井用水路が整備された当時のものと考えられる。秋月遺跡では、瓦積みの井戸が検出されている。太田・黒田遺跡の南側には、太田城の推定地があり、幅10m、深さ3mを測る16世紀の壕状の遺構が検出されている。また、天正13年(1585年)の羽柴秀吉による太田城の水攻め時の堤と考えられるものがわずかに残っている。岩橋に所在する岩橋高柳遺跡では、鎌倉時代の屋敷跡に伴う掘立柱建物2棟と井戸2基や室町時代の堀状遺構が検出されている。



写真8 神前遺跡(和歌山橋本線)2011-7・8区
(北東から)

近世 近世には、和田周辺は和田村と呼ばれるようになり、宮組に所属する。

神前遺跡では、屋敷地跡と考えられる区画溝や土坑・暗渠排水溝が検出されている。太田・黒田遺跡では、太田城の名残とされる石垣や、耕作地として利用されていたと考えられる鋤溝群が見られる。和田遺跡の西側には静火神社跡があり、初見は『延喜式神名帳』に見える。その後、文献史料に永仁年間に廃絶したとされているが、長享元年(1487年)に静火神社の名が見られる。また、『南紀徳川史』に静火社旧地とみえ、享保8年(1723年)までに廃絶したと推測される。

第3節 既往の調査と文献史料

和田遺跡では広範囲での発掘調査は行われておらず、平成9年に財團法人和歌山市文化体育振興事業団により約25m²の小規模な調査が行われている。調査は遺跡範囲の東縁辺部で行われ、鎌倉時代の水田跡と推測される植物痕が確認された。弥生土器が出土しているものの、遺構は検出されていない。その他、文献史料では、林家所蔵の大治2年(1127年)「紀伊国在府官人等解案」に日前宮領であった和田川の塩入常荒田を開発するため、40町の堤防を築造した記録が見られる。鎌倉時代に大規模な整備が行われ、水田として利用されたと推測される。宮井用水路は長承元年(1132年)の文書『古名草堰』で「綾井」・「国衙堰」といわれ、初見は、鎌倉期の元亨元年(1321年)の『歡喜寺文書』に見られる。

第Ⅲ章 発掘調査の方法と資料整理

調査は、原則的に財団法人和歌山県文化財センターの定めた『発掘調査マニュアル(基礎編)』(2006年4月)を基準として作業を進めた。発掘調査で使用した調査コードは、12-01・301(2012年度一和歌山市・和田遺跡)、12-01・301-2(2012・2013年度一和歌山市・和田遺跡—第2次調査)である。共に同一年度内で同一遺跡の調査が複数行われたことから、末尾に枝番号を用いてそれぞれの調査を区別している。出土遺物・記録資料はこの調査コードを用い整理・管理している。

第1節 調査現場の記録作業

和田遺跡の調査に伴い、下記に示す記録作業を行った。

1 写真撮影作業

記録保存としての写真撮影作業は、大判カメラ(4×5判：白黒フィルム・カラーボジフィルム)・中判カメラ(6 7 判：白黒フィルム・カラーボジフィルム)・小判カメラ(35mm判：白黒フィルム・カラーボジフィルム)・小型デジタル一眼レフカメラにより、主に発掘調査の状況、検出遺構・遺物の出土状況、断面土層等を撮影した。また、補助的に1420万画素相当の小型デジタル一眼レフカメラにより発掘調査の作業状況や作業工程をメモ用の記録画像として撮影している。撮影内容は、写真台帳に調査区・対象・方向・使用フィルムを登録しているほか、デジタル画像データにも内容をファイル名に記載して保存している。

2 実測図作成作業

記録保存としての実測図作成作業は、各遺構面の検出遺構の遺構位置全体図(縮尺=1:100)、個別遺構の平面実測図(縮尺=1:20)・個別遺構や遺物の出土状況図(縮尺=1:10 or 1:5)・個別遺構の断面土層図(縮尺=1:20 or 1:10)を作成した。

また、調査地区的遺存状態の良好な壁面に対して断面土層図(縮尺=1:20)などを記録として作成した。

3 航空写真撮影・基準点測量

調査地の遺構図面作成や遺物の取上げなどのため、国土座標第VI系(世界測地系)により既設の公共基準点を利用して3級基準点・補助点を設置し、各地区内に4級基準点を設置した。併せて、4級基準点にも水準測量を行っている。

発掘調査により検出した遺構は、ラジコンヘリコプターを使用した調査地全体の航空写真撮影及び航空写真測量による図化(縮尺=1:50・1:100)を行った。基準点の設置と撮影図化作業を併せて、平成25年度の発掘調査では、「和田遺跡発掘調査に伴う航空写真測量・基準点測量委託業務」として株式会社ウエスコに、同25・26年度の第2次発掘調査では、「和田遺跡第2次発掘調査に伴う航空写真測量・基準点測量委託業務」としてワコウコンサルタント株式会社に再委託して実施した。

第2節 出土遺物等資料の整理

1 出土遺物応急整理

出土遺物については、調査現場の監督員詰所において一部について応急的な洗浄・注記作業を実施した。これは、調査の進捗に伴い、現地調査方法の判断資料として時期決定を行い、調査を円滑に進めていく必要があるため、また、現地公開・説明会において公開する目的をもって行った。

また、出土遺物の総体的な把握と調査報告書作成までのコンテナ収納・管理を目的とした出土遺物登録台帳の作成作業を行い、ほぼ全てを完了した。しかし、この段階では、出土遺物の詳細な内容登録までは行っていない。

2 出土遺物等整理業務

調査で出土した遺物は、応急的な整理のみであったため、調査報告書作成に伴い一連の整理作業を行うと共に、現地調査の構造図面・遺構写真などの調査記録資料の整理を行い、資料登録台帳(データのPC入力)などを作成した。

出土遺物の基礎的な整理作業

出土遺物の内、土器類は、通常の遺物収納コンテナ(容量 28ℓ)にして 110 箱である。その他、木器・木製品 5 点、金属製品 2 点、石器・石製品 55 点である。出土遺物の整理は、調査同様に『財團法人和歌山県文化財センター 発掘調査マニュアル(基礎編)』(2006 年 4 月)に準拠して行った。

出土遺物は、応急整理済み(全ての洗浄・一部の注記作業)の物を省いて遺物の分別作業、遺物への調査コードと出土遺物登録番号の注記作業(写真 9)・遺物内容及び点数の台帳登録集計・接合作業(写真 10)を行った。



写真9 出土遺物(土器)への登録コード注記作業



写真10 土器の接合作業

主要遺物を対象とした整理作業

基礎的な作業を経た主要遺物を対象に、遺物充填材による補強(写真 11)・復元作業(写真 12)、遺物実測図の作成(写真 13・14)・実測遺物の台帳登録(本書に掲載の「出土遺物一覧」として利用)・遺物実測図のトレース・トレース図のレイアウト(写真 17)・遺物実測図の整理、集計登録データ等入力を行った。



写真 11 遺物充填材による土器の補強作業



写真 12 遺物充填材による土器の復元作業



写真 13 出土遺物の実測図作成(土器)



写真 14 出土遺物の実測図作成(石器)



写真 15 遺物実測図のトレース作業



写真 16 遺物実測図トレース図のレイアウト作業



写真 17 遺構図面のトレース作業



写真 18 遺構図面トレース図のレイアウト作業



写真 19 各種データの PC 入力



写真 20 遺構写真的整理

遺構図面の整理

現地調査の遺構図面は、台帳登録・報告書掲載用図面の作図を行い、調査報告書に掲載する図面原稿を抽出した。抽出した遺構図面について、トレース作業(写真17)・レイアウト作業(写真18)を行った。また、調査報告書の本文原稿の作成に必要なため「検出遺構規模一覧」・「土坑列一覧」(表4)・「杭列(小穴)一覧」(表6)を作成し、データのPC入力作業(写真19)を行った。

遺構写真的整理

調査現場の記録写真には、 4×5 白黒・カラー、 6×7 白黒・カラー、 35mm 白黒・カラー、デジタル写真画像、ラジコンヘリを使用した航空写真がある。デジタル写真画像を省く各写真は、調査次毎に写真アルバムに収納し、各写真アルバムの背にタイトルを明示した。デジタル写真画像は、調査時に日付毎、もしくは地区毎にフォルダに纏められている。

デジタル写真画像・航空写真を省く写真に対して写真登録番号を付し、航空写真を省く写真に対して写真内容の記録を記載した(写真20)。一部のデジタル写真画像については、調査報告書に使用する目的で、掲載用の写真画像の抽出を行った。

出土遺物の内容登録に伴う各層序別遺物数量

出土遺物の内容登録に伴う遺物破片点数の数量化は、大よその時代と主要となる土器類・その他の遺物に分けて作業を進めた。土器の種類は、矛盾のない程度に簡素化している(表3・7)。

時代・時期区分については、大よその時代設定を行い、大きく弥生時代前期・中期、弥生時代後期・終末期、古墳時代、飛鳥・奈良・平安時代、平安時代末～室町時代、江戸時代に区分した。

第3節 調査区の設定

地区割の方法(図3～5)

調査現場での実測図作成や遺物取り上げの際に用いた地区割の基準線は、平面直角座標系(世界測地系)第VI系の座標軸を使用し、数値はm単位で表示している。遺構図面の方針は座標北を使用し、標高は東京湾平均海面(T.P.)からのプラス値を使用した。

地区割については、北側の井辺遺跡から和田遺跡までを網羅するよう X=-197.0 km, Y=-72.0 km の交点に基点を設け、この基点から西方と南方にそれぞれ1km四方の区画を1単位として大区画を設定した。基点から西方向にはローマ数字の I・II で、南方向にはアラビア数字の 1・2 で表記した(図3)。これにより、今回の調査範囲は全て大区画 I・2 区に位置することとなる。

この基点から、それぞれ 100m四方の区画を 1 単位とした中区画を設定し、北東端を基点とし西方向へアルファベット大文字で A～J と、南方向へアラビア数字で 1～10 と表記した(図3・4)。さらに 4m 四方の区画を 1 単位とした小区画を設定し、北東端を基点とし西方向へアルファベット小文字で a～y と、南方向へアラビア数字で 1～25 と表記した(図5)。

遺構図面作成や遺物取り上げの際にには原則として、4 m四方の小区画で行い、大区画一中区画一小区画を組み合わせて表記して用いた(但し、今回の調査範囲は、第1次調査・第2次調査

区共に大区画 I 2 区に入るため、本文の記述における大区画の表記は省略した)。

調査区は、2012 年度の第1次調査区を便宜上1区に、2012・2013年度の第2次調査区を 1 区～4 区に区分した。2 区は、水路によって南北に分断されるため、さらに 2-1 区・2-2 区に区分した。

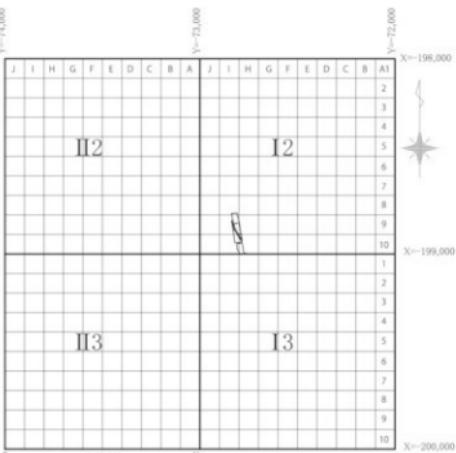


図3 区画割模式図(1 km² 区画)

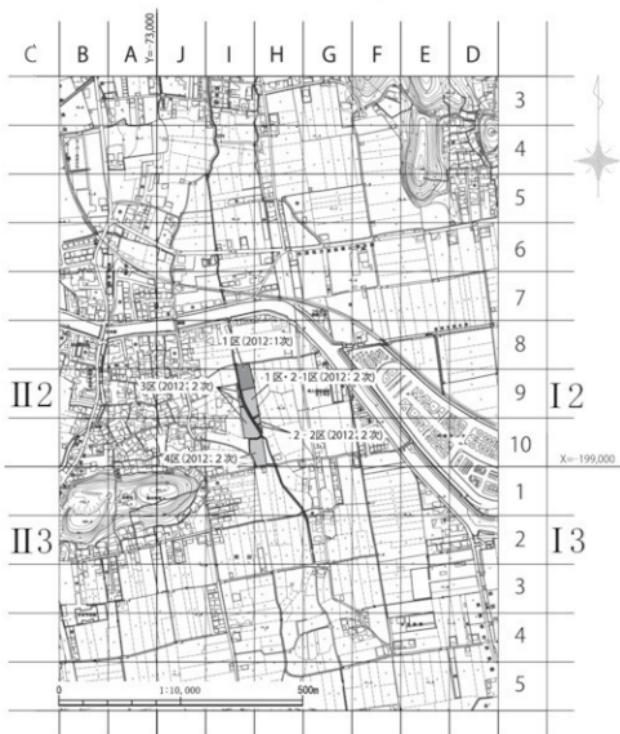


図4 調査位置と区画割(100 m² 区画)

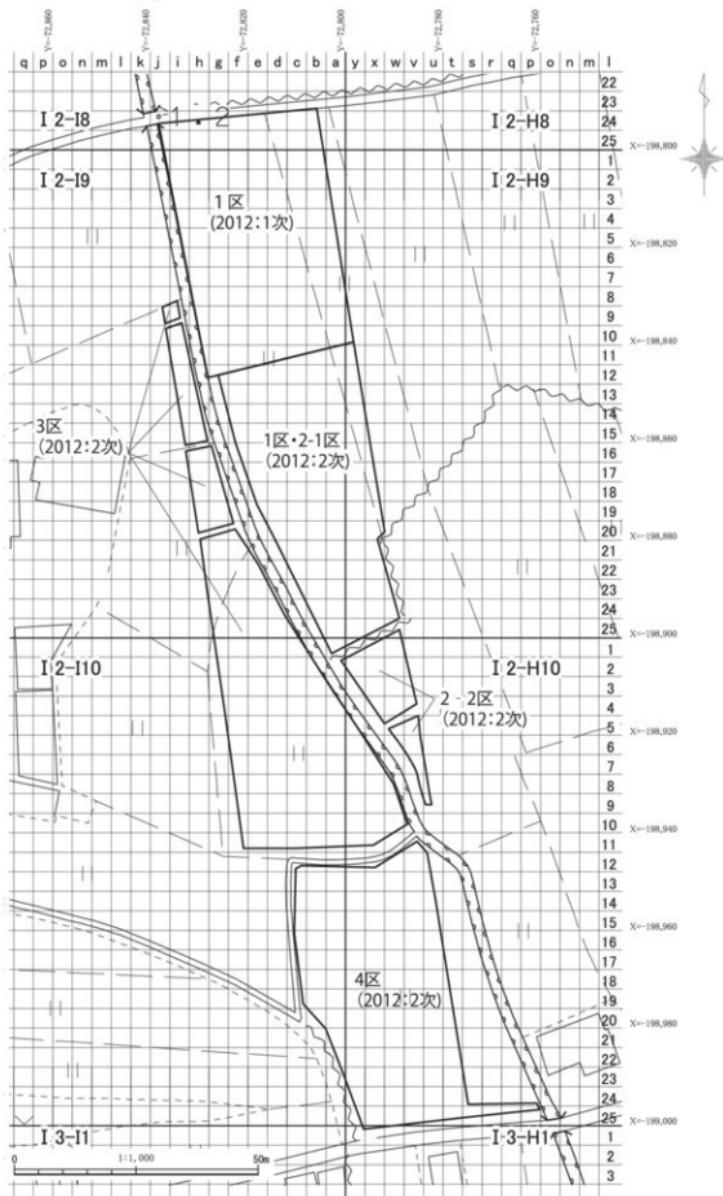


図5 調査範囲と地区割(4m区画)

第IV章 調査成果

第1節 第1次調査の成果

1 第1次調査の概要

第1次調査では、調査区の東側に良好な遺構が残り、西側から南東側にかけて自然流路となる。遺構検出は、第4層と第1層(基盤層)の上面で行った。第1遺構面で検出した主な遺構には、井戸4基・土坑・小穴・溝状遺構数条などが、第2遺構面(第1層・基盤層上面)の主な遺構には、井戸1基・土坑・小穴・自然流路などがある。調査地には既往の調査結果同様に、水田耕作に伴うとみられる植物痕や踏み込みが多数検出された。検出された植物痕や踏み込みからは弥生土器・土師器の細片が見られた。

遺物は、弥生時代前期・中期・終末期の土器・石器、古墳時代、奈良時代の土器が出土した。その他、鎌倉時代、江戸時代の遺物も少量であるが出土した。

2 基本層序と遺構面(図6・7、写真21・22)

調査前の現況は、水田である。基本層序を以下のとおり把握した。

基本層序

第1層：第1層は、近・現代の水田耕作土(第1a層)灰色もしくは褐灰色のシルト～細砂と床土(第1b層)明黄褐色のシルト～細砂に细分できる。

第2層：第2層は、近世以降の旧耕作土及び整地土で、灰白色のシルトで粒状に鉄分を多く含む。調査区中央より西側にみられる。

第3層：第3層は、中世の遺物包含層で、耕作土と考えられる褐灰色～灰色のシルトである。また、調査区南側には明褐色のシルトがみられる。

第4層：第4層は、古墳時代の遺物包含層で、黄灰色(第4a層)～灰色(第4b層)の細砂である。第1遺構面を形成すると共に205自然流路の上位層の堆積層となる。

基盤層

第I層：明黄褐色のシルト～細砂である。第2遺構面の基盤層である。

第II層：灰黄褐色のシルト～細砂である。

第III層：灰色のシルト～細砂である。

第IV層：灰色～青灰色の細砂～中砂で湧水層である。

遺構検出面

調査は、遺構面2面を対象に実施し、第1遺構面の第4層上面は、標高約1.0mから約0.9mである。また、第2遺構面の基盤層第I層上面は、標高約0.9mから約0.85mである。

第1遺構面の第4層は調査区西側から南東側にかけて見られ、多くの土器を含み、調査区西側に広がる205自然流路の上位層の堆積土と考えられる。調査区南側では032落ち込み状遺構が検出され、自然流路が埋没した後、掘削されたものと考えられる。第2遺構面の第I層は基盤層で調査区中央から東側にかけて広がる。

近世以降の整地土及び旧耕作土である第2層については、調査区中央から西側に堆積が見られ、南西側に行くにつれ厚く堆積し、瓦器・土師器片がわずかに含まれる。

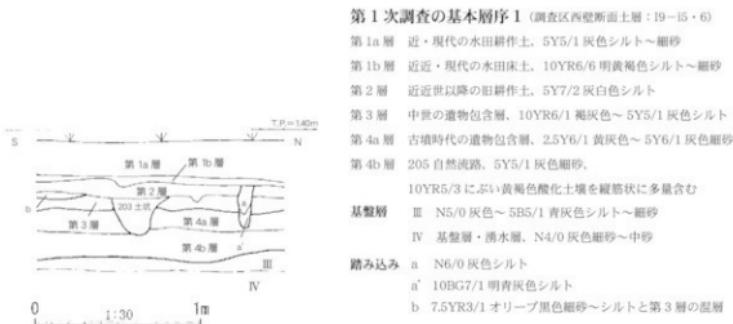


図6 第1次調査の基本層序1(調査区西壁断面土層: I9-I5・6)

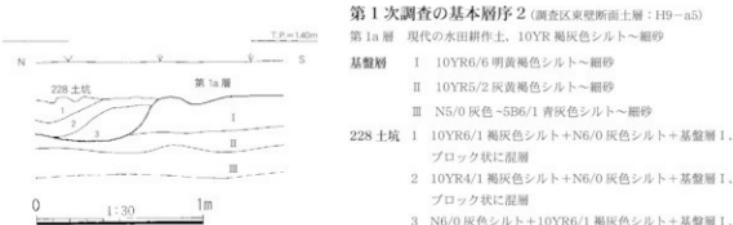


図7 第1次調査の基本層序2(調査区東壁断面土層: H9-a5)

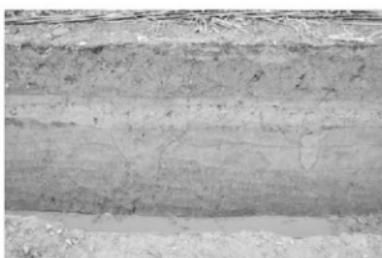


写真21 第1次調査 調査区西壁断面土層(東から)



写真22 第1次調査 調査区東壁断面土層(西から)

3 各遺構の調査成果

以下、主な遺構について古い時代順に記述する。

(1) 第2遺構面の検出遺構(図8～12・21・22・24、写真図版1～3・17・19)

弥生時代の遺構は、前期の弥生土器が出土した018井戸や、中期の209土坑・037小穴を検出した。また、調査地西側から南側にかけて205自然流路を検出しており、出土遺物から弥生時代終末期～古墳時代後期にかけて埋没したものと考えられる。

当項では、調査結果により第1遺構面として検出した遺構の内、弥生時代終末期までに該当する時期の遺構について、便宜上第2遺構面での検出遺構として記述する。



018 井戸 (図9・21、写真図版2・17)

018 井戸は、調査区の東側南寄り 19-b6-7 に位置し、短軸南北 2.36m・長軸東西 2.39m のほぼ円形を呈する素掘り井戸である。断面形は、逆台形を呈し、残存の深さは 1.08m を測る。埋土の中位層で炭化物が混じり、残存の深さは約 0.60m で湧水層に達する。埋土は、14 層を検出した。基底部の西側に直径約 10~15cm の杭が 2 本打ち込まれている。埋土の中層で弥生時代前期の土器 83 点、壺(1・2・4・7)、下層で壺(6)5 点が出土した。これらの土器は井戸の廃

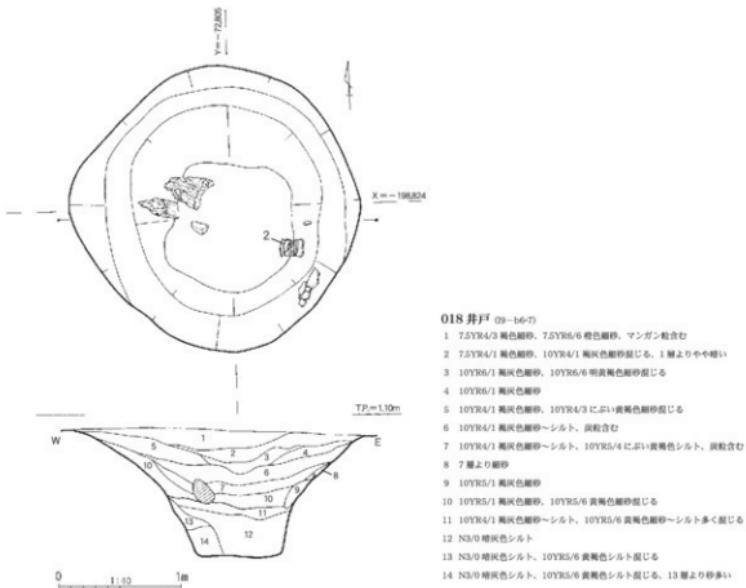


図9 第1次調査 018 井戸実測図

絶時に廃棄されたものと考えられる。その他を含めて、埋土から弥生土器片 157 点が出土した。

これらの遺物から、018 井戸は弥生時代前期の紀伊 I-3 様式に帰属するものと考えられる。

037 小穴 (図10・21、写真図版2・17)

037 小穴は、調査区の北東隅 19-b1 に位置し、短軸東西 0.26m・長軸南北 0.31m の楕円形を呈する。断面形は、U 字形を呈し、残存の深さは 0.17m を測る。埋

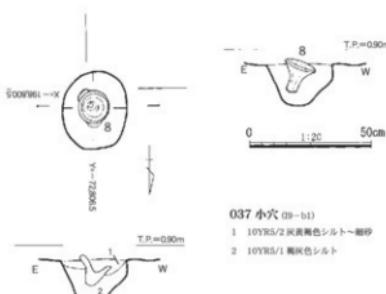


図10 第1次調査 037 小穴実測図

土は、2層を検出した。遺物は、弥生時代中期の紀伊IV-1様式と考えられる高環脚柱部1点(8)が斜位の状態で出土した。037小穴は、調査時には第1遺構面としているが、出土遺物から第2遺構面と考えられる。

この遺物から、037小穴は弥生時代中期の紀伊IV-1様式に帰属するものと考えられる。

209土坑(図11・21、写真図版2・17)

209土坑は、調査区の中央東寄り19-d3・4に位置し、東西0.60m・南北0.60mのほぼ円形を呈する。断面形は、歪な箱形を呈し、残存の深さは0.30mを測る。埋土は、6層を検出した。遺物は、弥生時代中期の紀伊IV-1様式と考えられる弥生土器の手捏ね壺1点(9)が出土した。手捏ね壺は、肩部に笠先による刺突文、体部に稚拙で雑な柳描波状文と直線文が各1条施される。柳は、草本類の茎状のものを半裁し2本を結束したもの用いたと考えられる。

この遺物から、209土坑は弥生時代中期の紀伊IV-1様式に帰属するものと考えられる。

205自然流路(図8・12・21・22・24、表3、写真図版3・17・19)

205自然流路は、主に調査区の西側から南東側にかけて広がる。第2次調査の2011自然流路と合わせて南北幅員約27mを測る(但し、2011自然流路の時期を示す遺物は古墳時代であるため、正確には205自然流路の上位層にある遺物包含層第4層の堆積時期が2011自然流路と併行する)。深さは、最も深い部分で0.41mを測る。調査時には「落ち込み状遺構」と認識して調査が進められた自然流路である。205自然流路の上位層には、遺物包含層として掘削した第4層が広範囲に埋積する状態にある。

遺物は、自然流路の南東側肩付近に集中して多く見受けられる傾向にあり(図8の「遺物集中」)、剥離・磨滅が極めて著しく細片が主体である。また、遺物の遺存状態は極めて悪く、形状を留めた状態での取り上げは困難であった。205自然流路からは、総計5,069点の遺物が出土した。その内、弥生時代終末期と判断できたものは4,968点(98.0%)、弥生時代前期・中期と判断できたものは82点(1.6%)である。遺物は、弥生時代中期の甕(10・11)、終末期の広口壺(12~15)・二重口縁壺(17・18)・直口壺(19)・甕(20~23)・高環(24~28)・鉢(29~31)、頁岩製の小型扁平片刃石斧(88)・チャート製の敲石(91)・砂岩製の石皿(92)・砂岩製の砥石(93)、古墳時代の須恵器壺蓋(32)などが出土した。その他、腐朽の著しい多くの木質遺物も出土した。

古墳時代と判断した土師器13点、須恵器壺身3点・壺蓋(32)3点・甕1点は、その遺物量(205自然流路の出土遺物全体の0.4%)から上位層の掘り残しと判断した。

弥生時代終末期を主体としたこれらの出土遺物の組成は、第2次調査の1区・2区で検出した

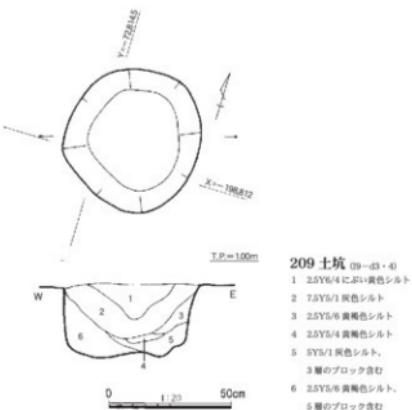


図11 第1次調査 209土坑実測図

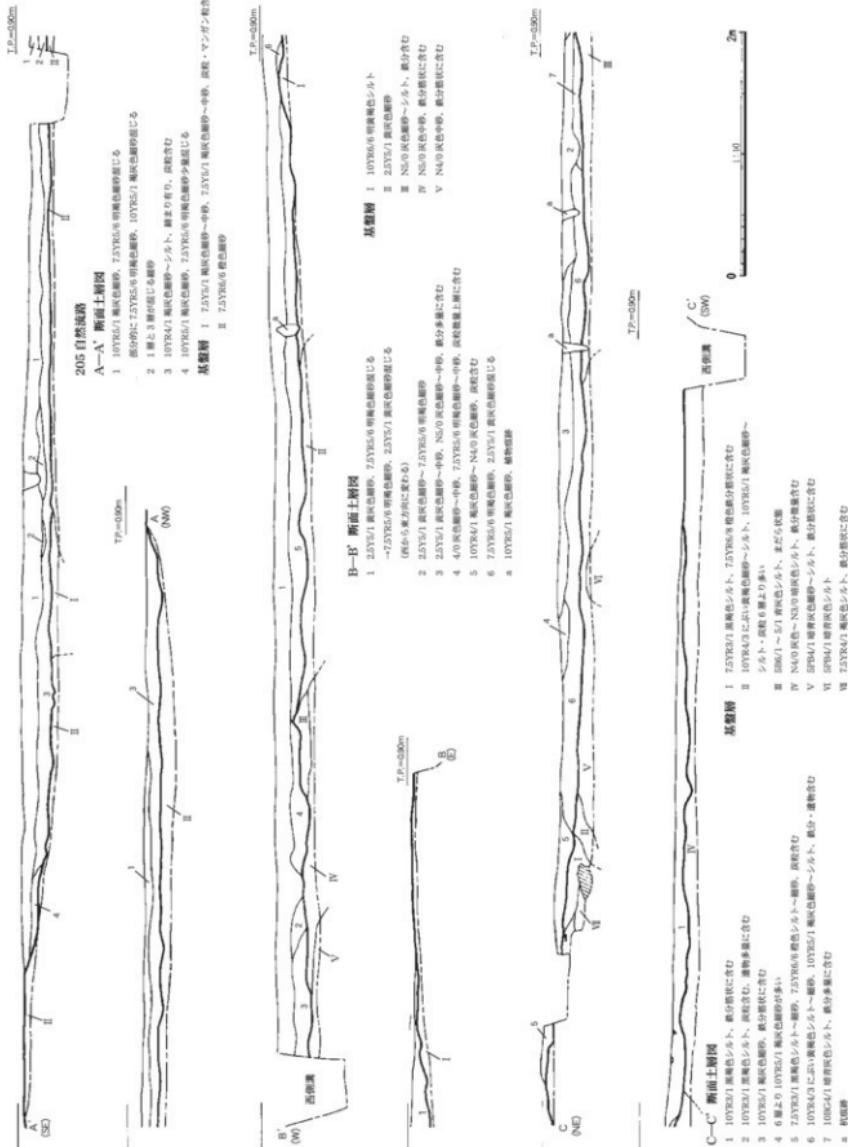


図 12 第1次調査 205 自然流路断面土層図

2010自然流路中層・上層の出土遺物と類似する傾向にあり、205自然流路下位層と2010自然流路上層の埋没過程が併行するものと考えられる。

(2) 第1遺構面の検出遺構(図13~20・22・23、写真図版4~6・18・19)

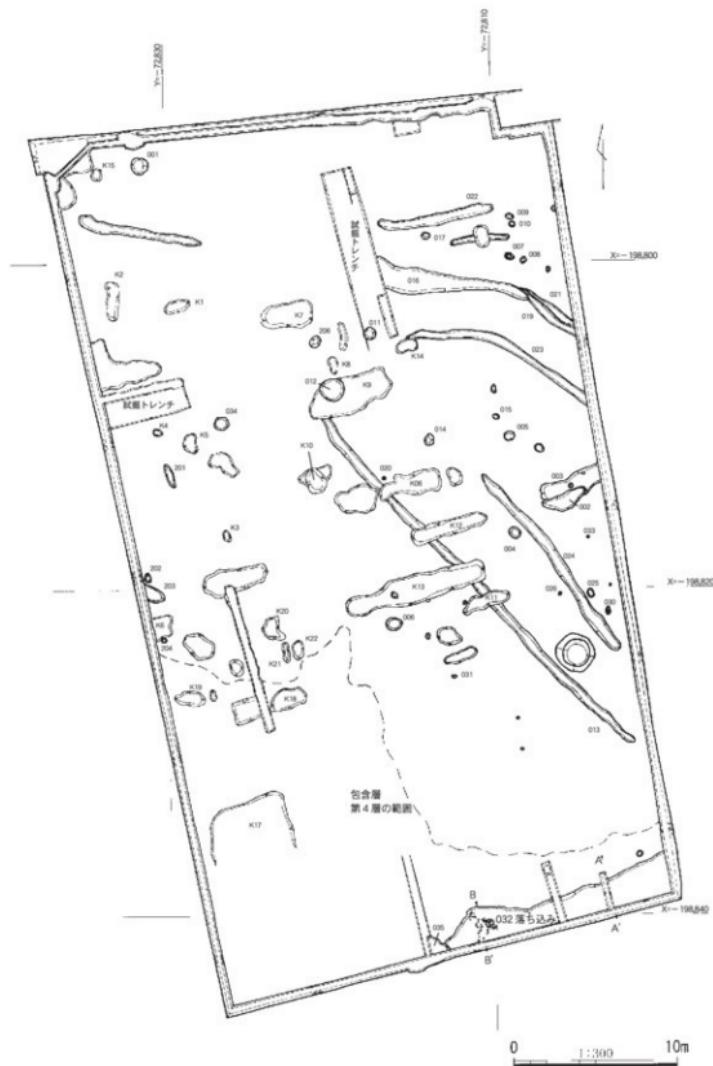


図 13 第1次調査 第1遺構面 遺構全体平面図

古墳時代の遺構は、井戸や土坑・溝状遺構を検出した。第1遺構面の032落ち込み遺構は第2遺構面の205自然流路の埋没後に掘削されたものと考えられ、須恵器坏身、土師器高杯・製塙土器が出土した。その他、遺物包含層第4層から滑石製白玉や有孔円盤などが出土した。古代の遺構は、木枠組みの001井戸があり、遺物の埋設状況から井戸の廃絶に伴う祭祀を行ったものと考えられる。

当項では、調査結果により調査区北東にかけて検出した遺構は、基盤層第1層上面に形成されるものであるが、便宜上第1遺構面での検出遺構として記述する。

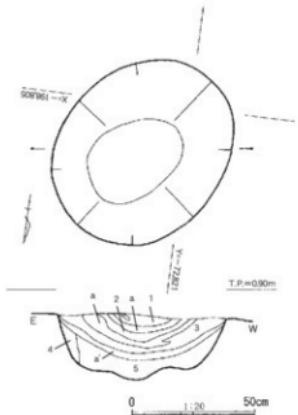
206 土坑（図14、写真図版5）

206土坑は、調査区の北側中央I9-f2に位置し、短軸北西-南東0.65m・長軸北東-南西0.80mの楕円形を呈する。重複関係から、205自然流路より新しい。断面形は、歪なU字形を呈する。埋土は、レンズ状に堆積し、約10cm毎にa層もしくはa'層が3層分堆積し、残存の深さは0.28mを測る。埋土は、5層を検出した。遺物は、弥生時代終末期もしくは古墳時代の土師器と考えられる土器微細片10点が出土した。図化できる遺物はなかった。

これらの遺物から、206土坑は205自然流路の埋没過程での弥生時代終末期もしくは古墳時代に帰属するものと考えられる。

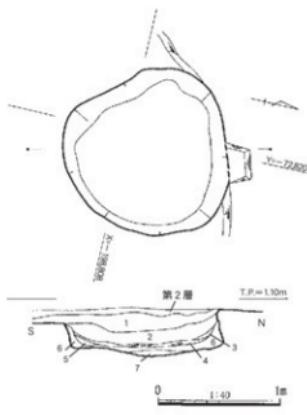
012 土坑（図15、写真図版5）

012土坑は、調査区の北側中央I9-e・f2・3に位置し、短軸東西1.39m・長軸南北1.41mの歪な円形を呈する。重複関係から、205自然流路より新しい。上部をK9遺構により削平される。断面形は、中央がやや深めの方形を呈し、埋土の下位層(4層)で大量の炭化物と土器片



206 土坑 (09-f2)

- 1 10YRS/4にぶつ青褐色シルト～細砂、10YR5/1 黄褐色シルト～細砂混じる
- 2 10YR4/3にぶつ青褐色シルト、マンガン粒含む
- 3 10YRS/1 黄褐色細砂～シルト、10YR4/3にぶつ青褐色シルト～細砂混じる
- 4 10YR5/1 黄褐色細砂
- 5 10YR4/3にぶつ青褐色細砂、マンガン粒含む
- a 8Y7/1 黄褐色のみの SBT/1 明黄色細砂混じりシルト
- a' SBT/1 明黄色細砂混じりシルト



012 土坑 (09-e・f2・3)

- 1 84/0 黄褐色細砂、黄粒含む (K9 土坑)
- 2 10YR6/6 明黄色細砂、10YR5/1 黄褐色細砂混じる、マンガン粒含む
- 3 2層より 10YR5/1 黄褐色細砂多い
- 4 槍状に土器、黄粒含む
- 5 2層よりシルト
- 6 10YR4/1 黄褐色シルト、やや細砂、10YR4/4 黄色シルト混じる
- 7 10YR5/1 黄褐色細砂、10YR5/6 黄褐色細砂、黄粒含む

図14 第1次調査 206 土坑実測図

図15 第1次調査 012 土坑実測図

が混じり、残存の深さは0.39mを測る。埋土は、7層を検出した。埋土の下位層で弥生時代終末期もしくは古墳時代の土師器と考えられる土器細片11点が出土した。図化できる遺物はなかった。

これらの遺物から、012土坑は弥生時代終末期もしくは古墳時代に帰属するものと考えられる。

遺物包含層 第4層関係(図22・24、表3、写真図版18・19)

「包含層4層」の遺物は、剥離・磨滅が極めて著しく細片が主体で、接合率が低い。遺物は、弥生時代終末期の壺・甕・高坏、古墳時代前期(布留式併行期)の土師器高坏、古墳時代の土師器高坏(36)、須恵器坏身(37)・壺、滑石製白玉(87)などが出土した。その他、奈良時代の須恵器蓋(39)1点が出土したが、その遺物量(遺物包含層第4層関係の出土遺物全体の0.05%)から上位層の掘り残しの混入と判断した。

また、「包含層4層落ち込み」・「4層205落ち込み」の遺物も、剥離・磨滅が極めて著しく細片が主体で、接合率が低い。遺物は、弥生時代の紀伊I様式或いはII様式の紀伊形甕、サスカイト製の凹基無茎式石鎌(84)、弥生時代終末期の広口壺(33)・甕(34)・高坏(35)、古墳時代の須恵器坏身(37)・高坏脚台部(38)などが出土した。その他、奈良時代の須恵器蓋(39)、鎌倉時代の土釜1点・瓦器椀3点、滑石製の温石(89)1点などが出土したが、その遺物量(遺物包含層第4層関係の出土遺物全体の0.6%)から上位層の掘り残しの混入と判断した。これらの遺物内容から、「包含層4層落ち込み」・「4層205落ち込み」は、「包含層4層」と時期差の無いものと判断した。遺物包含層第4層関係からは、総計1,821点の遺物が出土した。

弥生時代終末期及び古墳時代を主体としたこれらの出土遺物の組成は、第2次調査の1・2区に広がる遺物包含層第2層の出土遺物と類似する傾向にある。

011井戸(図16・22、写真図版5・18)

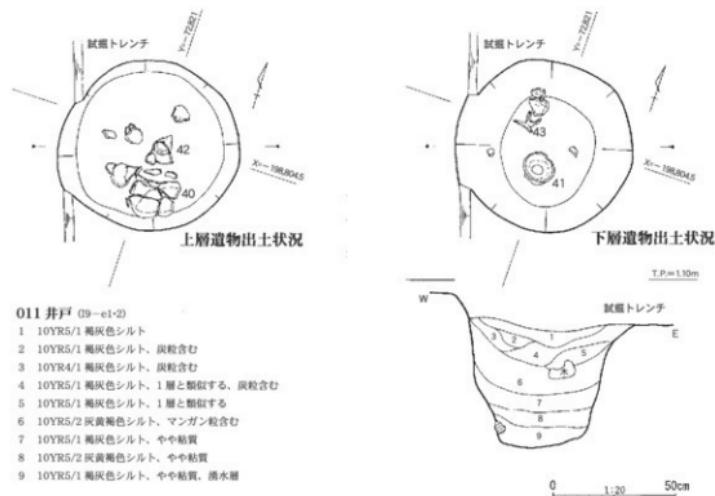


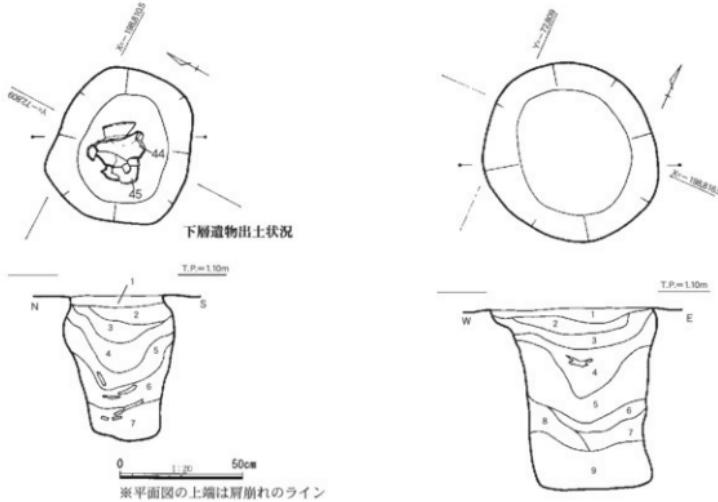
図16 第1次調査 011井戸実測図

011 井戸は、調査区の北側中央 I 9-e1・2 に位置し、短軸南北 0.70m・長軸東西 0.74m のほぼ円形を呈する。大半が試掘トレンチで削平される。断面形は、深い U 字形を呈し、埋土の上位層で炭化物が混じり、残存の深さは 0.65m で湧水層に達する。埋土は、9 層を検出した。埋土の上層で古墳時代の土師器甕(40)・高杯(42)、下層で古墳時代の土師器甕(41)・高杯(43)が出土した。井戸の廃絶に伴い土器が廃棄されたものと考えられる。その他を含めて、埋土から古墳時代の土師器片 101 点が出土した。古墳時代の須恵器は、出土していない。その他、層位不明から奈良時代の須恵器蓋 1 点が出土したが、混入と判断した。

これらの遺物から、011 井戸は古墳時代後期に帰属するものと考えらえる。

005 井戸 (図 17・22、写真図版 5・18)

005 井戸は、調査区の東側中央やや北寄り I 9-c3 に位置し、短軸南北 0.56m・長軸東西 0.65m のやや歪な梢円形を呈する。005 井戸の図 17 の平面形は、肩崩れの状態を示す。断面形は、深い U 字形を呈し、残存の深さは 0.60m で湧水層に達する。埋土は、7 層を検出した。埋土の中層から下層にかけて、古墳時代の土師器甕(44・45)が重なるような状態で出土した。井戸の廃絶に伴い土器が廃棄されたものと考えられる。その他を含めて、埋土から古墳時代の土師器片



005 井戸 (I 9-c3)

- 1 2SY4/2 増灰褐色シルト
- 2 10YR4/2 黄褐色シルト～細砂
- 3 10YR4/2 黄褐色シルト～細砂、炭粒含む
- 4 10YR4/3 黄褐色シルト～細砂
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細砂、炭粒含む
- 6 10YR4/1 増灰褐色シルト、10YR5/3 にぶい黄褐色シルト混じる
- 7 10YR4/1 増灰褐色シルト

図 17 第 1 次調査 005 井戸実測図

004 井戸 (I 9-c5)

- 1 NS/0 増灰褐色シルト、2 無覆土
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂シルト
- 3 2SY4/1 黄褐色細砂シルト
- 4 10YR4/4 にぶい黄褐色シルト～細砂、木片含む
- 5 10YR4/4 にぶい黄褐色シルト～細砂
- 6 10YR4/1 増灰褐色シルト
- 7 10YR4/1 増灰褐色シルト～細砂
- 8 10YR3/1 黑褐色シルト～細砂、湧水層
- 9 10YR3/1 黑褐色シルト～細砂、湧水層

図 18 第 1 次調査 004 井戸実測図

68点が出土した。須恵器は出土していない。

これらの遺物から、005井戸は古墳時代後期に帰属するものと考えられる。

004井戸(図18・22、写真図版6・18)

004井戸は、調査区の東側中央I9-c5に位置し、短軸東西0.72m・長軸南北0.76mのほぼ円形を呈する。断面形は、深いU字形を呈し、埋土の上位層に炭化物が混ざり、残存の深さは0.75mで湧水層に達する。埋土は、9層を検出した。遺物は、埋土の上層から古墳時代の土師器高杯(46)・甕、その他を含めて、弥生時代終末期もしくは古墳時代の土器片26点が出土した。須恵器は出土していない。

これらの遺物から、004井戸は古墳時代に帰属する可能性が考えられる。

032落ち込み(図19・23、写真図版6・18)

032落ち込みは、調査区の南東端H9-y10～I9-d11にかけて位置する。検出幅員1.2～2.7m・検出延長14.5m、東側と南側は調査地外に延びるため全容は不明である。また、南側の第2次調査1・2・1区での対応する遺構は、不明である。埋土は、最上位に遺物包含層第3層が緩やかに落ち込む。その下位の埋土の中層でまとまりのある遺物が出土した。基底部では、緑泥片岩を主体とした直径5～10cm前後の円礫(川原石)70個ほどが敷き詰められたような状態で出土した。その円礫の中に、石器・石製品は認められない。

遺物は、剥離・磨滅が極めて著しく細片が主体で、接合率が低い。この状況から、破碎した土器を廃棄したものと考えられる。遺物は、弥生時代終末期の二重口縁壺(47)・甕(50・51)・高坪(52・53)・甑(55)、古墳時代前期(布留式併行期)の土師器二重口縁壺(48)・高坪(54)・製塩土器脚台3式(56～59)25点、古墳時代後期の須恵器高坪脚部・壺などが出土した。032落ち込み遺構からは、総計1,758点の遺物が出土した。

これらの遺物から、032落ち込みは弥生時代終末期(庄内式併行期新段階)の遺物を含みつつ古墳時代後期にかけて埋積したものと考えた。下位層の遺物包含層第4層の最も新しい段階の埋積と然程時間を置かない堆積と考えられる。

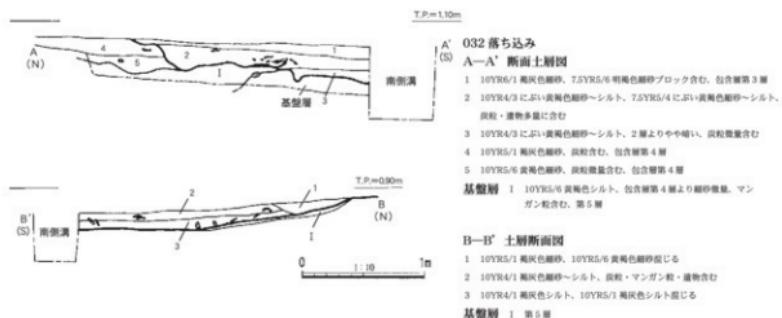


図19 第1次調査 032落ち込み断面図

001井戸(図20・23、表3、写真図版6・18)

001井戸は、調査区の北西隅I8-h24に位置し、掘形東西0.90m・南北1.00mの歪な隅円

方形状を呈する。四隅に直径 10cm ほどの杭を打ち込み、各辺 3 枚の板材を縦位に組んで井戸枠としている。井戸側は、東西 0.60m・南北 0.65m を測り、杭材と共に腐朽が著しく軟弱化し、板材として取り上げることができなかった。埋土は、7 層を検出し、残存の深さは 0.51m である。下層では粗砂となり湧水層に達する。上層の埋土に、20~40cm 大の緑泥片岩・砂岩の板石 6 枚が重なり埋没していた。それらを取り除くと奈良時代の土師器壺(60)に 7 × 8 cm 大の長石の円礫 1 点を入れた状態で埋設されており、井戸の廃絶に伴い祭祀を行ったものと考えられる。その他、井戸内埋土から土師器壺 1 点(61)・製塩土器(62) 4 点・須恵器壺(63) 1 点・平瓶(64) 1 点、桃核 3 点などが、裏込めから土師器壺 1 点・製塩土器 3 点が出土した。表 3 の層序要素 9 「第 1 遺構面検出遺構」の奈良時代の遺物の大半が 001 井戸からの出土である。

これらの遺物から、001 井戸は奈良時代の平城Ⅲ段階に帰属するものと考えられる。



図 20 第 1 次調査 001 井戸実測図

その他の第 1 遺構面検出遺構と出土遺物 (図 23)

柱穴・小穴 調査区東側で複数検出した。I 8-c25 の 007 小穴や I 9-b5 の 033 小穴などは柱穴と考えられる堆積状況である。周辺では建物を構成する柱穴は検出されていないが、調査区東側の微高地に何らかの建物が存在した可能性が考えられる。

K 遺構(図 23、表 3) K 遺構は、現地調査において攪乱と言う扱いで処理された不整形な土坑である。第 1 次調査区において 23 基検出した。遺構の規模は様々で、基底部は凹凸が著しい。埋土の土質は、第 2 層由来の灰白色シルト質土からやや粘質ものである。

しかし、出土遺物の検討の結果、遺構 K015 と調査区北西隅の攪乱が近現代の陶磁器・瓦を

含むのみである。その他のK造構からは、下位層の弥生時代前期の遺物から終末期・古墳時代・奈良時代の遺物を含みつつ、最も新しいと判断できた遺物は、瓦器碗(70)・瓦器小皿(71)・瓦質甕・東播系須恵質捏鉢などの鎌倉時代に帰属するものである。

機械掘削・側溝掘削土（図23、写真図版19）

機械掘削及び側溝掘削土からは、多くの弥生時代終末期の弥生土器・敲石(90)、古墳時代の土師器・須恵器坏蓋(67)・高坏(64)・有孔円盤(86)、奈良時代の土師器甕(65)、室町時代の白磁皿(69)と共に近世の多くの遺物が出土した。側溝から出土した遺物は、総計731点である。

南壁側溝掘削時に出土した遺物は、大半が弥生時代終末期の弥生土器で、僅かに古墳時代の土師器・須恵器が混じって出土した。側溝の位置と第1造構面の032落ち込み造構もしくは第2造構面の205自然流路と合致することから、この何れかの造構に帰属するものと考えられる。

遺物包含層 第3層関係（図23、表3、写真図版19）

遺物包含層第3層関係は、「包含層3層」・「包含層3層落ち」等の記載で認識され、遺物の取り上げが行われている。遺物包含層第3層は、主に第2造構面の205自然流路に重複する範囲から調査区北側に存在する傾向にある。遺物包含層第3層には、下位層の弥生時代前期の遺物から中期・終末期・古墳時代・奈良時代・鎌倉時代の遺物を含みつつ、最も新しいと判断できた遺物は、僅かな量7点の近現代の陶磁器(83)・瓦・寛永通宝などである。その遺物量（遺物包含層第3層関係の出土遺物全体の0.5%）から、近現代の遺物は上位層の掘り残しの混入とし、「包含層第3層」・「包含層3層落ち」は最も新しい鎌倉時代に形成された堆積層と考えた。

遺物は、弥生時代中期の直口壺(72)、サヌカイト製の凸基無茎式石鐵(85)、弥生時代終末期の各器種・古墳時代の土師器壺(73)・高坏(74)・製塙土器脚台3式(75・76)、須恵器坏身(79)・坏蓋(77・78)・無蓋高坏(80)・壺・甕・飛鳥時代の須恵器坏身(82)・平瓶(81)、鎌倉時代の瓦器碗・瓦質甕・東播系須恵質捏鉢などが出土した。包含層第3層関係からは、総計1,419点の遺物が出土した。

4 小結

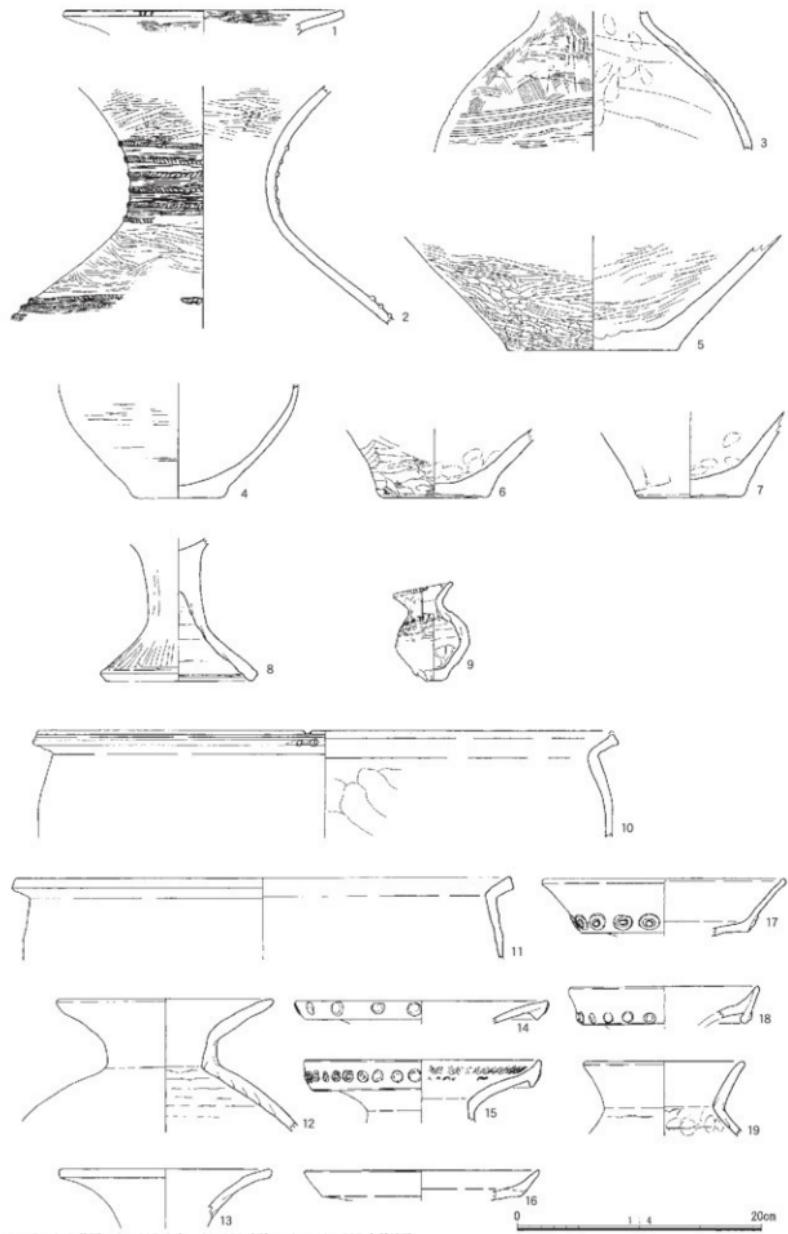
第1次調査は、遺物包含層第4層と基盤層第1層の上面を対象に造構検出を行った。平成9年に実施された調査と同様にイネ株とみられる植物痕が多数見られ、河南条里に伴う水田開発以降、連綿と水田として利用されてきたと推測される。調査地の北東から東側にかけては微高地が広がっており、この微高地上で弥生時代から中世の造構を検出した。

弥生時代の造構は、前期の土器が出土した018井戸や中期の037小穴・209土坑を検出した。また、調査地西側から南東側にかけて205自然流路を検出しており、出土遺物から弥生時代終末期～古墳時代前期にかけて埋没したものと考えられる。古墳時代の造構は、井戸や土坑・溝状造構を検出した。032落ち込みは、205自然流路の埋没後に掘削されたものと考えられる。古代の造構は、木枠の001井戸があり、遺物の埋設状況から井戸の廃絶に伴う祭祀を行ったものと考えられる。中・近世の明瞭な造構は確認できなかった。

これらの状況から、第1次調査地は僅かな微高地にも拘らず弥生時代前期から奈良時代にかけて生活の営みがあったものと考えられる。また、遺物包含層第3層関係の形成は、和田遺跡周辺においても耕地開発が鎌倉時代後半期であったものと判断できるものである。

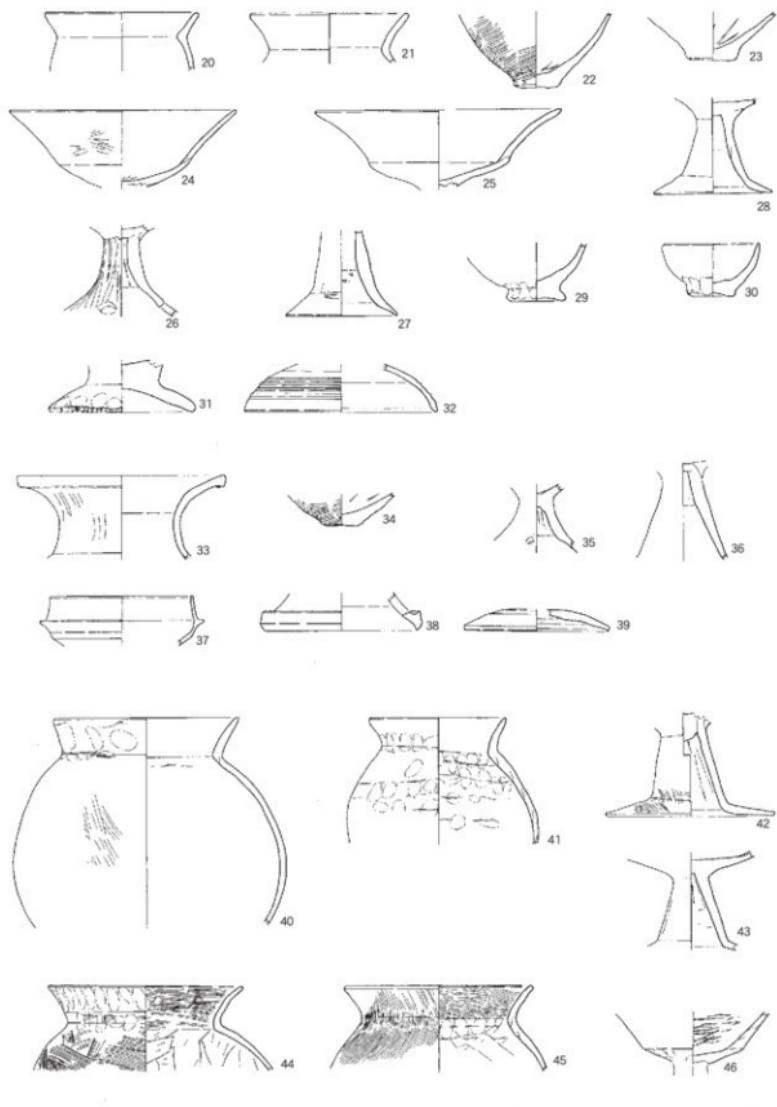
表3 第1次調査 各層序別遺物数量

層序 番号	各層序 年代	層文	發生前・中期			古墳 (布面式～)			飛鳥・奈良・平安			平安末・鎌倉・室町			江戸 (近代食器)			
			外土器 内陶器	内土器 外陶器	石器	小竹 小筒	骨器	金物 銀物	鐵物	瓦器	土器	織物	漆器	漆器	土器	織物	漆器	不明
1 遺物合層 第6層板	0	0	0	0	6	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7 内装物無し、1個?
2 遺物合層 第5層板	0	0	0	3	0	1	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4 置
小計	0	0	0	3	6	1	10	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11
3 018井戸	0	0	157	0	157	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	157 1脚戸
小計	0	0	157	0	157	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	157
4 第3層板外側遺物	0	0	0	10	22	0	32	14	1	0	1	0	1	0	0	0	0	48 下層板トラン
5 020自然遺物	0	0	0	74	4	82	5	4986	13	6	0	19	0	0	0	0	0	5089 ド、セミショウジョウ
6 家庭用トラン	0	0	0	0	0	0	0	401	1	1	0	3	0	0	0	0	0	4624 斧切トラン、セミショウジョウ
7 遺物合層 第4層板	0	0	0	64	26	4	154	5378	5	5383	16	7	0	23	0	0	0	0
小計	0	0	0	16	5	1	22	1587	0	1587	167	32	1	200	0	0	1	11 0
8 [025落5点分]	0	0	0	0	1	1	164	0	1584	190	3	0	193	0	0	0	0	0
9 第1層板外側遺物	0	0	0	6	6	0	12	73	0	73	241	0	0	241	58	0	13 0	
小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
10 遺物合層 第3層板	0	0	0	27	3	3	33	1153	2	1156	116	94	0	210	0	1	2	3 0 1 1 0
小計	0	0	0	27	3	3	33	1153	2	1156	116	94	0	210	0	1	2	3 0 1 1 0
11 水桶	0	0	0	1	0	0	1	99	0	99	74	24	0	98	10	9	0	28 0
12 X015	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
小計	0	0	0	1	0	0	1	99	0	99	74	24	0	98	10	9	0	28 0
13 陶器板	0	0	0	1	1	0	2	680	2	682	18	14	1	33	1	0	0	1 0 5 0 6 2 8 0 711 他種
14 滲出物地	0	0	0	4	0	0	4	62	3	16	0	19	0	0	0	0	1 0 2 6 13 9 28 0 115	
小計	0	0	0	5	1	0	6	742	2	744	21	30	1	52	1	0	0	2 0 7 6 19 11 36 0 846
合計	0	0	0	299	47	10	356	1587	9	1588	825	190	2	1017	69	10	24	0 2 105 13 27 1 2 1 2 1 48 23 35 15 73 8 12213



1~7 : 018 井戸、8 : 037 小穴、9 : 209 土坑、10~19 : 205 自然流路

図 21 第 1 次調査 出土遺物実測図 1



20 ~ 32 : 205 自然流路, 33 ~ 39 : 遺物包含層第4層, 40 ~ 43 : 011 井戸、
44 ~ 45 : 205 井戸, 46 : 204 井戸

図22 第1次調査 出土遺物実測図2

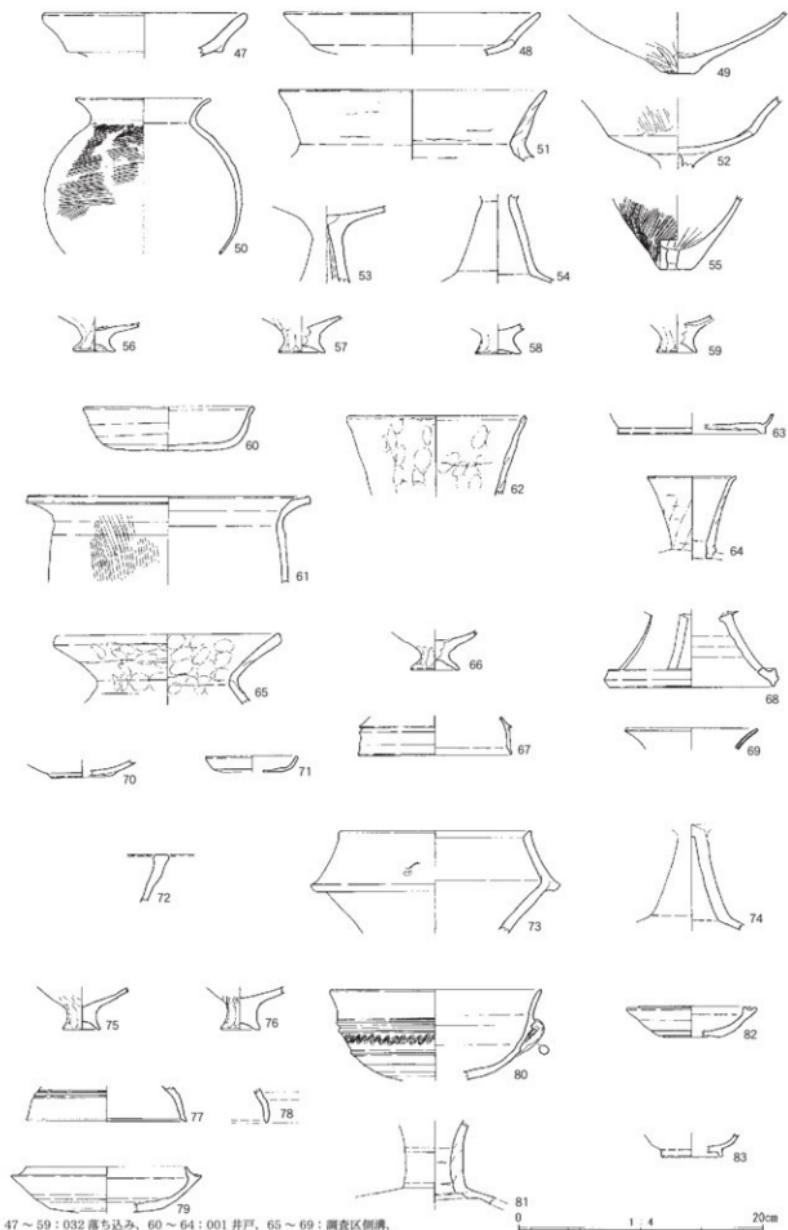
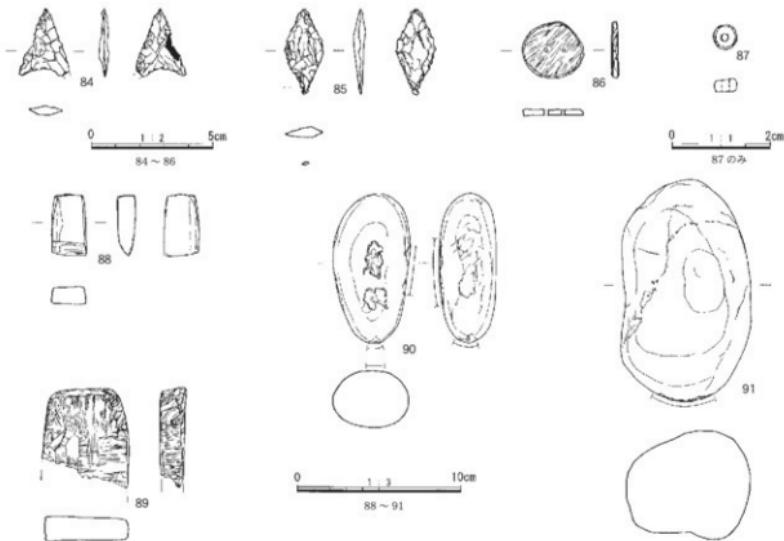


図 23 第1次調査 出土遺物実測図 3



84・87・89：遺物包含層第4層、85：遺物包含層第3層。
86・90：調査区側溝、88・91～93：205自然流路

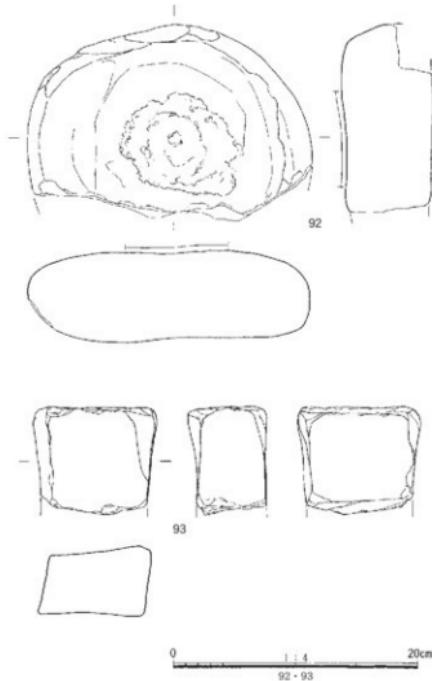


図24 第1次調査 出土遺物実測図4

第2節 第2次調査の成果

調査前の現況は、水田である。この水田の中央を流れる用水路の北東側を1区・2区、南西側を3区・4区と呼称して調査を実施した。遺構検出に当たっては、一部に遺物包含層も堆積していたが、殆どの範囲において後世の削平を受け消滅したと考えられる。遺構検出面直上の旧水田耕作土(第2層)からは、多くの遺物が出土した。

本調査では調査区の中央に現有の用水路が北から南に流れ、この北東側と南西側では遺構の在り方が大きく異なることが判明した。水路より北東側(1区・2区)では弥生時代～古墳時代にかけての自然流路が検出され、南西側(3区・4区)では弥生時代前期の土器廃棄土坑、弥生時代終末期の素掘り井戸、古墳時代の掘立柱建物・土器埋設土坑、奈良時代の井戸など直接生活に関わる遺構を検出した。なお、遺構全体平面図(図26)は、レイアウトの加減で1区・2区の第2遺構面と3区とを合わせて掲載する。

1 1・2区

(1) 調査の概要 (図26)

調査面積は、1区と2区を合わせて1,504m²である。遺構検出面は、標高約1.0mである。

調査は、2面を実施した。第2遺構面では自然流路を2条検出し、第1次調査で検出した205自然流路や上位層の032落ち込み遺構もしくは遺物包含層第4層に対応すると考えられる。

第1遺構面で検出した主要な遺構には、土坑2基(遺構2003・遺構2005)がある。調査区中央の2010自然流路の上位で2基ともに検出した。また、1区南端・2-2区北端では奈良時代の溝状遺構・土坑列などがある。

(2) 基本層序と遺構面 (図25、写真23)

基本層序を以下のとおり把握した。

基本層序

第0層：第0層は、水田耕作土の盛土である。

第1層：第1層は、近・現代の水田耕作土(第1a層)黄灰色のシルト～細砂と床土(第1b層)黄褐色～灰黄色のシルト～細砂に細分できる。

第2層：第2層は、図25及び写真23に出てこないが、ほぼ調査区全域にみられる。調査で



写真23 第2次調査2-1区 調査区西壁断面土層 (東から)

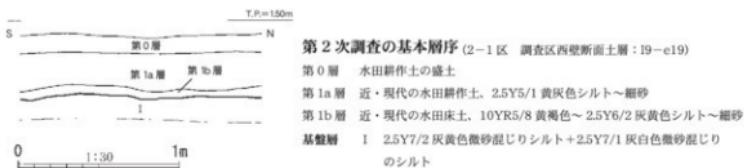


図25 第2次調査2-1区の基本層序 (調査区西壁断面土層: I9-e19)

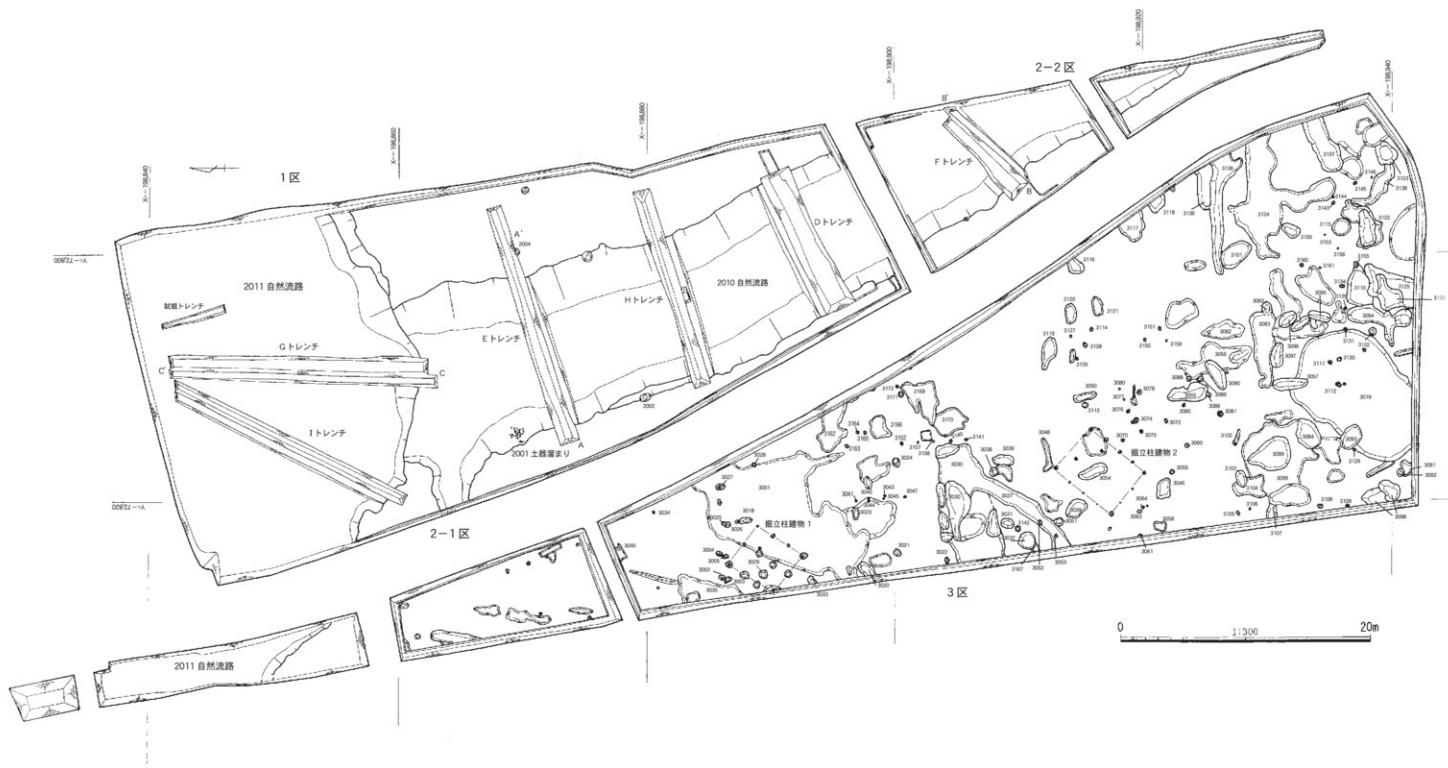


図26 第2次調査1・2区 第2遺構面、3区 遺構全体平面図

は近世以降の水田耕作土と考えられていた堆積層である。但し、出土遺物は、弥生時代終末期・古墳時代後期の遺物が主体となる。

基盤層

I 層：灰黄色+灰白色の微砂混じりシルトである。

遺構検出面（図 26）

掘削は、調査区の全域にわたり第2層以外の遺物包含層の存在が僅かしか認められなかつたため、地表面から遺構検出面上の10cmまでをバックホウを用いて掘削し、これより下位層は遺構面養生層（第2層）として人力で遺構検出面まで掘り下げた。遺構面養生層掘削後に遺構を検出し、手順に従つて遺構を掘削した。

2条の自然流路を検出した1区・2区については、調査区のほぼ全域に自然流路の範囲が及ぶため、範囲確認及びその下位層の土層堆積状況を確認するためにトレーニングを東西方向に4箇所（D・E・F・Hトレーニング）、南北方向に2箇所（G・Iトレーニング）設定して断面土層図を作成した。なお、自然流路より下位層の堆積層確認に至つては、遺構検出面から約1.2m下で砂層となり、崩落の危険を伴うため砂層の上層であるシルト～粘土層で掘削を断念した。

（3）各遺構の調査成果

以下、主な遺構について古い時代順に記述する。

1) 第2遺構面の検出遺構（図 26～28・34・35・37・38、表7、写真図版7・8・20・23）

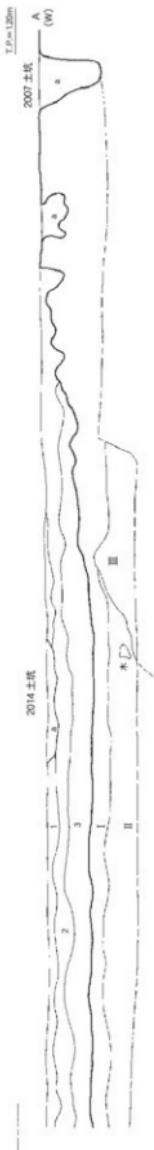
弥生時代の遺構は、中期及び終末期の弥生土器が出土した2010自然流路を検出した。また、2010自然流路の西側肩口で2001土器溜まりを検出しておらず、出土遺物から弥生時代終末期にかけて埋没したものと考えられる。

2010自然流路（図 26～28・34・35・37・38、表7、写真図版7・8・20・23）

2010自然流路は、1・2区のほぼ全域に延びる。検出するに当たって、下位層の確認のため東西方向のトレーニングを4箇所（D・E・F・Hトレーニング）、南北方向のトレーニングを1箇所（Gトレーニング）設定した。2010自然流路は、2-2区の南東側から1区・2-1区の北北西側に延び、検出延長約68mを測る。北側で2011自然流路と重複し、2011自然流路より古い。幅員11～14.5m、深さ0.33～0.58mを測る。埋土は大きく3～4層を検出した。色調及び土質は、南側（Fトレーニング）では主に5YR 5/1～5YR 6/1褐色シルト質である。肩となる基盤層は10YR 7/8黄橙色シルト質である。西側の肩口19-d18では、狭小な範囲で2001土器溜まりを確認した。

遺物は、最下層・下層と中層・上層で組成が異なる。最下層・下層では弥生時代中期の紀伊IV-1様式が主体となる。それに対して、中層・上層では、弥生時代終末期の遺物が主体となる。下位層・上位層共に、1区南端H9-x・y 24・25～I 9-a 24・25にかけて中期の遺物量が多い傾向にある。また、1区上層において古墳時代の須恵器1点、2-2区上層において古墳・奈良時代の須恵器19点、古墳時代の土器12点（2010自然流路中層・上層の出土遺物全体の2.0%）、下層においても古墳・奈良時代の須恵器9点（2010自然流路最下層・下層の出土遺物全体の3.1%）が出土したが、上位の第2層や2-2区2021溝状構造・土坑列の掘り残しと考えられる。

最下層・下層の遺物は、紀伊IV-1様式の広口壺（95～99）、高杯（100）、鉢（103）、把手付鉢（104）、器台（105）、サヌカイト製の石蹴（178）、緑泥片岩製の石庖丁（185）などが出土した。



Eトレンチ断面土層図

2014.土壤 (08-18)・2014.土壤 (09-15)・2007.土壤 (09-01)

a SYD72赤色シルト+25%GL黄褐色シルト

b SYD72灰リーブ色シルト

2010.自然流路

1 25%GL黄褐色シルト+100%GL1切削面色シルト

2 100%GL黄褐色シルト、表面にぼかくに10-25%GL黄褐色シルトのブロックが多くなる

3 100%GL黄褐色シルト+100%GL灰褐色シルトが混在する

■ SYD74リーブ色シルト+SYD74灰リーブ色シルト

■ 100%GL黄褐色シルト+N50/1灰褐色シルト

■ 100%GL黄褐色シルト+N50/1灰褐色シルト

図 27 第2次調査1・2区 2010自然流路Eトレンチ断面土層図



Fトレンチ断面土層図

2010.自然流路

1 SYD74灰リーブ色シルト+SYD74灰リーブ色シルト

2 100%GL黄褐色シルトと100%GL黄褐色シルトの混在

3 N50/1灰褐色シルト

4 2に近いでもあるが、細粒分合て黄褐色シルトの力が多い

■ 100%GL黄褐色シルト+100%GL黄褐色シルト+10-15mm大のブロックを含む

■ N50/1灰褐色シルト+N50/1灰褐色シルト+粘土

図 28 第2次調査2・2区 2010自然流路Fトレンチ断面土層図

中層・上層の遺物は、紀伊 I 様式の蓋(117)、紀伊 II 様式の紀伊形甕、紀伊 IV-1 様式の広口壺(107・109)・細頸壺・甕(112～114)・高坏(115・116)、弥生時代終末期の広口壺(108・110)・二重口縁甕(111)・高坏・鉢、サヌカイト製の石鏃(181)・スクレイバー(182)、砂岩製の敲石・凹石(192)、綿尾片岩製の敲石・磨石などが出土した。

さらに、2010 自然流路の堆積層より下位で紀伊 III-3 様式の広口壺(94)が出土した。このことは、調査で明らかにできていないが、2010 自然流路の下位に重複する自然流路の存在を示唆するものである。

2001 土器溜まり(図 26・35、写真図版 8・20)

2001 土器溜まりは、2010 自然流路の北端西肩 I

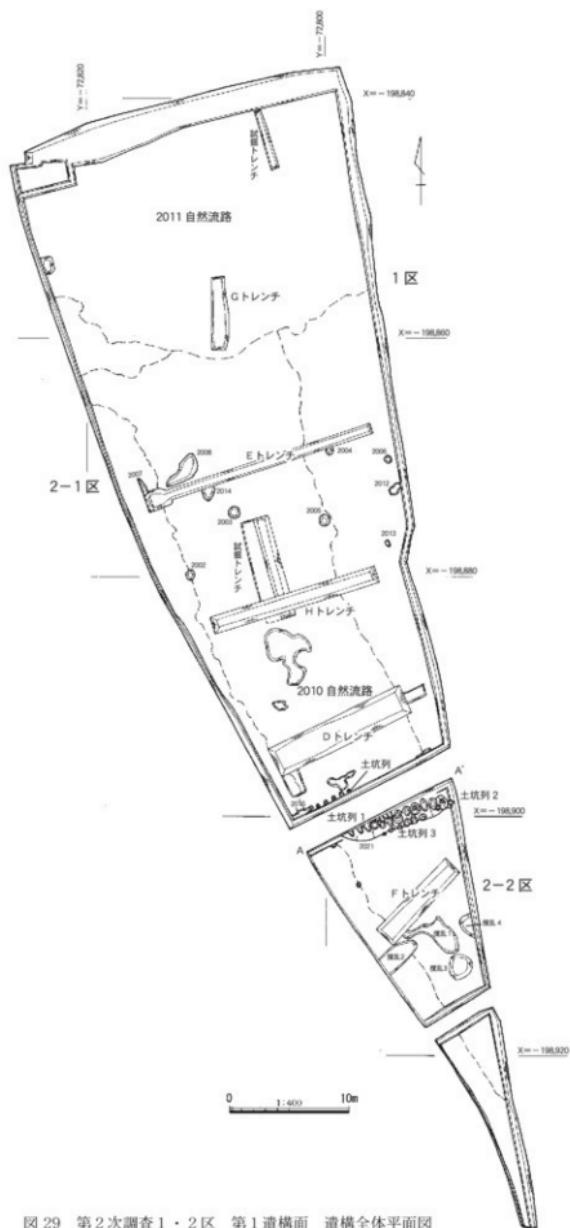


図 29 第2次調査1・2区 第1遺構面 遺構全体平面図

9-d 18に位置し、東西約2.0m・南北約1.0mの範囲に集中する。遺物は、流路の西側から投棄された状態で出土した。遺物には、僅かに弥生時代中期の紀伊IV-1様式の壺3点を含むものの、大半が弥生時代終末期の広口壺(118・119)・甕(120)・高杯(121)などの土器(小計604点)、敲石(191)2点で占められる。

2) 第1遺構面の検出遺構(図29・35~38、写真図版9・10・21~23)

当項では、調査結果により2010自然流路の堆積層より上位で検出した遺構について、便宜上第1遺構面での検出遺構として記述する。

2005土坑(図30、写真図版10)

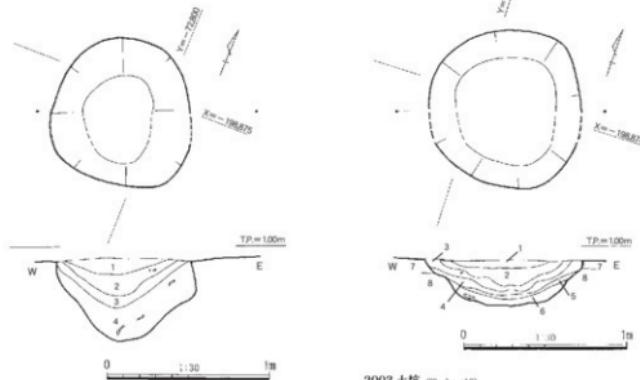
2005土坑は、調査区の中央東寄りH9-y19・19-a19に位置し、短軸東西0.84m・長軸南北0.90mのやや歪な円形を呈する。2005土坑は、2003土坑同様に遺物包含層第2層の除去面で検出した。2010自然流路の埋没後に、上位に掘削された土坑である。断面形は、歪なU字形を呈し、残存の深さは0.51mを測る。埋土は、レンズ状に堆積し、4層を検出した。色調及び土質も2003土坑と酷似する。なお、上位から3層目に厚さ8cmの炭層が堆積し、4層目に3~5cmの長さの炭化物(炭片)が少量入る。一見、弥生時代終末期の竪穴建物の炉跡のような感がある。そのため周辺を精査したが、竪穴建物の炉跡となる確証には至らなかった。遺物は、細片であるが、弥生時代終末期の土器43点が出土した。

これらの遺物と2003土坑との類似性から、2005土坑は2010自然流路の埋没後、然程時間を置かない弥生時代終末期に帰属するものと考えられる。

2003土坑(図31、写真図版10)

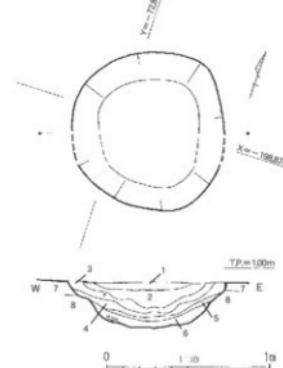
2003土坑

坑は、調査区の中央I9-b・c19に位置し、短軸東西0.93m・長軸南北1.00mのほぼ円形を呈する。2003土坑は、2005土坑同様に遺物包含層第2層の除去面で検出した。



2005土坑(09-y19-19-a19)
1 2SY6/2 黒褐色シルト、マンガン粒を多く含む。鐵分沈着
2 2SY3/1 黑褐色粘質シルト、土層を少量含む
3 2SY2/1 黒色粘質土、縫まり前、炭化物を多く含む
4 2SY4/2 緋灰黒褐色粘質シルト、縫まり後

図30 第2次調査1区 2005土坑実測図



2003土坑(09-b-c19)
1 2SY8/2 黒褐黄色シルト、マンガン粒を少量含む。鐵分沈着
2 2SY3/2 黑褐色粘質シルト、縫まりやや弱い
3 2SY2/1 黑色粘質土、縫まり前、炭化物を多く含む
4 2SY3/2 黑褐色粘質土、縫まりやや強め
5 2SY1/1 黑色粘質土、縫まり前、炭化物を多く含む
6 2SY4/1 黑褐色粘質シルト、縫まりやや弱い
2010自然流路
7 2SY6/6 黑褐色シルト+10BG7/1 明青灰色シルト
8 10BG6/1 黑灰色シルト

図31 第2次調査1区 2003土坑実測図

後に、上位に掘削された土坑である。断面形は、浅いU字形を呈し、残存の深さは0.28mを測る。埋土は、レンズ状に堆積し、6層を検出した。色調及び土質は、全体的に暗灰色～黒褐色を呈し、シルト質～粘質土である。上から3層目と5層目に炭層が認められ、一見、弥生時代終末期の竪穴建物の炉跡のような感がある。2005土坑同様、この土坑の周辺を精査したが竪穴建物に伴う柱穴や壁溝を確認するには至らなかった。遺物は、細片であるが、弥生時代終末期の土器11点、弥生時代終末期もしくは古墳時代の土師器と考えられる土器5点、縄蓆文のある陶質土器1点、須恵器壺1点が出土した。

遺物の内、縄蓆文のある陶質土器と須恵器は、2003土坑での出土層位が不明である。出土層位が不明とはいえ、縄蓆文のある陶質土器は2011自然流路下層から5点、上層から17点が出土したことと関係を有するものと考えられる。同一個体かどうかは断定し難いが、埋没過程における時間的な併行関係を有するものである。

これらの遺物と層序関係から、2003土坑は2010自然流路の埋没後、然程時間を置かない弥生時代終末期に帰属し、古墳時代前・中期にかけて埋没した可能性がある。

2011自然流路（図32・35～38、表7、写真図版9・21～23）

2011自然流路は、1・2・3区の北端を東西に延びる。検出するに当って、下位層の確認のため南北方向のトレーンチを2本(G-Iトレーンチ)設定した。第1次調査の205自然流路と繋がるものと考えられ、205自然流路と合わせて南北幅員約27m、残存の深さは最も深い部分で0.55～0.69mを測る。第2次調査では、この南肩を検出したことになる。3区を含めた東西検出延長約38m(205自然流路と合わせて南北検出延長約64m)を測る。埋土は、基本的に3層に分層でき、上層から順に、10YR6/3にぶい黄橙色シルト(1・2層)、N5/0灰色粘土(3層)、10G4.5/1暗緑灰色シルト～粘土(4層)である。平面の検出状況及び断面土層から2011自然流路には、新旧が存在することが判明した。上位(新)の堆積層は1～4層、下位(旧)の堆積層は5・6層となる(図32)。また、新旧の2011自然流路は、重複関係から2010自然流路(7層)より新しい。

遺物は、2011自然流路の新(上層・中層)旧(下層)で組成が異なる。下層では、弥生時代前期・中期の遺物23点(2011自然流路下層の出土遺物全体の4.7%)、多くの弥生時代終末期の遺物159点(同32.8%)と共に古墳時代の遺物303点(同62.5%)が主体となる。その中でも、古墳時代前期・中期が主体となる。上層・中層では、弥生時代前期・中期の遺物26点(2011自然流路上層・中層の出土遺物全体の1.6%)、多くの弥生時代終末期の遺物503点(同31.6%)と共に古墳時代の遺物1,059点(同66.6%)が主体となる。

下層の遺物は、弥生時代の紀伊III-3様式の広口壺(123)、紀伊IV-1様式の直口壺(124)・高环(129)、弥生時代終末期の甕(126)、砂岩製の敲石(187)、古墳時代の土師器二重口縁壺(125)・甕(127・128)・高环(130～132)、須恵器高环(133)などがある。高环(132)は、搬入品と考えられるが、地域を特定できていない。下層の遺物の内容から判断して、弥生時代終末期以降に、2011自然流路の流向によって下位層の2010自然流路が浸食されたものと考えられる。

中層・上層の遺物は、弥生時代終末期の広口壺(134・135)・二重口縁壺(136)・甕(138・139)・高环(141・142)、サヌカイト製の石鎌(179・180)・スクレイバー(183・184)、砂岩製の敲石(188)・縁泥片岩製の敲石(190)など、古墳時代の土師器二重口縁壺(137)・甕(140)・高环(143～147)、須恵器环身(151)・环蓋(148～150)・甕(152)・高环(153)などがある。縄蓆文のあ

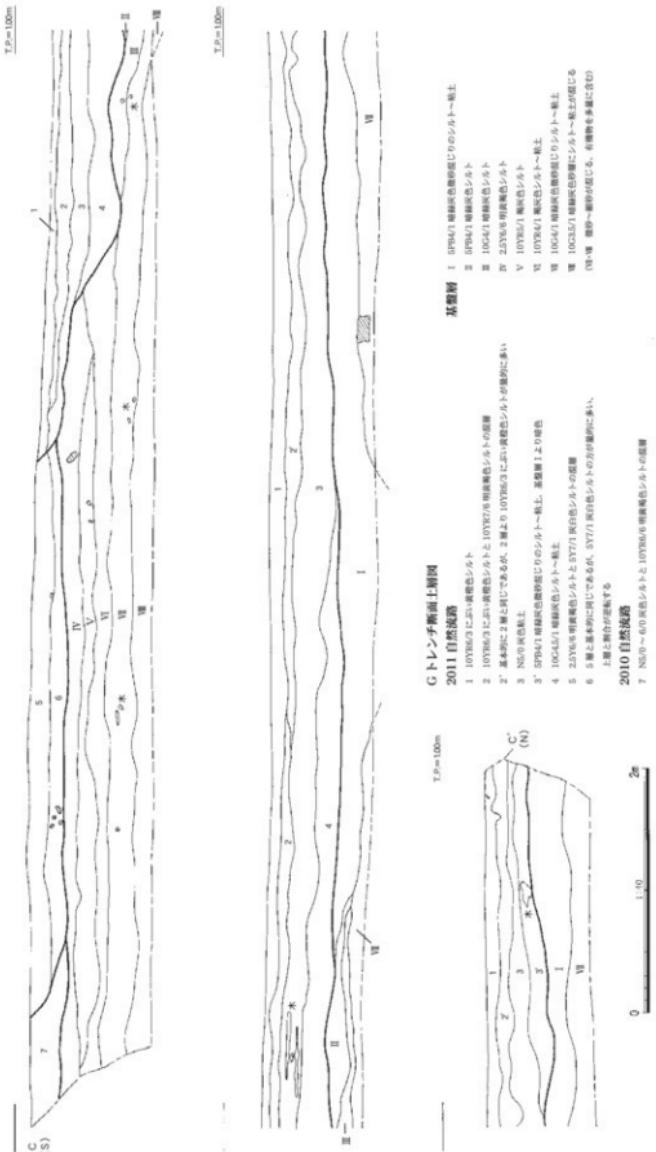


図32 第2次調査2-1区 2011自然流路Gトレンチ断面土層図

る陶質土器は2011自然流路下層から5点、上層から17点が出土した。何れも同一個体の可能性が高い。

2021溝状遺構・土坑列(図33・36、表4、写真図版10・22)

2021溝状遺構は、2-2区の北端に位置し、土坑列と重複する。土坑列は、1・2-1区の南端と2-2区の北端に位置する。遺構の重複関係から、2021溝状遺構が古く、土坑列が新しい。遺物(表7-層序要素7)は、飛鳥時代から奈良時代にかけての土師器・須恵器が442点、黒色土器(161)・瓦器(162)が19点出土した。調査では明確にできていないが、黒色土器・

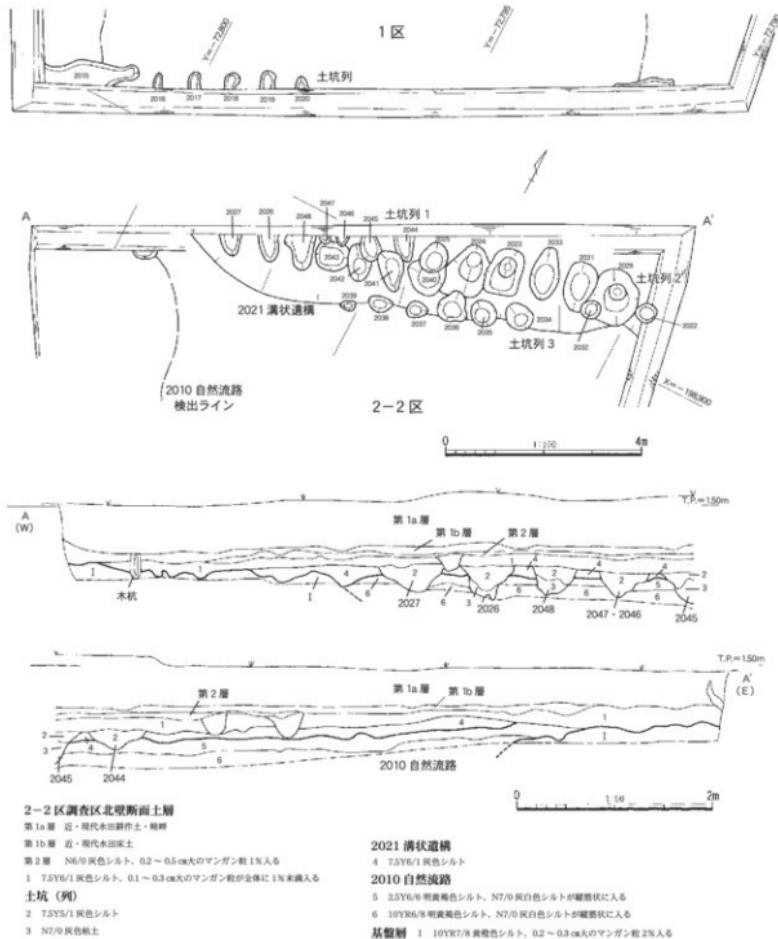
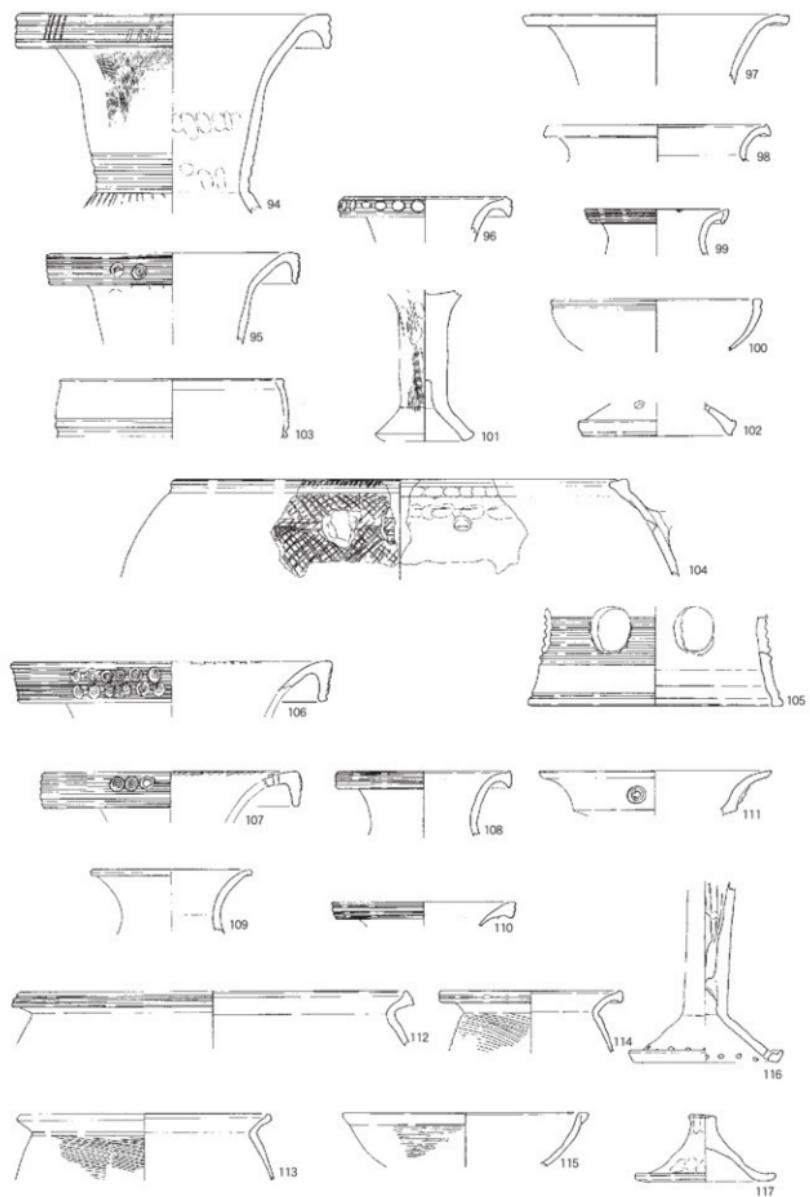
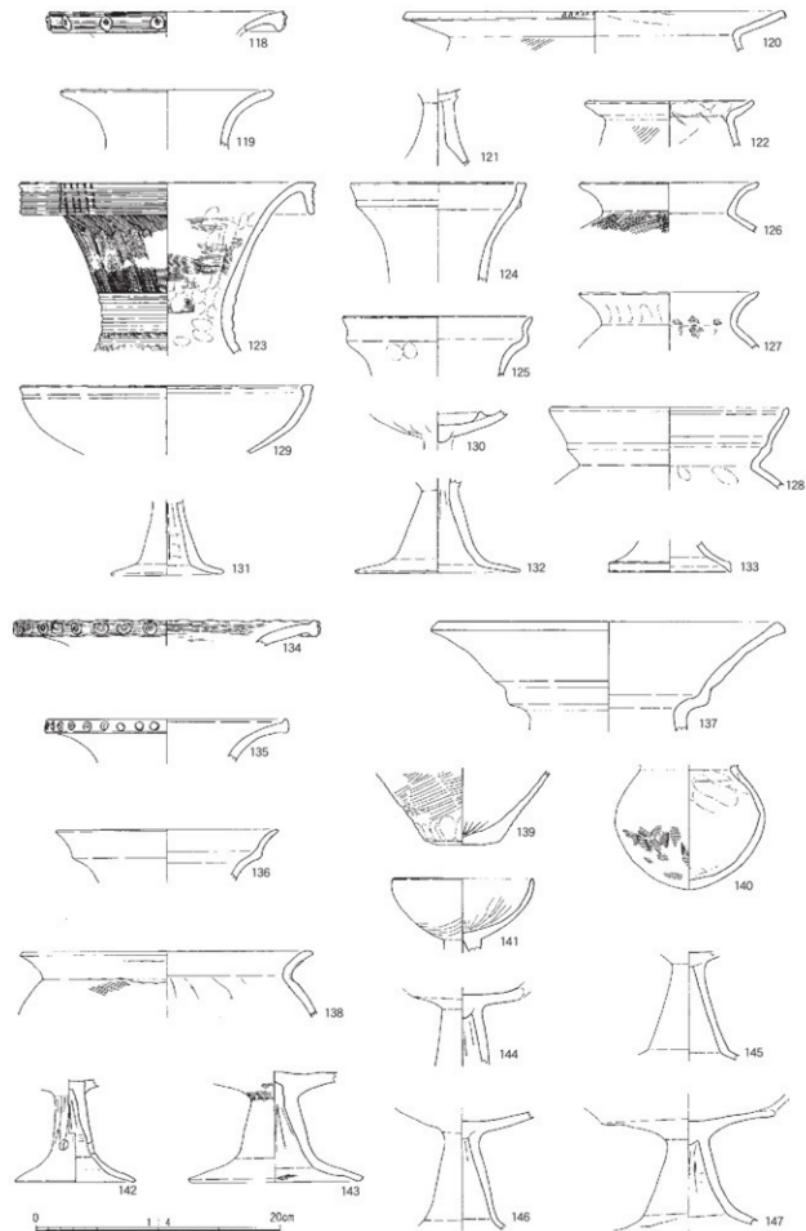


図33 第2次調査1・2-2区 2021溝状遺構・土坑列実測図



94 : 2010 自然流路より下位層、95 ~ 105 : 2010 自然流路下層、
106 : 2010 自然流路中層、107 ~ 117 : 2010 自然流路上層・層位無し

図 34 第2次調査 1・2区 出土遺物実測図 1



118～121：2001 土器柄まり、122：2005 土坑、123～133：2011 自然流路下層、134～147：2011 自然流路上層・層位無し

図 35 第2次調査1・2区 出土遺物実測図2

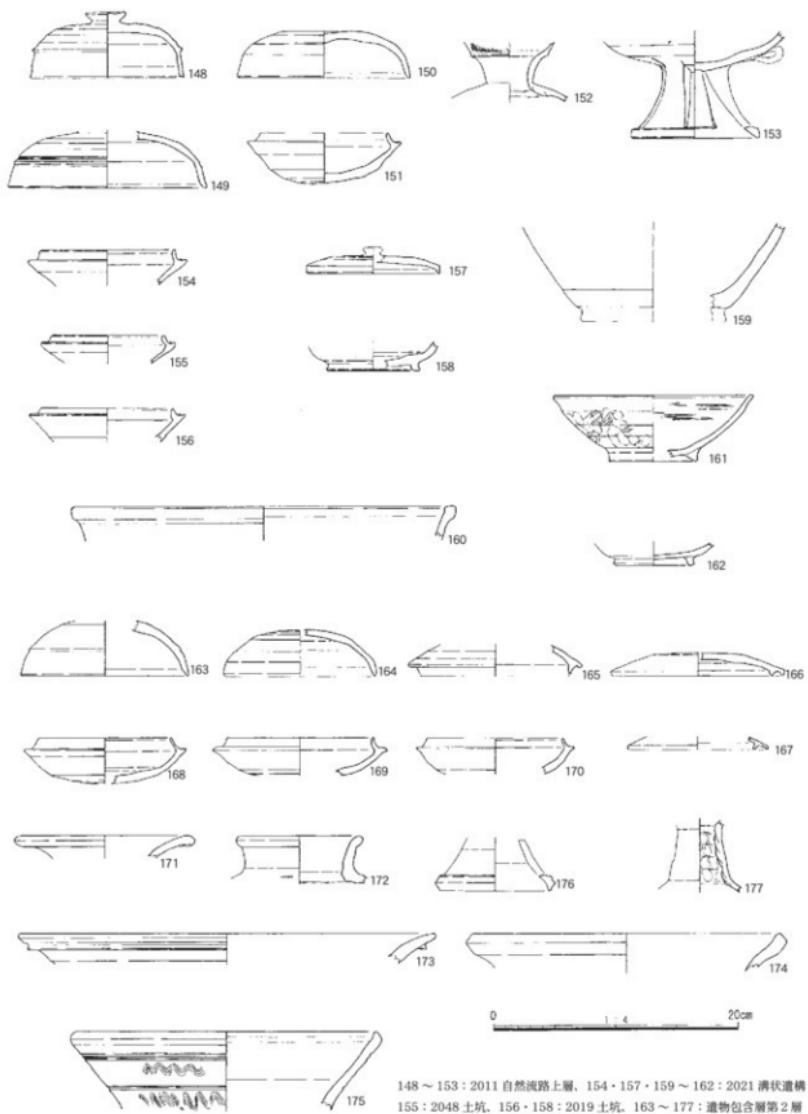


図 36 第2次調査 1・2区 出土遺物実測図 3

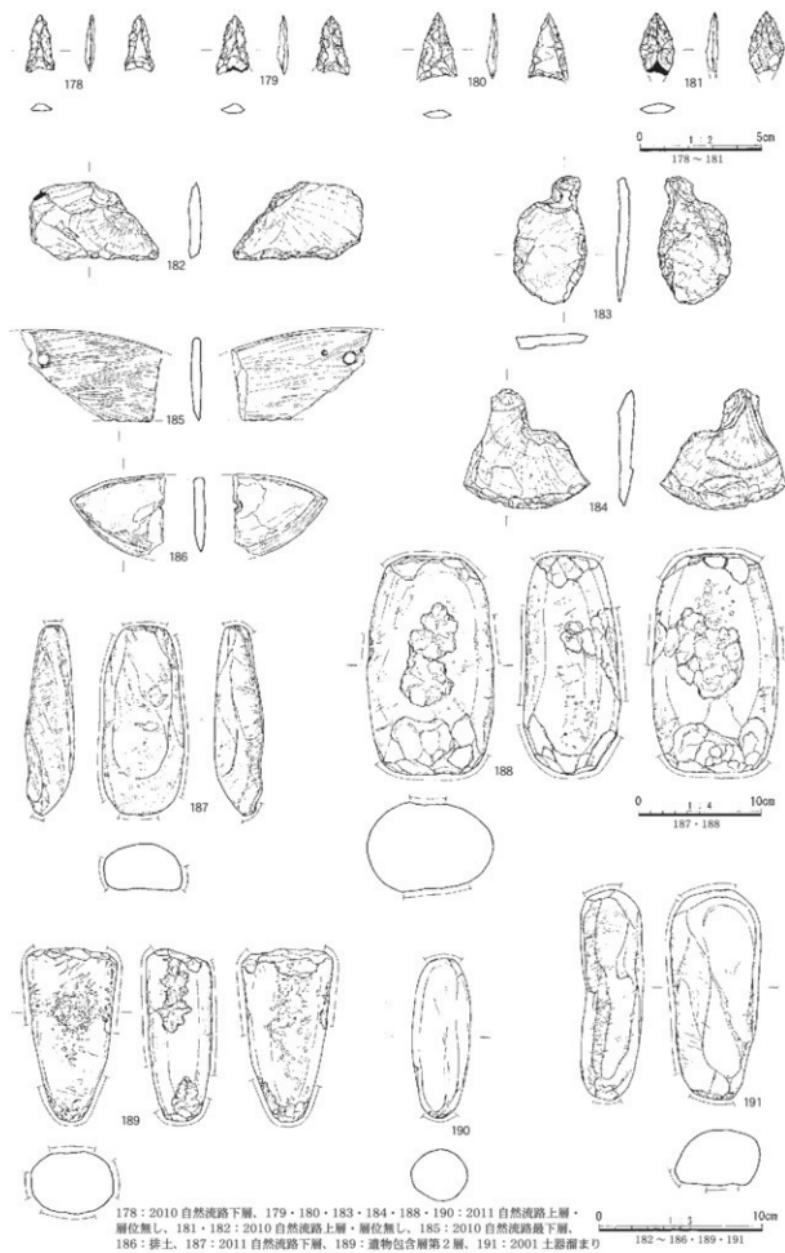


図 37 第2次調査1・2区 出土遺物実測図4

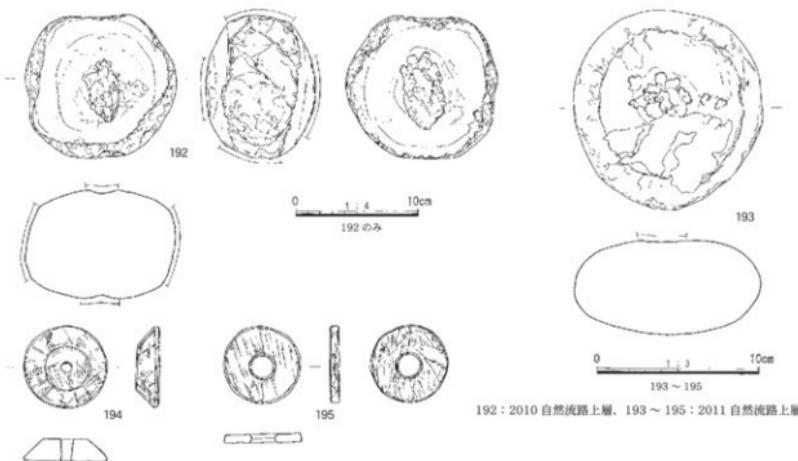


図38 第2次調査1・2区 出土遺物実測図5

表4 第2次調査1・2-2区 土坑列一覧

遺構番号	地区	中区分 H9 H10	小区分 y25 x25 w・x・y1 w・x・y2	土坑(小穴)番号	平面形と特徴	断面形と特徴	規模(m)				備考 (遺構の重複関係・埋土等)
							最小	最大	深さ	出土経緯	
土坑列	1区	H9 H10	y25 x25	2016~2020 (西)(東)	直な楕円形 断面図なし 不明	0.20 × 0.35以上	0.35 × 0.40以上	0.07~0.14	3.30	東北東 西南西	南側は削溝で不明、調査地外に詰びる。
土坑列1	2-2区	H9 H10	x25 x・y1	2025~2026~2027 (東)(西) 2044~2047~(2048)	ほぼ円形~ 直な楕円形 断面図なし 不明	0.21以上 × 0.26	0.53 × 0.62	0.04~0.20	4.20	東北東 — 西南西	北側は削溝で不明、調査地外に詰びる。 2046は、南北に大きいため、土坑列1と見なす。入土する土量が少ないので、土坑列1~3に入土するものはない。各遺構横断面はレールから深い溝。
土坑列2	2-2区	H9 H10	w・x・y25 w・x・y1	2028~(2029)~2031~2033~2023~ (東) 2024~2040~2043~(2048) (西)	直な円形~ 直な楕円形 断面図なし 不明	0.55 × 0.68	1.01 × 1.15	0.11~0.37	6.70 (7.50)	東北東 — 西南西	2028年内に2029がある。 2029は、南北に大きいので、土坑列1~3に入土する可能性がある。 1.0mに入る可能性があり、(7.50m)は、2048を含んだ場合の証拠。 層位は1層、土色は異なる。
土坑列3	2-2区	H9 H10	w・x・y25 w・x・y1	(2022~2032?)~2034~2036 (東)(西)	(ほぼ円形) 直な円形~ 直な五角形 断面図なし 不明	0.30 × 0.36	0.63 × 0.68	0.36~0.68	4.10 (6.40)	東北東 — 西南西	2022~2032は、土坑列の並びから少し離れていたため、土坑列3に入土する可能性がある。 (6.40m)は、2022~2032を含んだ場合の証拠。 2024~2025は、2021の南側土壠場の間に土坑の南側がかかる。

瓦器碗は、上位層からの混入と考えられる。

遺物包含層 第2層関係 (図36・37、表7、写真図版22・23)

遺物包含層第2層関係の堆積層は、調査区1・2区のほぼ全域に認められる。遺物(小計2,150点)は、弥生時代前期・中期31点(14.4%)、終末期804点(37.4%)、古墳時代1,297点(60.3%)、飛鳥・奈良時代11点(0.5%)、鎌倉時代5点(0.2%)、江戸時代2点(0.1%)である。遺物の主体は古墳時代後期であり、須恵器壺身(168~170)・壺蓋(163・164)・高杯(176)・甕(173・175)などがある。他に、飛鳥・奈良時代の須恵器壺蓋(165~167)・甕(174)などがある。

2 3区

(1) 調査の概要 (図 26、写真図版 11)

3 区も調査前の現況は、水田である。調査面積は 1,549m²である。遺構検出面は、1・2 区同様に標高約 1.0m である。

1 区・2 区と南北の水路を隔てた 3 区では、弥生時代前期の土器廃棄土坑、終末期の素掘り井戸、古墳時代の掘立柱建物・土器埋設土坑、奈良時代の井戸などを検出した。今回の調査全体を通して最も遺構密度の高い地区である。

基本的に現床土直下が遺構検出面となるが、一部に N 7/0 灰白色微砂混じりシルト層の堆積が確認できる箇所もある。

(2) 基本層序と遺構面 (図 39、写真 24)

基本層序を以下のとおり把握した。

基本層序

第1層：第1層は、近・現代の水田耕作土及び畦畔に係る盛土(第1a層)黄灰色のシルト～細砂と床土(第1b層)灰黄色のシルト～細砂に細分できる。

第2層：一部で N 7/0 灰白色微砂混じりシルト層の堆積が認められるが、層厚を成さない程度である。

第3層：遺物の取り上げの中に第3層と記述されたものが少数存在する。弥生時代から古墳時代の遺物を主体とするが、その性格・範囲等は明確でない。

基盤層

第I層：青灰色のシルト～細砂である。一部において 10 YR 7/8 黄橙色微砂混じりシルトの範囲も認められる。

第II層：青灰色の細砂～シルトである。

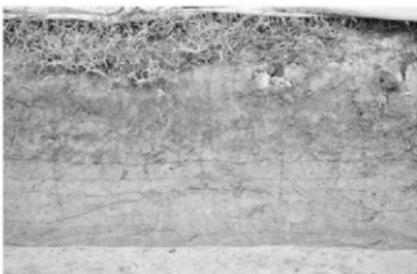
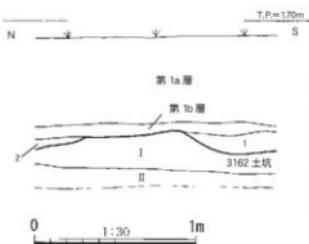


写真 24 第2次調査3区 調査区東壁断面土層(西から)



第2次調査の基本層序 (3区 調査区東壁断面土層: I 9-c24)

- 第1a層 近・現代の水田耕作土・畦畔、2.5Y5/1 黄灰色シルト～細砂
第1b層 近・現代の水田床土、10YR5/8 黄褐色～2.5Y6/2 灰黄色シルト～細砂
3162 土坑 1 N6/0 灰色シルト～細砂
土坑? 2 10Y7/1 灰白色シルト～細砂+基盤層Ⅱのブロック含む
基盤層 I 5B6/1 青灰色シルト～細砂、2.5Y4/3 オリーブ褐色酸化土壤を
縦筋状に多量含む
II 5B6/1 青灰色細砂～シルト、2.5Y4/3 オリーブ褐色酸化土壤を
縦筋状に多量含む

図 39 第2次調査3区の基本層序 (調査区東壁断面土層: I 9-c24)

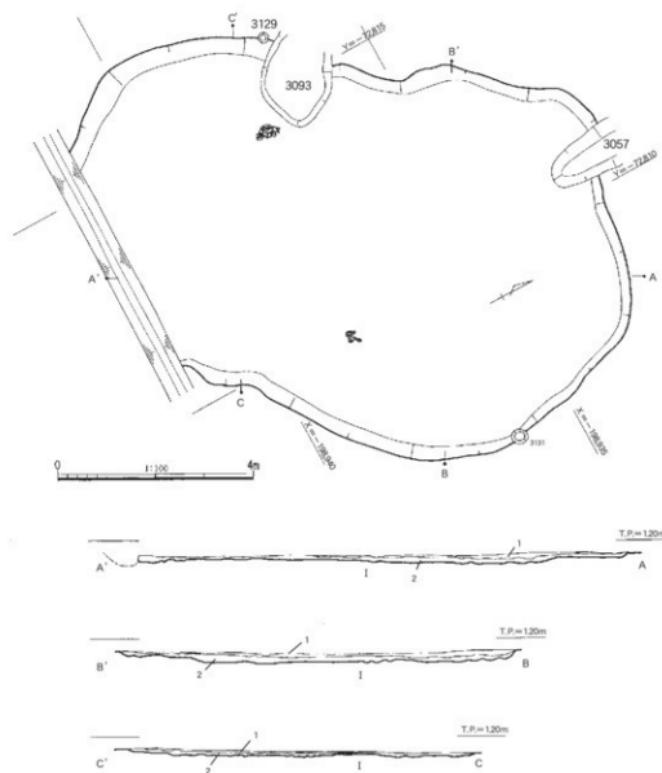
遺構検出面

掘削は、1区・2区同様に調査区の全域にわたり第2層以外の遺物包含層の存在が僅かしか認められなかつたため、地表面から遺構検出面上の10cmまでをバックホウを用いて掘削し、これより下位層は遺構面養生層(第1b層)として人力で遺構検出面まで掘り下げた。遺構面養生層掘削後に遺構を検出し、手順に従つて遺構を掘削した。

(3) 各遺構の調査成果 (図26・40~54、表5・7、写真図版11~14・24~28)

以下、主な遺構について古い順に記述する。

3019土坑 (図40・50、表5・7、写真図版12・24)



3019 土坑 010-59・10, c・d8～11, e10・11
 1 10YRR/1 灰白色砂疊泥じりシルト
 2 10YRS/1 黄褐色シルト、10YRR/6 黄褐色シルトの径2～5cm大のブロックをまばらに含む
 0.5～2cmの礫片を微量に含む
基盤層 1 10YRR/6 黄褐色シルトにNs/0 灰白色シルトが縦断状に入る

図40 第2次調査3区 3019 土坑実測図

3019 土坑は、調査区の南端 I 10-c・d 9~11 を中心とした位置で検出した土坑である。短軸北西－南東 7.15~8.15 m・長軸北東－南西 11.95 m 以上の歪な楕円形を呈する。残存の深さは 0.23~0.30m を測り、基底面は若干の凹凸が認められる。埋土は 2 層に分層でき、ほぼ水平気味の堆積をなす。上層は 10 YR 8/1 灰白色微砂混じりシルト、下層は 10 YR 5/1 褐灰色シルトが堆積する。遺物は、上層・下層の区別なく、弥生時代前期の土器が多量に出土した。土器の遺存状況は悪く、器面の剥離・磨滅が著しい。遺物の出土状況から土器廃棄土坑としての性格が窺える。

遺物は、紀伊 I - 2 様式を主体とした広口壺(196~201)・壺肩部(202)・壺底部(204)・変容壺(203)、甕(209~216)・甕底部(217~219)、甑(220)などと共に突帯文系土器深鉢(206~208) 3 点が出土した。弥生土器 1,719 点の内、口縁部・肩部で文様構成との関係を把握できたものは 117 点である。表 5 に示したとおり、壺の削り出し突帯に伴う籠描沈線文の条数は 1 条に止まる。籠描沈線文のみで構成される壺は、3 条が最多となる。甕の籠描沈線文の条数にはバラつきが認められるが、4 条が最多となる。これらのことと含めて、3019 土坑出土の弥生土器は、県内でも比較的古い段階の紀伊 I - 2 様式の一括資料と判断することができる。

但し、遺物に古墳時代の須恵器 5 点が混在している。

表 5 第 2 次調査 3 区 3019 土坑出土の弥生土器文様構成

器種	壺			甕			深鉢		
	沈線文条数	沈線文条数	沈線文条数	沈線文条数	沈線文条数	沈線文条数	口唇部刻み	口唇部刻み	口唇部刻み
削り出し突帶	15	0 条	4	0 条	23	刻み有り	4	0 条	0
削り出し 突帶 + 沈線文	1 条	19	1 条	6	1 条	1	刻み無し	39	1 条
	2 条	0	2 条	9	2 条	11			2 条
	3 条	0	3 条	21	3 条	6			3 条
	4 条	0	4 条	0	4 条	2			4 条
合計	34		40		43		43		3
器種合計	120	壺	74	61.7%	甕	43	35.8%	深鉢	3
									2.5%

(※口縁部～体部を主体とした破片集計)

その他の弥生時代前期と考えられる遺構 (図 51、表 7、写真図版 25)

その他、出土遺物から弥生時代前期と考えられる遺構には、3038 土坑(遺物点数 11 点)、3048 土坑(8 点)、3050 土坑(34 点)、3054 土坑(48 点)、3086 小穴(2 点)、3093 土坑(73 点)、3099 土坑(35 点)、3104 土坑(15 点)、3135 小穴(6 点)などがある。何れも遺物量は少ないが、突帯文系土器深鉢 3 点を含めて、小計 232 点が出土した。3099 土坑から広口壺(222)、3104 土坑から籠描沈線文間に横位の笠先刺突文を施す甕(223)、3135 小穴から突帯文系土器深鉢(221)などが出土した。甕(223)は、3099 土坑出土土器と接合関係に有る。また、甕(223)と類似する文様構成をもつ土器は、3019 土坑から 4 点出土した。これらのことから、ここに示した土坑・小穴から出土した遺物(表 7 - 順序要素 11)は、3019 土坑から出土した遺物と併行する段階の所産と考えられる。

また、弥生時代前期の遺物そのものは、3 区の中央から南西寄りの古墳時代の遺構の埋土から散在的に出土する傾向にあり、大半が上記した段階と併行するものと考えられる。

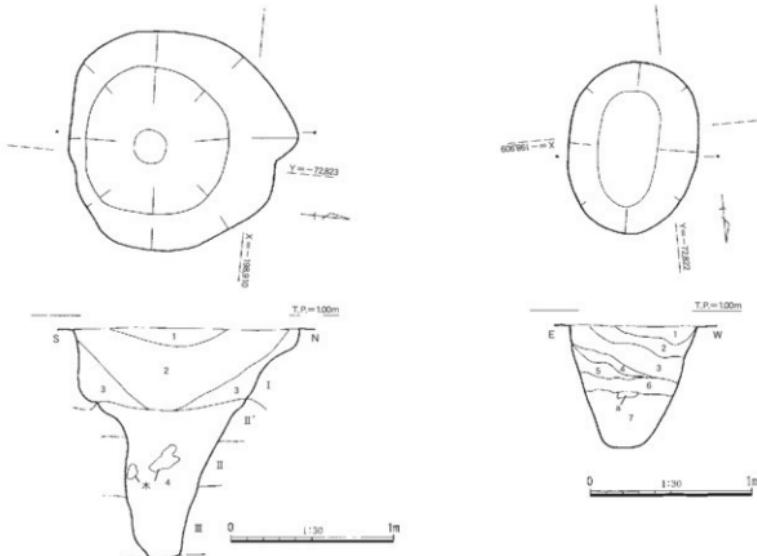
3032 井戸 (図 41・51、写真図版 12・25)

3032 井戸は、調査区の西端南寄り I 10-f3 に位置し、短軸東西 1.35 m・長軸南北 1.40 m の歪な円形を呈する。断面形は、南側面で二段落ちの深いU字形を呈し、残存の深さは 1.38 m を測る。埋土は、4 層を検出し、検出面から中位までは 10 YR 4/1~10 YR 5/1 褐灰色シルトの3層がレンズ状に堆積する。それより下位は、基底部まで N 3.5/0 暗灰色シルト～粘土の單一層で水平堆積をなす。遺物は、弥生時代前期・中期の土器 10 点と共に、弥生時代終末期の広口壺(224~226)・壺体底部(227・228)・甕底部(229)・鉢(230)など 93 点、その他桃核 1 点が出土した。口縁部を欠いた壺(227)は、3032 井戸の基底部に近い部分から出土した。

これらの遺物から、3032 井戸は弥生時代終末期に歸属するものと考えられる。

3031 井戸 (図 42・51、写真図版 12・25)

3031 井戸は、調査区の西端南寄り I 10-f3 に位置し、3032 井戸に隣接する。短軸東西 0.80 m・長軸南北 1.05 m の楕円形を呈する。断面形は、U 字形を呈し、残存の深さは 0.75 m を測る。埋土は、7 層を検出し、検出面から中位までは 10 YR 4/1~10 YR 5/1 褐灰色シルトが堆



3032 井戸 I 10-f3

- 1 10YR4/1 黒褐色シルト、0.1~0.2 cm の厚さでレンズ状に堆積する
- 2 10YR5/1 黒褐色シルト、10YR8/8 黄褐色シルト混じる
- 3 10YR5/1 黒褐色シルト、10YR8/8 黄褐色シルトが 2~5 cm 大のブロック状に入る
- 4 N3.5/0 黑褐色シルト～粘土

基盤層 I 10YR7/8 黄褐色シルト、10Y7/1 灰白色シルト混じり

II NS.0/0 灰色シルト～粘土

II' NT.5/0 灰白色シルト～粘土

III N4.0 灰色シルト～粘土

3031 井戸 I 10-f3

- 1 10YR4/1 黒褐色シルト
 - 2 10YR5/1 黒褐色シルト
 - 3 1 層に相似する
 - 4 10YR5/1 黑褐色シルト
 - 5 1 層及び 3 層に相似する
 - 6 4 層に相似する
 - 7 10YR3/1 黑褐色シルト
- a 7.5YR1 灰白色シルトのブロック

図 41 第 2 次調査 3 区 3032 井戸実測図

図 42 第 2 次調査 3 区 3031 井戸実測図

積し、東から西に人为的に挿き込んだような状況を呈する。それより下位層は、基底部まで 10 YR 3/1 黒褐色シルトの單一層で水平堆積をなす。遺物は、弥生時代中期の土器 1 点と共に、弥生時代終末期の広口壺(232)・二重口縁壺(231)など 20 点が出土した。広口壺(232)は、阿波式土器の搬入品と考えられる。

これらの遺物から、3031 井戸は弥生時代終末期に帰属するものと考えられる。

掘立柱建物 1 (図 43、写真版 12)

掘立柱建物 1 は、調査区

の西端北側 I 9-f・g 22・

23 を中心に位置し、桁行
北東-南西 3 間(4.32~4.40
m) × 梁行北西-南東 2 間
(3.86~4.00 m) で、総柱
建物である。柱の掘形は、
遺存状況の良い柱穴で 0.50
~ 0.70 m を測り、歪な円
形から隅円方形ぎみの形状
である。桁行方向の柱間は
1.35~1.54 m、梁行方向
の柱間は 1.86~2.1 m で、
若干のばらつきが認められ
る。桁行主軸方向は、N-
35.5° - E の振れとなる。

遺物は、柱当たりと掘形
の区別ができるていないが、
古墳時代後期と考えられる
土師器・須恵器の細片が少
量出土したに過ぎない。中
には奈良時代の遺物とも判
断のつかないものがあり、
明確な時期決定が困難であ
る。

掘立柱建物 2 (図 44、写 真版 13)

掘立柱建物 2 は、調査区

の南側西寄り I 10-e 5 を

中心に位置し、桁行北東-

南西 4 間(5.56~5.82 m) ×

梁行北西-南東 3 間(4.24~4.30 m) で、現状では側柱建物である。柱の掘形は、遺存状況の良

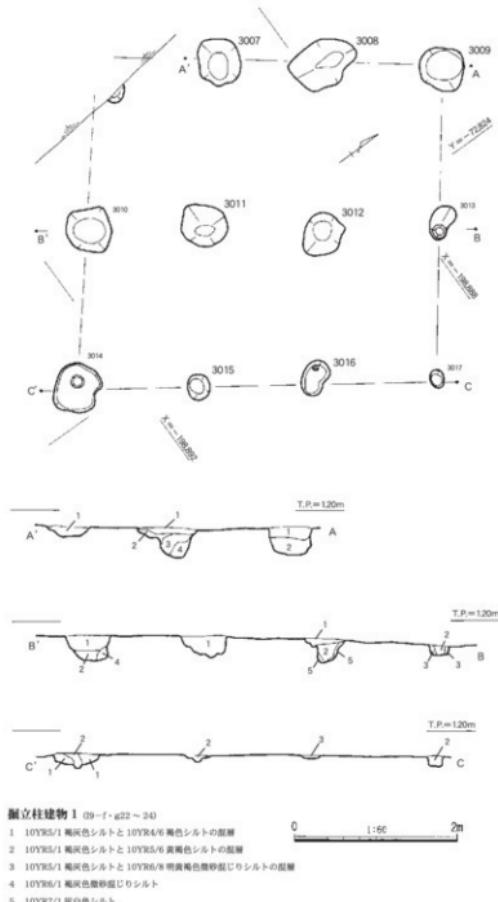
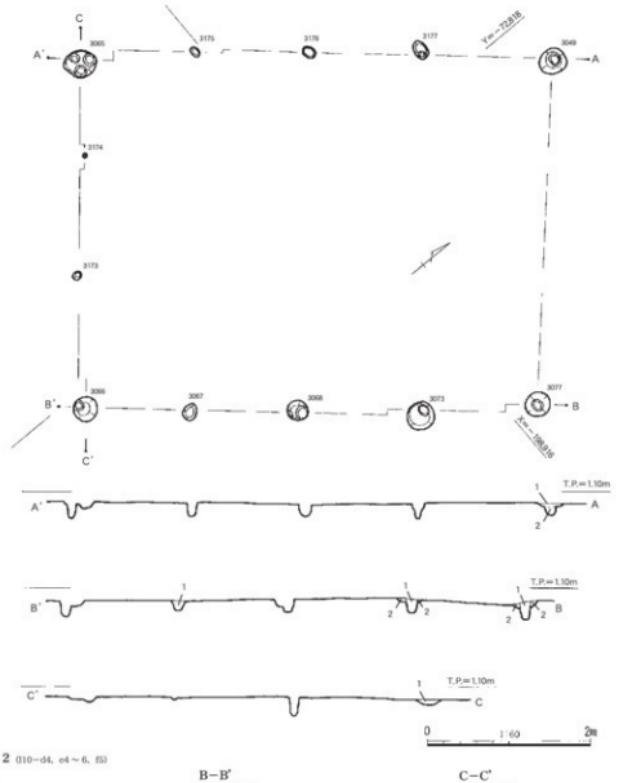


図 43 第2次調査3区 掘立柱建物1実測図

い柱穴で 0.30~0.40 m を測り、円形を呈する。桁行方向の柱間は 1.28~1.62 m、梁行方向の柱間は 1.20~1.64 m で、かなりのばらつきが認められる。桁行主軸方向は、N-41°-E の振れとなる。

遺物は、何れの柱穴からも出土していない。そのため、明確な時期決定が困難である。



掘立柱建物 2 (10-04, e4 ~ 6, 5)

A-A'

3049 柱穴

1 10YR5/1 黄灰色シルトと 10YR7/1 黄灰色シルトの混層

2 10YR5/1 黄灰色シルト

B-B'

3067 柱穴

1 10YR5/1 黄灰色シルトと 10YR7/8 黄灰色シルトの混層

0.2 ~ 0.5 cm 大のマンガン鉱 1% 含む

3073・3077 柱穴

1 24/0 黄色シルト

2 26/0 黄色シルトと 10YR6/8 明赤褐色シルトの混層

0.2 ~ 0.5 cm 大のマンガン鉱 1% 含む

C-C'

3066 柱穴

1 10YR5/1 黄灰色シルトと 10YR7/8 黄灰色シルトの混層

0.2 ~ 0.5 cm 大のマンガン鉱 1% 含む

図 44 第2次調査3区 掘立柱建物2実測図

3027 土坑 (図 45・51、写真図版 13・25)

3027 土坑は、掘立柱建物 1 の東側で調査区の北側東寄り I-9-e22 に位置し、短軸東西 0.51 m・長軸南北 0.58 m のやや歪な円形を呈する。断面形は、U字形を呈し、残存の深さは 0.22 m を測る。埋土は、3 層を検出し、埋設された土器が折り重なった状態で出土した。3 層は、土器を埋設する際に充填したかどうかの情報は得られていない。遺物は、古墳時代後期の須恵器坏身

(233・234) 2個体、土師器手捏ね小椀(236～242) 7個体・把手付深鍋(甕) (235) 1個体が出土した。

これらの遺物から、3027 土坑は古墳時代後期に帰属する土器埋設土坑と考えられる。

3062 土坑 (図 46・51、写真図版 13・26)

3062 土坑は、調査区の南側中央 I 10-b 8 に位置し、短軸南北 0.74 m・長軸東西 0.80 m 以上のやや歪な楕円形を呈する。西側を 3083 土坑に削り取られる。断面形は、深い皿形を呈し、残存の深さは 0.26 m を測る。埋土の情報は、不明である。土坑の基底部から約 10～15cm 浮いた状態で土器が出土した。遺物は、古墳時代後期の土師器壺(243・244) 2個体と細片の土師器甕 1点・弥生時代終末期の土器 3点が出土した。

これらの遺物から、3062 土坑は古墳時代後期に帰属する土器埋設土坑と考えられる。

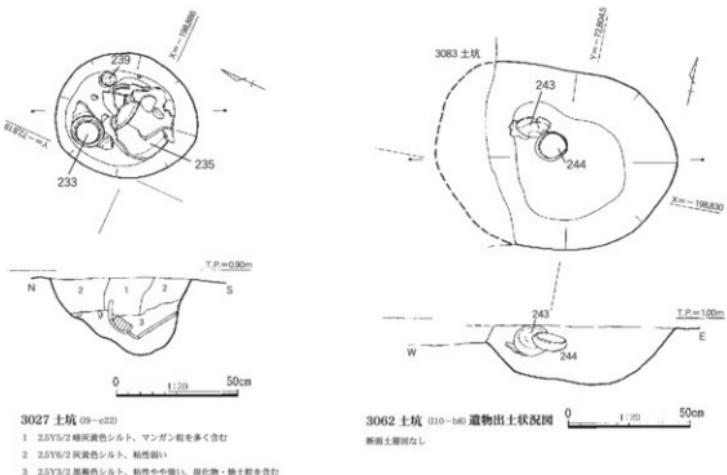


図 45 第2次調査3区 3027 実測図

図 46 第2次調査3区 3062 土坑実測図

3039 土坑 (図 47、写真図版 13)

3039 土坑は、掘立柱建物 2 の北西側で調査区の西端南寄り I 10-f 4 に位置し、短軸北東～南西 1.20 m・長軸北西～南東 1.80 m のやや不整形な形状を呈する。断面形は、箱形を呈し、残存の深さは 0.38 m を測る。土坑の基底部は、比較的平坦である。埋土は、レンズ状に 7 層が堆積し、中位層の 4 層に炭層が認められる。遺物は、弥生時代前期の土器 17 点・終末期の弥生土器 18 点・古墳時代後期の土師器と考えられる土器 1 点・須恵器壺身 3 点・壺蓋 1 点・甕 1 点が出土した。遺物は、何れも細片で磨滅の著しいものである。

これらの遺物から、3039 土坑は古墳時代後期に帰属するものと考えられる。

3108 土坑 (図 48、写真図版 13)

3108 土坑は、調査区の南西隅 I 10-f 9 に位置し、短軸東西 0.30 m・長軸南北 0.40 m の楕円形を呈する。断面形は、U字形を呈し、残存の深さは 0.16 m を測る。埋土は、レンズ状に 3

層が堆積し、最下層の3層に炭層が認められる。遺物は、弥生時代中期の可能性のある土器1点のみである。

これらのことから、3108土坑は明確な時期決定が困難であるが、303

9 土坑の

炭層の堆積状況との類似性から古墳時代後期の可能性があると考えられる。

その他の古墳時代と考えられる遺構(図52・54、写真図版26・28)

その他、出土遺物から古墳時代と考えられる主な遺構には、3021土坑(図52-254)(遺物点数3点)、3030土坑(245・246・248・255)(117点)、3046土坑(256)(31点)、3094土坑(257・260・262)(83点)、3098土坑(258・265)(57点)、3122土坑(249・250)(111点)、3124土坑(247・251~253・259・261)(83点)、3162土坑(263)(15点)がある。

これらの内、3030土坑は、調査区の中央I 10-e・f 2を中心位置する不整形な大型の土坑である。遺物は、弥生時代前期(245・246)(75点)・終末期(2点)の土器・石器と共に古墳時代後期の土師器(24点)・須恵器(248・255)(16点)が出土した。3037溝状遺構は、3030土坑から南西側に延びる。3030土坑との重複関係は不明であるが、弥生時代前期の土器1点・古墳時代の土師器5点が出土した。このことから、性格は不明であるが、3030土坑・3037溝状遺構共に古墳時代の遺構と判断した。3124土坑は、調査区の南東隅H10-x・y 8を中心に位置する不整形な大型の土坑である。遺物は、古墳時代後期を主体とした土師器・須恵器(251~253・259・261)が出土した。このことから、3124土坑は古墳時代の遺構と判断した。

ここに示した土坑から出土した遺物の大半は、古墳時代中期から後期の所産と考えられる。但し、遺物が示す時期が明確に遺構の時期を反映するとは限らない要素を含んでいることを考慮しなければならない。

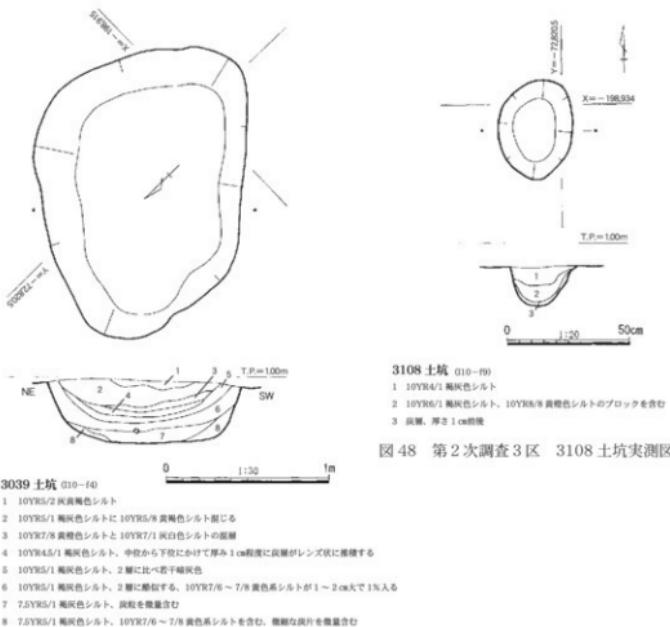


図47 第2次調査3区 3039土坑実測図

図48 第2次調査3区 3108土坑実測図

3115 井戸 (図 49・53・54、写真図版 14・27・28)

3115 井戸は、調査区の南東隅 H10-y9・10 に位置し、掘形の短軸東西 1.45 m・長軸南北 1.55 m のやや歪な円形を呈する。井戸の掘削は、検出面から 0.70 m までを人力で掘削し、それ以下は危険を伴うため、上部の写真撮影後に重機で断ち切った。掘形の断面形は、逆台形状を呈し、残存の深さは 1.50 m を測る。埋土は、井戸内で 4 層、掘形で 4 層、さらに全体を覆う状態で 1 層を検出した。井戸には木製井戸側が遺存していた。井戸側は 1 本の丸太を縦に 2 分し、刎り抜き、それに柄穴を穿ち、結合して井戸側としている。井戸側の大きさは直径 0.60×0.68 m を測る。また、井戸側の西側には井戸側の崩壊防止のためか、縦 1.2m、幅 0.2m、厚み 0.04 ~ 0.05m の板材が添うように立て掛けられていた。井戸側内の底から奈良時代の遺物がまとまって出土した。

遺物は、奈良時代の土師器皿(266~268) 4 個体・須恵器皿(269) 1 個体・土師器茶壺(270) 1 個体・土師器甕(271~279) 10 個体・須恵器甕(280) 1 点・桃核 1 点などが出土した。その他の細片も含めて土師器 146 点・須恵器 13 点・その他不明 6 点、弥生時代と考えられる緑泥片岩製の凹石(敲石)(289)がある。個々の詳細は、出土遺物一覧に記した通りであるが、これらの内、土師器甕(273・274・276・278・279)は、口縁部を意識的に打ち欠いたのではないかと思われる一定の共通性が認められる。

これらの遺物から、3115 井戸は奈良時代の平城 II ~ III 段階に帰属するものと考えられる。

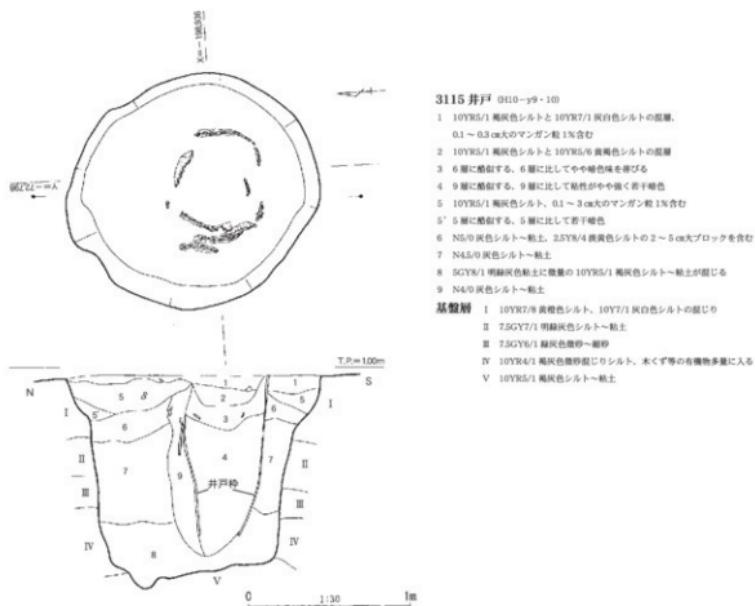


図 49 第 2 次調査 3 区 3115 井戸実測図

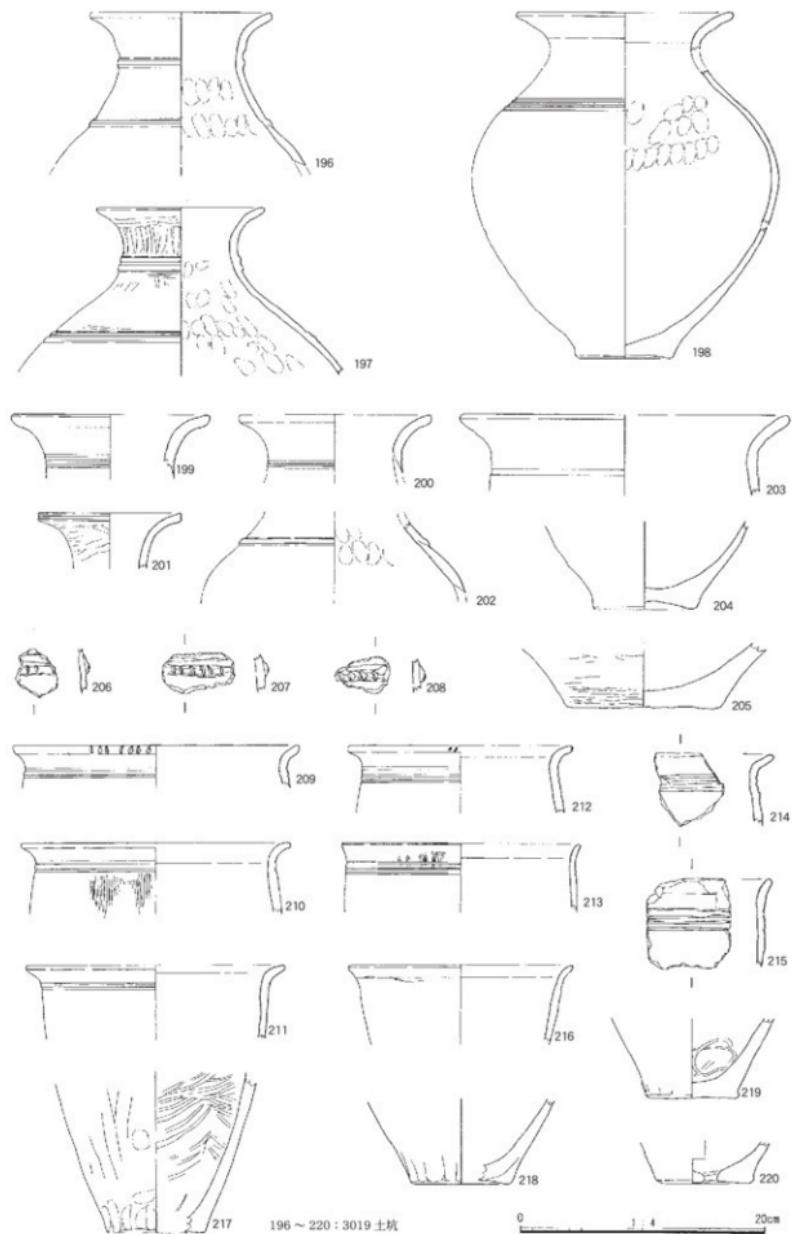
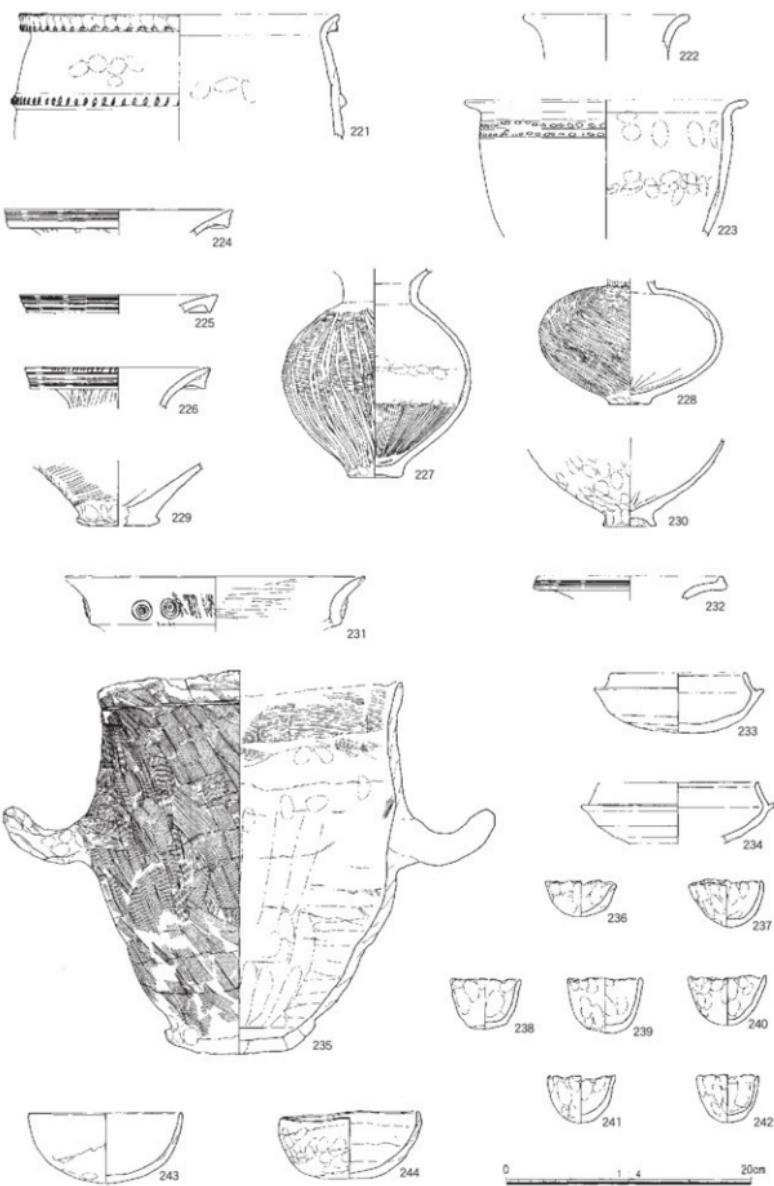
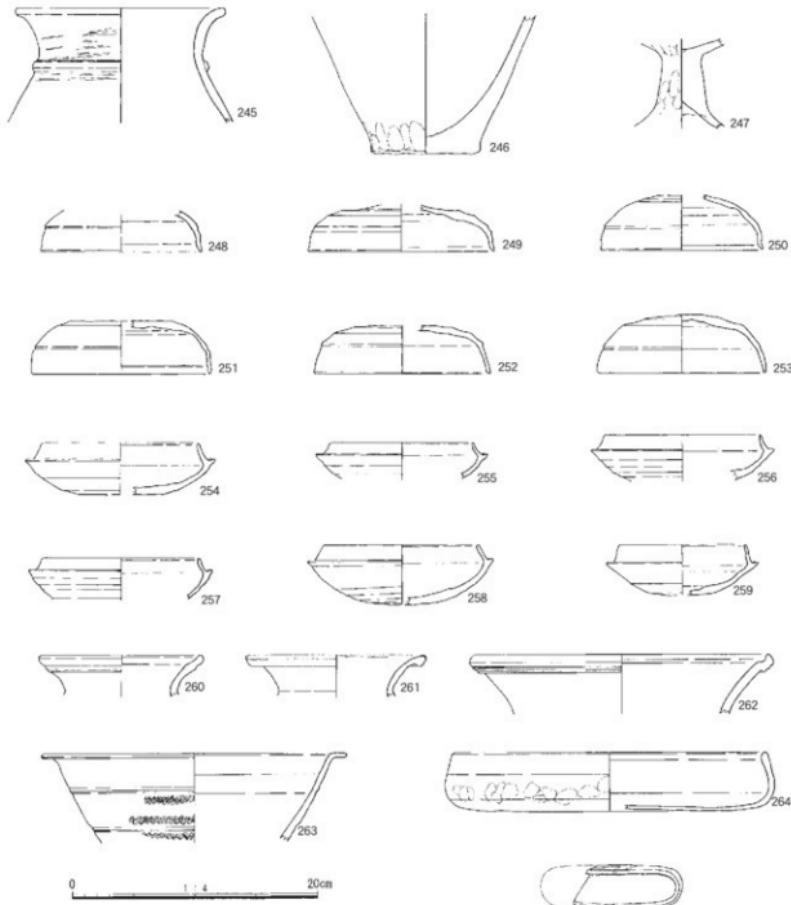


図 50 第2次調査3区 出土遺物実測図 1



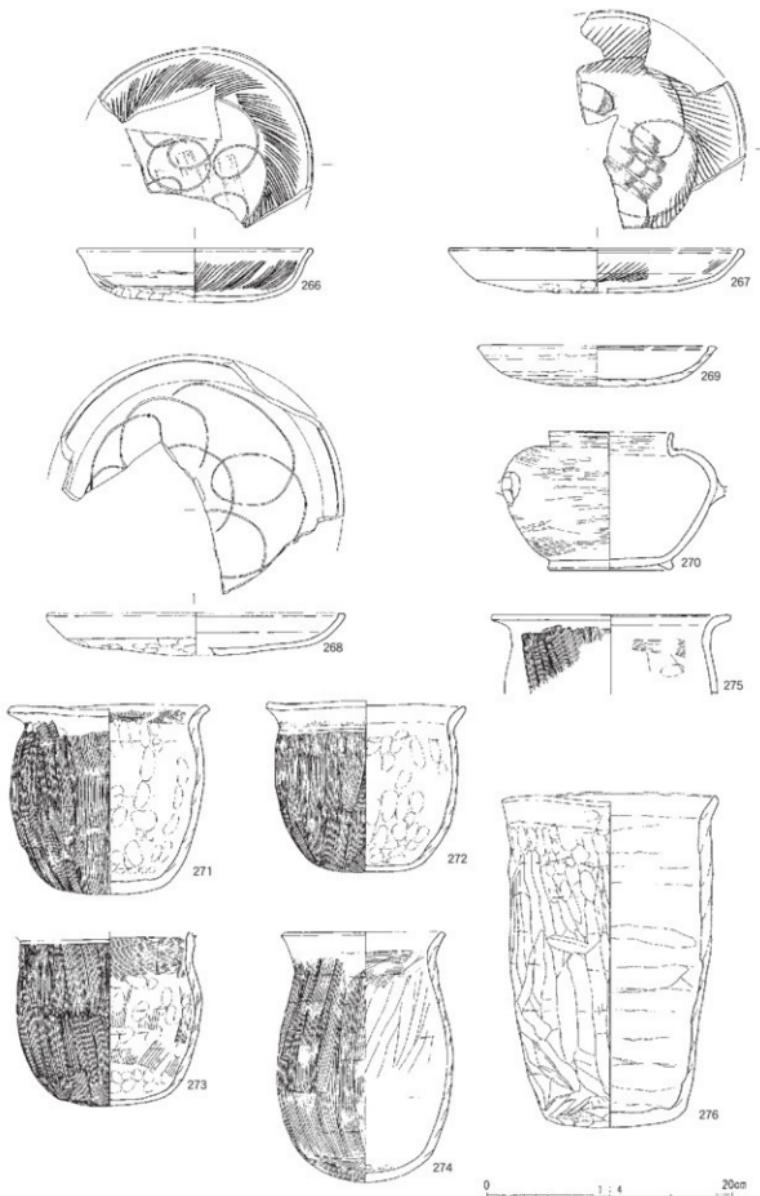
221 : 3135 土坑、222 : 3099 土坑、223 : 3104 土坑、224 ~ 230 : 3032 井戸、
231 ~ 232 : 3031 井戸、233 ~ 242 : 3027 土坑、243 ~ 244 : 3062 土坑

図 51 第 2 次調査 3 区 出土遺物実測図 2



245・246・248・255：3030 土坑、247・251～253・259・261：3124 土坑。
249・250：3122 土坑、254：3021 土坑、256：3046 土坑、257・260・262：3094 土坑。
258・265：3098 土坑、263：3162 土坑、264：3091 土坑

図 52 第2次調査3区 出土遺物実測図3



266 ~ 276 : 3115 井戸

図 53 第2次調査3区 出土遺物実測図4

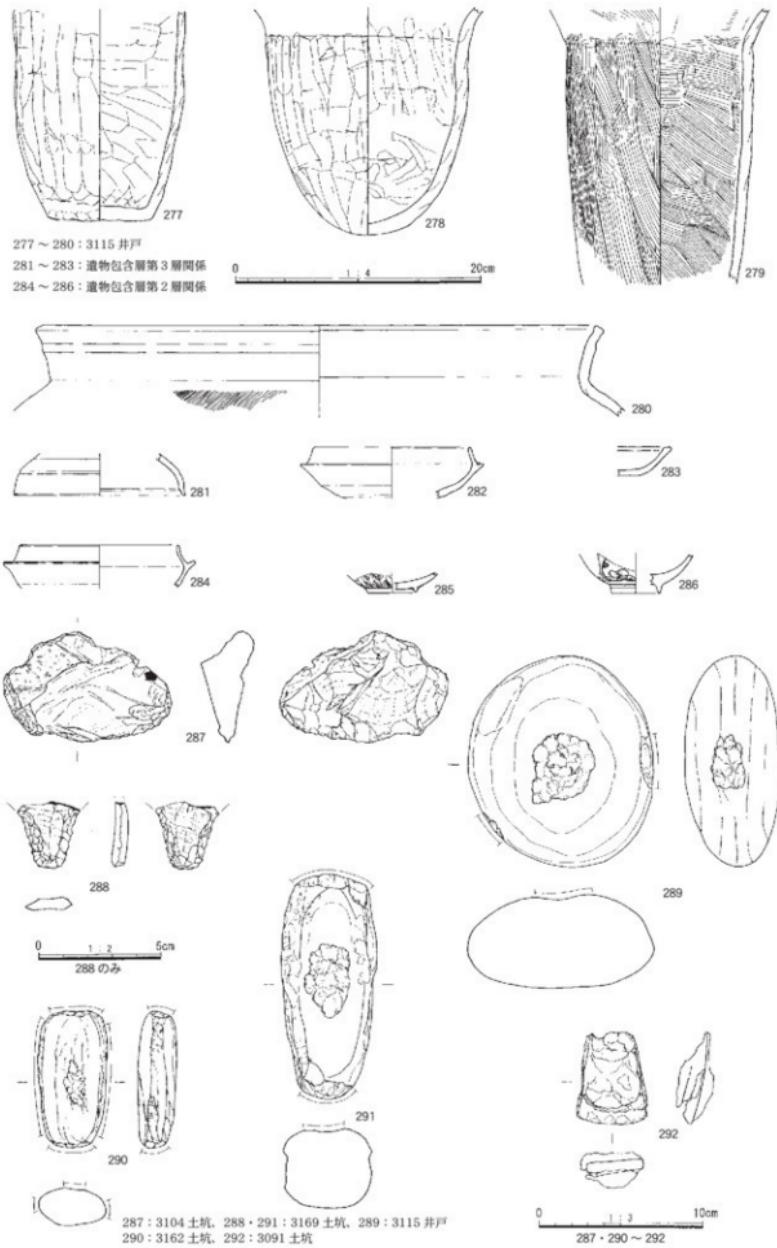


図 54 第2次調査3区 出土遺物実測図5

3 4区

(1) 調査の概要 (図 56、写真図版 15)

4 区も調査前の現況は、水田である。調査面積は 1,495m²である。遺構検出面は、他地区と同様に標高約 1.0m である。北側から続く現有の水路は、本調査区の東側に位置する。

4 区では、古墳時代を中心とした溝・土坑、飛鳥・奈良時代と考えられる杭列、鎌倉時代の可能性のある土坑・溝などを検出した。3 区と同様に遺構の密度は高いが、遺構の構成内容が異なる地区である。また、遺構からの出土遺物は少なく、明確な時期決定がし難い状況にある。

基本的に現床土直下に近世の遺物包含層が形成され、比較的多くの遺物が出土している。

(2) 基本層序と遺構面 (図 55、写真 25)

基本層序を以下のとおり把握した。

基本層序

第1層：第1層は、近・現代の水田耕作土（第1a層）黄灰色のシルト～細砂と床土（第1b層）黄橙色のシルトに細分できる。
第2層：近世の遺物包含層（水田耕作土）で黄灰色のシルト～細砂である。

基盤層

第1層：灰白色のシルトで、黄褐色の酸化土壌を縦筋状に多量に含む。

第2層：灰白色のシルトで、明黄褐色の酸化土壌を縦筋状に多量に含む。



写真 25 第2次調査4区 調査区東壁断面土層(西から)

第2次調査の基本層序 (4区 調査区東壁断面土層 : H10-t22)



図 55 第2次調査4区の基本層序 (調査区東壁断面土層 : H10-t22)

遺構検出面

掘削は、第1層をバックホウで掘削し、以下の第2層を人力で遺構検出面まで掘り下げた。その後に遺構を検出し、手順に従って遺構を掘削した。

(3) 各遺構の調査成果 (図 56~58、表 6・7、写真図版 15・16・29)

以下、主な遺構について古い順に記述する。

4040 土坑 (図 57・59、表 7、写真図版 16・29)

4040 土坑は、調査区の北側中央西寄り I 10-a 16 に位置し、短軸南北 0.60~0.80 m・長軸

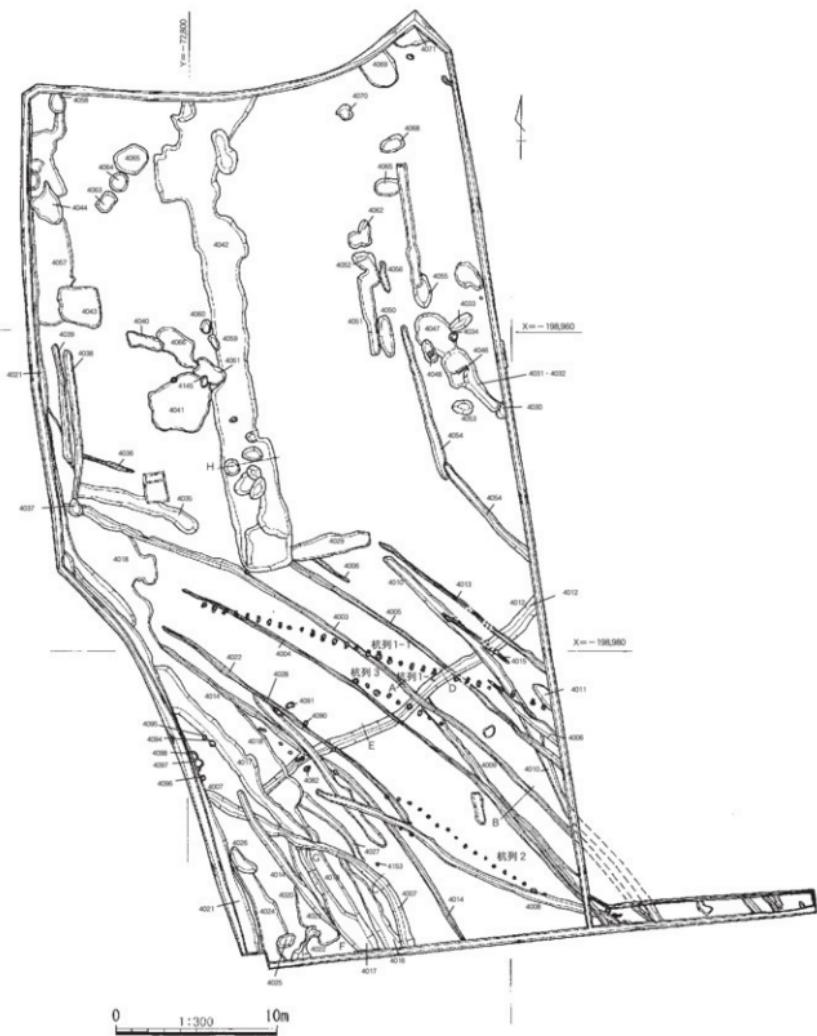


図 56 第2次調査4区 道構全体平面図

東西 2.30 m の不整形な長方形状を呈する。残存の深さは 0.09 m を測り、基底面はほぼ平坦である。埋土は、單一層である。遺物は、古墳時代の遺物と共に弥生時代終末期の土器が多量に出土した。細



図 57 第 2 次調査 4 区 4040 土坑実測図

片化し土器の遺存状態は悪く、器面の剥離・磨滅が著しい。遺物の出土状況から土器廃棄土坑と考えられる。

遺物は、弥生時代中期のサヌカイト製の石巒(321) 1 点・終末期の弥生土器各器種(1,834 点)・碧玉製の管玉(325) 1 点(土坑から出土した弥生時代遺物の割合: 98.9%)、古墳時代の土師器(遺物点数 16 点)高坏(293~295)・須恵器(5 点)(古墳時代遺物の割合: 1.1%)がある。

また、4040 土坑の東側に位置し、4040 土坑と重複関係にある 4066 土坑からは、剥離・磨滅の著しい弥生時代終末期の土器 37 点、古墳時代と考えられる土師器 322 点・須恵器 16 点の細片が出土した。これらの遺物の内容から、4040 土坑は弥生時代終末期の所産とせず、古墳時代に帰属するものと判断した。

溝・溝状遺構(図 58・59、写真図版 15・16)

溝群は、調査区の南側で検出した。北東側から順に遺構 4054・4013・4010・4005・4003・4009・4004・4022・4008・4014・4007・4017 である。これらの溝は、大よそ調査区の北西から南東方向に延びる。特に、4013・4005・4003・4004・4022 溝は一定の間隔を置いて位置する。これらの溝は、削平が著しいと思われ、残存の深さは 0.04~0.10m と浅く、検出幅は 0.40~0.95m である。これらの溝からは、弥生・古墳時代の遺物が少量ではあるが出土した。

4012 溝(図 58、写真図版 16)

4012 溝は、調査区の北東から南西方向に緩やかに蛇行して延びる。溝群の中で、唯一方向性の異なる溝である。他の溝と重複関係に有り、何れの溝よりも古い。幅員は 0.80m、残存の深さは 0.20~0.26m、検出延長は 20.7 m を測る。断面形は皿形を呈し、埋土は單一層である。遺物は、弥生時代前期の土器 11 点、古墳時代の須恵器 3 点が出土した。

4003 溝(図 58、写真図版 16)

4003 溝は、調査区の北西から南東方向に緩やかに大きく弧を描いて延びる。重複関係から 4009 溝より新しく、後述する杭列 1 より古い。幅員は 0.65m、残存の深さは 0.07~0.10m、

検出延長は 45.2 m を測る。断面形は皿形を呈し、埋土は単一層である。遺物は、弥生時代前期の土器 2 点・中期の土器 7 点、古墳時代と考えられる土師器 10 点・須恵器 1 点が出土した。

4004 溝 (図 58、写真図版 16)

4004 溝は、調査区の北西から南東方向に緩やかに大きく弧を描いて延びる。重複関係から 4008・4009 溝より新しく、杭列 1 より古い。幅員は 0.40m、残存の深さは 0.07m、検出延長は 34.0 m を測る。断面形は皿形を呈し、埋土は単一層である。遺物は、弥生時代前期の土器 2 点・中期の土器 7 点、古墳時代と考えられる土師器 10 点・須恵器 1 点が出土した。

4005 溝

4005 溝は、調査区の中央から南東方向に緩やかに大きく弧を描いて延びる。重複関係から 4010・4012 溝より新しく、4042 溝状構より古い。幅員は 0.45m、残存の深さは 0.05m、検出延長は 21.1 m を測る。断面形は皿形を呈し、埋土は単一層である。遺物は、古墳時代と考えられる土師器 5 点、室町時代の可能性のある土師器 1 点が出土した。

4017 溝 (図 58・59、写真図版 16・29)

4017 溝は、調査区の西端から南東方向に緩やかに大きく弧を描いて延びる。重複関係から 4018・4021 溝より古い。前述の溝群とは幅員を異にし、0.5~1.5 m となる。断面形は皿形を呈し、埋土は単一層である。遺物は、古墳時代と考えられる土師器 24 点・須恵器 29 点、飛鳥時代の須恵器杯 1 点・壺(296) 1 点が出土した。

これらの溝群は、重複関係から古い順に 4012 溝→4008・4009 溝→4003・4004→杭列 1・4012 溝→4010 溝→4005・4006 溝→杭列 1・4012 溝→4017 溝→4007 溝→4018・4021 溝

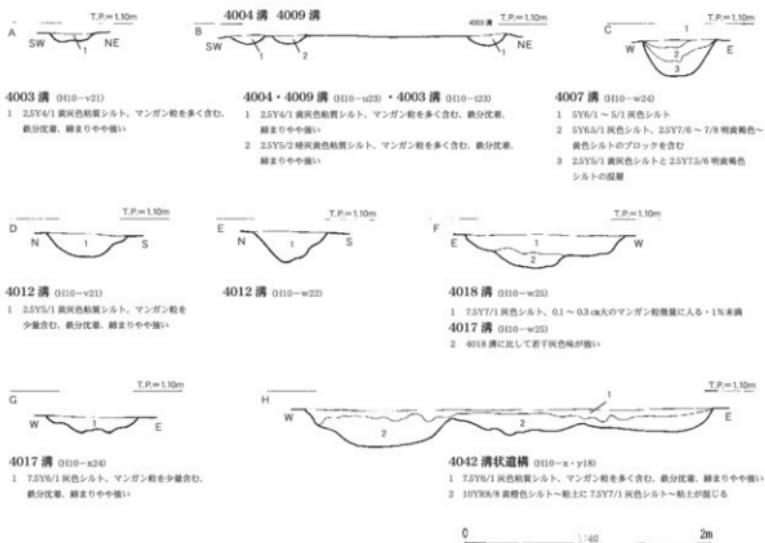


図 58 第2次調査4区 溝・溝状構造断面土層図

となり、古墳時代の溝群の中では大よそ3段階（時期）の変遷を辿ることになる。但し、出土遺物からは明確な時期差を見出すことができない。

これらのことから、これらの溝群は用水路的な機能を有するものと考えられる。

杭列

杭列は、調査区の南側において3列検出した。重複関係から溝群より新しい。杭列1には新旧が存在する。杭列を構成する小穴の掘形の直径は0.14~0.36mの円形ないし楕円形である。断面形は皿形を呈し、残存の深さは0.01~0.24mを測る。小穴の間隔は大よそ0.30~0.50mで、杭列1は検出延長22.30m、杭列2は12m、杭列3は7mである。遺物は、出土していない。

表6 第2次調査4区 杭列(小穴)一覧

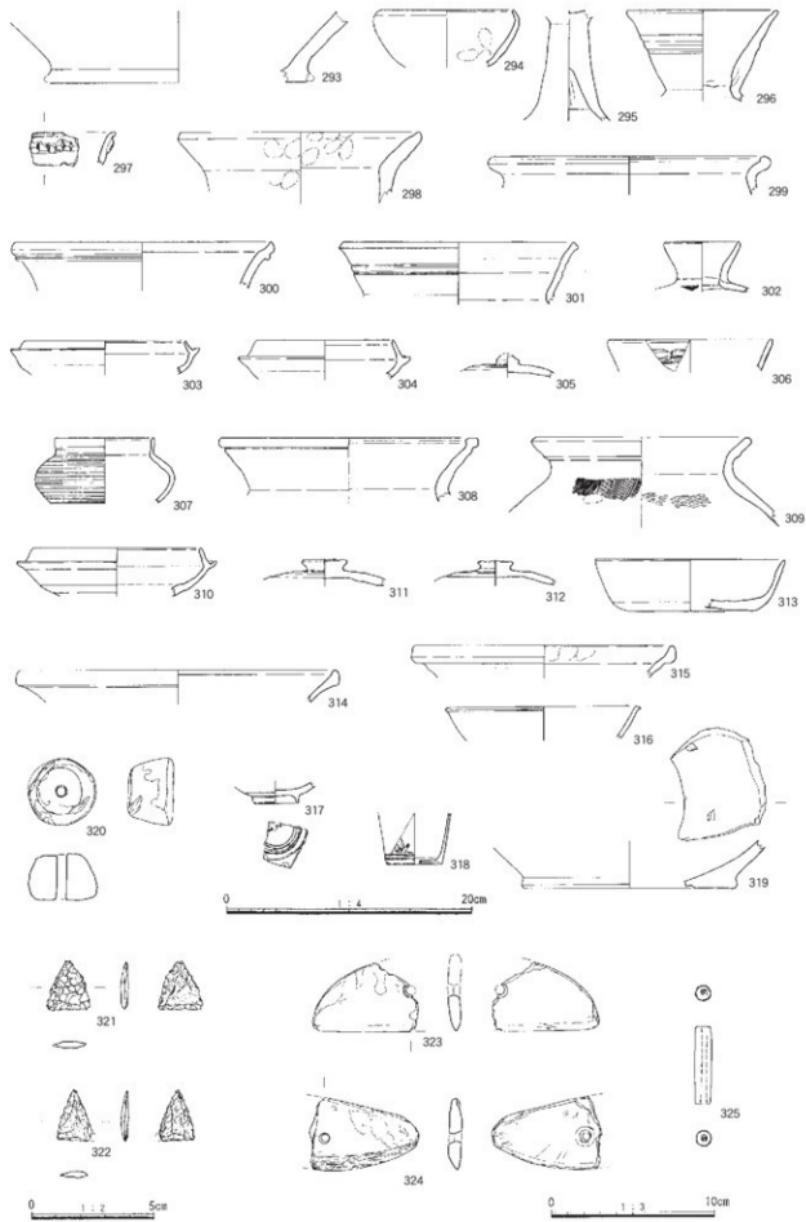
遺構番号	地区	中区画	小区画	土坑(小穴)番号	平面形と特徴	断面形と特徴	規模(m)			(遺構の重複関係・埋土等)	
							最小	最大	深さ		
杭列1-1	4区	H10	(東東) t21・u21・v21・w21 w20・x20・y20 (北西)	4099~4129 (東東)(北西)	円形～ 直な楕円形	皿形～U字形	0.14 × 0.16	0.28 × 0.34	0.01~0.20	22.30	東南東～ 西北西 南北やや 蛇行する
杭列1-2	4区	H10	(東東) t21・u21・v21・w21 w20・x20・y20 (北西)	4099~4129 (東東)(北西)	円形～ 直な楕円形	皿形～U字形	0.16 × 0.16	0.28 × 0.34	0.01~0.20	22.30	東南東～ 西北西 南北やや 蛇行する
杭列2	4区	H10	(東東) t24・u24・v23・v23 (北西)	4131~4145 (東東)(北西)	円形～ 楕円形	断面団なし 不規	0.14 × 0.16	0.30 × 0.36	0.03~0.24	12.00	東東～北 西 4144で ほぼ西に 屈曲する
杭列3	4区	H10	(東東) u22・v22・v21・w21 (北西)	4072~4073~408 (東東)(北西)	円形～ 直な楕円形	断面団なし 不規	0.18 × 0.23	0.34 × 0.36	0.02~0.13	7.00	東東～北 西 4072は、S=1/100回に有り、空測量に無し。 4009・4012溝より新しい。 4003と4004溝の間をほぼ平行に並ぶ。

遺物包含層 第2層 (図59、表7、写真図版29)

遺物包含層第2層は、層厚の差こそあるが、調査区のほぼ全域に広がる。調査時に近世の遺物包含層(水田耕作土)と認識されていた形成層である。遺物は、古墳時代の土師器・須恵器を主体に、1,099点が出土した。その内訳は、弥生時代前期・中期の土器・石器11点(遺物包含層第2層関係に占める割合:1.0%)、弥生時代終末期の土器・石器21点(1.9%)、古墳時代の土師器・須恵器・その他848点(77.2%)、飛鳥・奈良時代の土師器・須恵器57点(5.2%)、平安時代末～室町時代の土器34点(3.1%)、江戸時代以降の土器・瓦128点(11.6%)となる。これらのことから、遺物包含層第2層は、江戸時代において形成されたものと考えて大過ない。

4 小結

第2次調査では、調査地の中央に現存の用水路があり、この北東側と南西側で遺構の在り方が大きく異なることが判明した。水路より北東側(1区・2区)では弥生時代～古墳時代の自然流路が検出され、南西側(3区・4区)では弥生時代前期の土器廐棄土坑、弥生時代終末期の井戸、古墳時代と考えられる掘立柱建物・土器埋設土坑、奈良時代の井戸などの直接生活に関わる遺構・遺物が検出された。これらのことから、和田遺跡における居住域は、調査地の西側に位置する独立丘陵の雨霧山(通称菜師山)の裾野から放射状に延びる微高地上に求められると考えられる。



293～295・321・325：4040 土坑（土器埋まり）、296：4017 溝、297：4015 溝、298・306：4021 溝、299：4022 溝、300・303：4052 土坑
301：4020 溝、302・305：4018 溝、304：4064 土坑。307～320・324：遺物包含層第2層、322：4061 土坑、323：4010 溝

図 59 第2次調査4区 出土遺物実測図

表7 第2次調査 各層序別遺物数量

地 区	各層序 年代	種 文	発生前・中層			発生後 (後水成)			現地・墓場・平安			平安末・鎌倉・室町			江戸時代			明治・大正・昭和			備 考											
			石器	骨器	小計	石器	骨器	小計	石器	骨器	小計	土器	瓦器	漆器	金銀	漆器	金銀	漆器	金銀	漆器	金銀	漆器										
1 1-100	2010年(令和2年) 橋下層・下層	酒器 陶器質 土器 骨器	0	0	6	268	3	277	1	0	5	5	0	4	0	4	0	0	0	0	0	0	0	267								
2 1-100	2010年(令和2年) 中層・上層・屋外施設	酒器 陶器質 土器 骨器	0	0	0	286	17	253	070	12	7	19	0	13	0	13	0	0	0	0	0	0	0	1607								
3 1-100	2001年(平成13年) 小計	酒器 陶器質 土器 骨器	0	0	0	3	0	3	604	2	605	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	186								
4 1-100	2011年(令和3年) 下層	酒器 陶器質 土器 骨器	0	0	0	6	14	3	23	159	275	285	0	303	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4865								
5 1-100	2011年(令和3年) 中層・屋外施設	酒器 陶器質 土器 骨器	0	0	0	10	5	11	26	469	4	503	089	67	3	1099	0	0	0	0	0	0	0	1590								
6 1-100	各層 小計	酒器 陶器質 土器 骨器	0	0	0	16	19	49	658	4	662	1264	95	3	1382	0	0	0	0	0	0	0	0	2075								
7 1-100	各層 小計	酒器 陶器質 土器 骨器	0	0	0	67	0	4	71	79	79	5	3	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	158								
8 1-100	遺物合算 第2層層底	酒器 陶器質 土器 骨器	0	0	0	67	0	4	71	79	79	5	3	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	158								
9 1-100	各層 小計	酒器 陶器質 土器 骨器	0	0	0	4	1	1	0	0	0	0	222	10	220	0	0	452	0	9	0	0	0	0	456							
10 1-100	3019年(令和元年) 土坑	酒器 陶器質 土器 骨器	0	0	0	7	11	13	31	303	1	804	669	524	4	1297	0	0	11	0	0	11	0	2190								
11 1-100	各層 小計	酒器 陶器質 土器 骨器	0	0	0	7	4	11	160	1	161	113	88	0	211	0	0	6	0	0	5	0	0	396								
12 1-100	各層 合計	酒器 陶器質 土器 骨器	0	0	0	124	516	59	699	266	11	396	263	832	7	2802	222	10	254	0	486	0	15	0	20	0	2	3	5	708		
13 3区	3115井戸	酒器 陶器質 土器 骨器	3	0	3	178	0	4	173	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1731
14 3区	各層 小計	酒器 陶器質 土器 骨器	6	0	6	1946	0	6	1962	0	0	0	5	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	232
15 3区	各層 小計	酒器 陶器質 土器 骨器	0	0	0	173	34	6	213	254	5	259	534	373	1	1038	6	0	2	0	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1663
16 3区	各層 小計	酒器 陶器質 土器 骨器	0	0	0	78	20	6	104	9	0	9	156	117	0	273	0	0	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1569

地 区	層 序 別 別 名	國 文		別集前・中間		發生後期・終末期		古墳 (合算式～)		圓周・直角・平頂		平頂・圓周・圓錐・圓台		江戸 (近世等)		不 合 計		備 考	
		圓形 圓錐形 圓柱形 圓錐柱形 圓錐圓柱形 圓錐圓錐形 圓錐圓錐柱形 圓錐圓錐圓柱形	二段 形	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計		
16	透視的剖面 第2圖形類	0	0	1	0	1	2	5	0	5	33	75	0	108	0	0	0	0	128 (透視的剖面第2圖)
17	倒圓・削土	0	0	0	0	2	17	0	17	5	10	0	15	2	0	4	0	1	128 倒圓・削土・側面斜面
18	圓孔	0	0	0	0	1	1	0	0	1	5	0	6	0	0	0	0	1	8 圓孔 1, 2, 3, 7
19	45度土坑	6	0	6	2788	54	23	2275	285	5	290	829	365	1	341	154	0	22	3 45度土坑
20	各遺構	0	0	0	0	1	1	361	1	365	16	5	0	21	0	0	0	0	0 各遺構
21	透視包含層 第2圖形類	1	0	1	21	10	9	40	34	0	94	154	274	1	829	2	2	7	0 透視包含層 第2圖形類
22	倒圓・削土	1	0	1	21	10	9	40	34	0	94	154	274	1	829	2	2	7	0 倒圓・削土・側面斜面
4区	小計	0	0	0	1	4	6	11	20	1	21	31	1	355	2	848	10	0 4区	
4区	合計	1	0	1	22	14	17	53	196	2	197	935	860	4	3629	12	2	58	0 4区
4区	総合計	7	0	7	2344	554	99	3307	18	5643	3827	3207	12	646	388	12	334	0 4区	

第V章 まとめ

今回の和田遺跡の調査では、大きく第1次調査・第2次調査1区・2区と第2次調査3区・4区の中で南北方向もしくは東西方向の自然流路を挟んでいることが判明した。南北方向もしくは東西方向の自然流路の流向は、2箇所の生活域を分断する状態に位置する。

和田遺跡周辺は、従来の地理的な理解では低湿なラグーン性低地(図1)という生活域の存在の可能性が低いものであった。しかし、今回の和田遺跡の調査では、弥生時代前期から奈良時代にかけて断続的に続く生活痕跡が明らかとなった。また、地理的な理解の中で読み解かれたと考えられる南北方向の自然流路も検出された(第1次調査 205 自然流路・第2次調査 2010・2011 自然流路)。

多くの生活痕跡が存在することから考えれば、度重なる自然流水に悩まされながらも集落を営んでいたことは想像に難くない。現在においても和田川周辺は、度重なる冠水に見舞われる地域である。また、鎌倉時代以降の土地開発によって多くの生活痕跡が削平を受け、本来の遺物包含層が水田耕作土として土壤化していったものと考えられる。

弥生時代前期の土器

出土遺物の中で特に目を引くものが、弥生時代前期の紀伊I-2様式に位置付けが可能な土器群である。第2次調査の3区3019土坑と周辺部に散在する古墳時代の遺構から出土した資料である。その資料は、本文中において紀伊I-2様式に位置付けた要素を表5において示した。

現在のところ、当該期に位置付けの可能な土器群は、和歌山県内では和歌山市神前遺跡の溝、御坊市堅田遺跡の土坑、日高郡みなべ町徳蔵地区遺跡の土坑・旧河川、西牟婁郡白浜町瀬戸遺跡の土坑、西牟婁郡すさみ町立野遺跡の自然流路などに認められる。但し、神前遺跡資料は、混在資料群の中から古い段階の遺物を抽出する必要がある。今後も資料の増加が期待されるところである。

今次の調査で後続する資料群は、第1次調査の018井戸資料となり、県内でも多くの資料群が認められる段階である。

検出された主な遺構(図60)

ここでは、検出された主要な遺構について、その位置付けを簡潔に示していきたい。

弥生時代前期の紀伊I-2様式段階の遺構・遺物の多くは、第2次調査の3区の南西部に位置する3019土坑を中心として散在的に存在する。本文で触れることができなかつたが、2010自然流路の西肩に接して2007土坑が単独で位置する(遺物点数67点)。紀伊I-3様式段階では、第1次調査の南東側に僅ながら1基の井戸が存在するのみである。これらのことから、弥生時代前期の生活域は、調査地内では南側から北側に移動しながら変遷を辿ることになる。

弥生時代中期の紀伊III-3様式の遺構・遺物の内容は、第2次調査の2010自然流路より下位層や2011自然流路下層からの出土遺物のみで、その生活域を明確に推し量ることは難しい。紀伊IV-1様式段階では、第2次調査の2010自然流路最下層・下層、2011自然流路下層出土資料によって調査地に近接して生活域が営まれていたことは確実であるが、遺構が少なく明確にはし難い。弥生時代中期末から後期にかけての遺構・遺物は、現状では見受けられない。

統いて、遺物の出土量から顕著になるのが、弥生時代終末期の様相である。今回の調査地全体での遺物 28,294 点の中で弥生時代終末期の遺物 16,449 点が占める割合は、各時代の中で最も高い比率(58.1%)を占める。遺物の集中する箇所として、第 1 次調査の 205 自然流路(4,968 点)や第 2 次調査の 2010 自然流路中上層の遺物(1,282 点)、2001 土器溜まり(606 点)、4 区の二次的な遺物として捉えられる 4040 土坑(1,835 点)などがあり、遺構として第 2 次調査の 3 区の 3031・3032 井戸以外は、明確な遺構がない状態である。弥生時代終末期においても、弥生時代中期と同様に調査地に近接して生活域が営まれていたことは確実である。

古墳時代前期・中期と考えられる遺物は、二次的な形成土に含まれて出土することが多く、遺構の内容を明確に把握することは難しい。

古墳時代後期は、第 2 次調査の 3 区の掘立柱建物を始め、3 区の 3027・3062 土器埋設土坑や第 1 次調査の 011・005・004 井戸があり、一定の生活域の広がりが顕著に認められる。反面、第 2 次調査の 3 区では、古墳時代の遺物を伴う遺構は多いが、その性格を推し量れるだけの情報量に乏しい。また、第 2 次調査の 4 区南側の溝群は、出土遺物が少なく時期決定において未確定要素を含むが、古墳時代と考えた場合、居住域と生産域を画する遺構群として理解が可能である。また、第 1 次調査地全体に 205 自然流路の上層埋土(遺物包含層第 4 層)が薄く堆積しており、自然流路が埋没する過程において水害や流水方向の変化などがあったと考えられる。

奈良時代は、第 1 次調査の 001 井戸や第 2 次調査の 3 区の 3115 井戸によって生活域の存在を考えなければならない。その他、出土遺物と遺構の重複関係から奈良時代と考えた第 2 次調査の 1 区南端・2-2 区北端の溝状遺構・土坑列、4 区の杭列がある。

各遺構の時代変遷

各項目において記述した内容を整理し、主要な遺構の時期(もしくは、遺構・遺物包含層から出土した遺物の時期)を考えた場合、以下のような図式が可能となる(図 60 に対応)。古い時代

	第 1 次調査	第 2 次調査 1・2 区	第 2 次調査 3 区	第 2 次調査 4 区
江戸時代	遺物包含層第 2 層	包含層第 2 層?	機械掘削第 2 層	遺物包含層第 2 層
鎌倉時代	K 遺構			
鎌倉時代	遺物包含層第 3 層			
奈良時代	001 井戸	2021 溝状遺構・土坑列	3115 井戸	杭列
飛鳥時代		2021 溝状遺構?		
古墳時代後期	032 落ち込み?		3039 土坑・3108 土坑	溝群
古墳時代後期	遺物包含層第 4 層		掘立柱建物	溝群
古墳時代後期	005 井戸・004 井戸	2011 自然流路上層	3027 土坑・3062 土坑	溝群
古墳時代後期	011 井戸			
古墳時代前期・中期?		2003 土坑・2011 自然流路下層(縄蓆文)		
弥生時代終末期	206 土坑・012 土坑	2005 土坑・2003 土坑		
弥生時代終末期	205 自然流路	2010 自然流路中上層	3032 井戸・3031 井戸	
弥生時代中期	037 小穴・209 土坑	2010 自然流路下層		
弥生時代中期		2010 自然流路より下位層		
弥生時代前期	018 井戸			
弥生時代前期		3019 土坑		

以上のように、明確な居住の状況を示す遺構が少ない。古墳時代と考えられる掘立柱建物以外は間接的に人々の生活の痕跡を物語るものである。

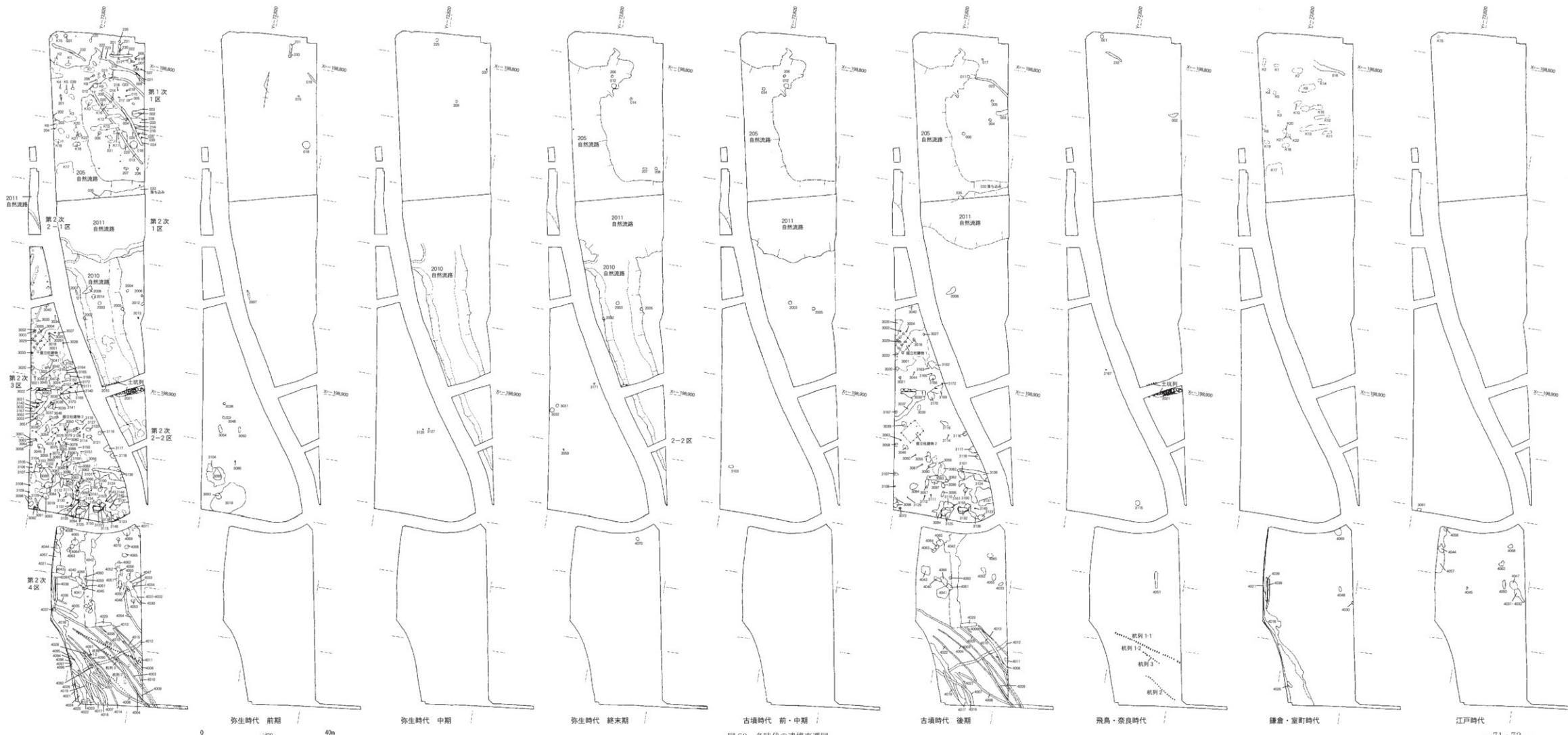


図 60 各時代の遺構変遷図

地番 番号	地図 番号	写真 版図	実測地図 地籍番号	土木区分 監査番号	地区 取扱会社	道幅面 横断層位	道路名・面積 測量者名	造物種類	器種	部位	残存率	備考	
												左側	右側
1	図21	17	35	116	第1次 19-6-7	第2道樋面	018井戸 南中押	弥生土器	広口壺	口縁部	10%	全体にやや磨滅み、紀伊1-3様式、反転復元	
2	図21	17	32	118 19-6-6 7 19-6-7 7 19-6-7	第1次 19-6-6 7 19-6-7 7 19-6-7	第2道樋面	018井戸 中垂 南中押 下押	弥生土器	壺部～ 体部	50%	頭部と肩部に凹面状模様を施し後その上に斜片突起を付す。頭部は弧状方向の斜いケル型調整の後不正方向の斜いスマガリ調整を施す。内面の底部は削減し、外の進出はまだ現れず。紀伊1-1様式、一部反転復元		
3	図21	17	38	132	第1次 19-6-7	第2道樋面	018井戸 歌り上り	弥生土器	壺	体部	25%	内面の磨滅が少し、外の表面はまだ良好。紀伊1-3様式、反転復元	
4	図21	17	37	117	第1次 19-6-7	第2道樋面	018井戸 歌り上り	弥生土器	壺	体部～ 底部	30%	外面部から底部面部にかけて薄い黒斑有り、全体に剝離・磨滅が少し、紀伊1-3様式、反転復元	
5	図21	17	33	173	第1次 19-6-6 7	第2道樋面	018井戸 セクション	弥生土器	壺	体部～ 底部	30%	外面部から底部面部にかけて黒斑有り、底部底面も不定方向に斜めに削減してあり、底部底面も不定方向に斜めに削減してあり、外面部底面はやや磨滅減少み、紀伊1-3様式、一部反転復元	
6	図21	17	36	116	第2道樋面	018井戸 南中押	弥生土器	壺	底部	100%	内面に底部面部の一部に削減有り、外面部底面の一部に削除する事で内面の削除・磨滅が少し、外面部底面はやや磨滅減少み、紀伊1-3様式、一部反転復元		
7	図21	17	34	115	第2道樋面	018井戸 南中押	弥生土器	壺	底部	30%	内面底部に削除有り、外面部底面の一部に削除する事で内面の削除・磨滅が少し、外面部底面はやや磨滅減少み、全体に剝離・磨滅が少し、紀伊1-3様式、一部反転復元		
8	図21	17	52	186	第2道樋面	037小穴	弥生土器	高环	脚台部	95%	外面部から底部面部にかけて黒斑有り、全体に剝離・磨滅が少し、紀伊1-1様式、一部反転復元		
9	図21	17	83	365	第1次 19-6-5	第2道樋面	208井戸	弥生土器	手ねじ土器	口縁部～ 底部	65%	外面部から底部面部にかけて黒斑有り、全体に剝離・磨滅が少し、口縫部からかななり歪む、外面部底面に黒斑による剝離・体部底面で複数個底面形状と底面形状が矢張り現れされ、紀伊1-1様式、一部反転復元	
10	図21	17	70	303	第1次 19-6-7	第2道樋面	205自然流路	弥生土器	壺	口縁部～ 体部	5%	内面底部から口縫部まで削除して少し、紀伊1-1様式、反転復元、範囲のため口縫部底面は削除して少し	
11	図21	17	69	292	第1次 19-6-6	第2道樋面	205自然流路	弥生土器	壺	口縁部～ 体部	5%	全体に剝離・磨滅が少し、紀伊1-1様式、反転復元、範囲のため口縫部底面は削除して少し	
12	図21	17	66	458 464	第1次 19-6-6 7 19-7-7	第2道樋面	205自然流路 道物集中11 取り上り	弥生土器	広口壺	口縁部～ 体部	50%	外面部から内面にかけて黒斑有り、全体に剝離・磨滅が少し、庄内式併行期新段階、一部反転復元	
13	図21	17	68	481	第1次 19-6-6	第2道樋面	205自然流路 道物集中44 取り上り	弥生土器	広口壺	口縁部	65%	全体に剝離・磨滅が少し、庄内式併行期古段階、一部反転復元	
14	図21	—	67	464	第1次 19-7-7	第2道樋面	205自然流路 道物集中11 取り上り	弥生土器	広口壺	口縁部	25%	全体に剝離・磨滅が少し、庄内式併行期古段階、一部反転復元	
15	図21	17	61	292 474	第1次 19-6-6 7 19-7-8	第2道樋面	205自然流路 道物集中44 取り上り	弥生土器	広口壺	口縁部～ 體部	90%	全体に剝離・磨滅が少し、庄内式併行期新段階、一部反転復元	
16	図21	17	62	331	第1次 19-6-10	第2道樋面	205自然流路	弥生土器	二口口縫	口縁部	15%	全体に剝離・磨滅が少し、庄内式併行期新段階、反転復元	
17	図21	17	63	337	第1次 19-6-10	第2道樋面	205自然流路	弥生土器	二口口縫	口縁部	12%	全体に剝離・磨滅が少し、庄内式併行期新段階、反転復元	
18	図21	—	64	367	第1次 19-6-10 11	第2道樋面	205自然流路 道物集中13	弥生土器	二口口縫	口縁部	12%	全体に剝離・磨滅が少し、庄内式併行期新段階、反転復元	
19	図21	17	65	464	第1次 19-6-7	第2道樋面	205自然流路 道物集中11 取り上り	弥生土器	廣口壺	口縁部～ 體部	50%	全体に剝離・磨滅が少し、庄内式併行期古段階、一部反転復元	
20	図22	17	73	429	第1次 19-6-11	第2道樋面	205自然流路 道物集中11 取り上り17	弥生土器	壺	口縁部～ 体部	12%	全体に剝離・磨滅が少し、庄内式併行期新段階、反転復元	
21	図22	17	72	418	第1次 19-6-10	第2道樋面	205自然流路 道物集中45 取り上り	弥生土器	壺	口縁部	35%	全体に剝離・磨滅が少し、庄内式併行期新段階、反転復元	
22	図22	—	74	461	第1次 19-6-7	第2道樋面	205自然流路 道物集中13	弥生土器	壺	体部～ 底部	50%	外面部下半から底部面部にかけて黒斑有り、全体に剝離・磨滅が少し、庄内式併行期古段階、一部反転復元	
23	図22	—	71	314	第1次 19-6-10	第2道樋面	205自然流路 道物集中11 取り上り	弥生土器	壺	底部	100%	全体に剝離・磨滅が少し、庄内式併行期古段階、一部反転復元	
24	図22	17	78	473	第1次 19-6-8	第2道樋面	205自然流路 道物集中44 取り上り17	弥生土器	高环	瓶部	75%	内面に縦溝に黒斑有り、全体に剝離・磨滅が少し、庄内式併行期新段階、一部反転復元	
25	図22	17	79	477	第1次 19-6-8	第2道樋面	205自然流路 道物集中44 取り上り17	弥生土器	高环	瓶部	60%	全体に剝離・磨滅が少し、庄内式併行期新段階、一部反転復元	
26	図22	17	76	321	第1次 19-6-10	第2道樋面	205自然流路	弥生土器	柳叶部	100%	全体に剝離・磨滅が少し、庄内式併行期古段階、一部反転復元		
27	図22	17	75	309	第1次 19-6-10	第2道樋面	205自然流路	弥生土器	脚台部	75%	外面部下半から底部面部にかけて黒斑有り、全体に剝離・磨滅が少し、庄内式併行期新段階、一部反転復元		
28	図22	17	77	472	第1次 19-6-8	第2道樋面	205自然流路 道物集中44 取り上り17	土師器	脚台部	80%	全体に剝離・磨滅が少し、布留式併行期新段階か、一部反転復元		
29	図22	—	80	309	第1次 19-6-10	第2道樋面	205自然流路	弥生土器	脚部 底部	50%	全体に剝離・磨滅が少し、庄内式併行期古段階、一部反転復元		
30	図22	17	81	416	第1次 19-6-10 11 19-6-11 10	第2道樋面	205自然流路 道物集中44 取り上り17	弥生土器	小型壺	口縁部～ 底部	75%	外面部下半から底部面部にかけて黒斑有り、全体に剝離・磨滅が少し、庄内式併行期古段階	
31	図22	17	82	427	第1次 19-6-10	第2道樋面	205自然流路 道物集中11 取り上り17	弥生土器	壺	底部	100%	全体に剝離・磨滅が少し、庄内式併行期古段階	
32	図22	17	60	292	第1次 19-6-6	第2道樋面	205自然流路 道物集中44	温器器	壺	口縁部～ 底部	20%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑Ⅲ型式Ⅴ段階～第6段階（田辺T20920前段階）、一部反転復元	
33	図22	18	59	413	第1次 19-6-6	西洋 セントラル 高島4500ml 立ち込み	セントラル 高島4500ml 立ち込み	弥生土器	広口壺	口縁部	80%	全体に剝離・磨滅が少し、庄内式併行期古段階、一部反転復元	
34	図22	18	58	376	第1次 19-6-7	西洋 セントラル 高島4500ml 立ち込み	セントラル 高島4500ml 立ち込み	弥生土器	壺	底部	100%	全体に剝離・磨滅が少し、庄内式併行期新段階、一部反転復元	
35	図22	18	53	213	第1次 19-6-10	包含層第4層	—	弥生土器	高环	脚台部	25%	全体に磨滅が少し、庄内式併行期古段階、一部反転復元	

2012和田遺跡 出土遺物一覽(土器)

接文番号	接文書名	真名	実用登録番号	登録番号	地区取扱会社	送達面積 地盤面積	送達面積 地盤面積	送達面積 地盤面積	送達面積 地盤面積	部位	残存率	備考
36	図22	18	55	229	第1次 19-610	包含層第4層	—	土師器	高环	脚柱部	90%	全体に剥離・磨滅して美しい。古墳時代後期から一部反転復元。
37	図22	18	54	228	第1次 19-610 19-611	包含層第4層 包含層第4層	—	須恵器	身舟	口縁部～ 脚柱部	8%	クロロ回転方向：左回り、陶器Ⅲ型式第1段階（田辺M15型式）、反転復元
38	図22	18	56	255	第1次 19-610 19-611	包含層第4層 落ち込み	—	須恵器	高环	脚裡部	15%	外全體に自然剥離・付着する。クロロ回転方向：左回り、陶器Ⅲ型式第3段階～第4段階（田辺TK20B型式～TK23型式）、反転復元。
39	図22	—	57	266	南北セクション 18-625	第1次 第4層	—	須恵器	身舟	—	10%	外全體に自然剥離・付着する。クロロ回転方向：左回り、陶器Ⅳ型式第1段階（田辺M17型式）、反転復元
40	図22	18	28	138	第1次 19-62	011井戸上層 歌り上手び	土師器	身舟	口縁部～ 脚柱部	70%	完全に剥離・磨滅して美しい。古墳時代後期。一部反転復元。	
41	図22	18	30	163	第1次 19-62	011井戸下層 歌り上手び	土師器	身舟	口縁部～ 脚柱部	70%	完全に剥離・磨滅して美しい。古墳時代後期。一部反転復元。	
42	図22	18	29	140	第1次 19-62	011井戸上層 歌り上手び	土師器	高环	脚台部	60%	外側の一間にばらばらに埋葬する付着する。完全に磨滅して美しい。古墳時代後期。一部反転復元。	
43	図22	18	31	274	第1次 19-62	011井戸下層 歌り上手び	土師器	高环	外縁部～ 脚台部	40%	完全に磨滅して美しい。古墳時代後期。一部反転復元。	
44	図22	18	26	133	第1次 19-62	005井戸下層 歌り上手び	土師器	身舟	口縁部～ 脚柱部	50%	外張翼部から体部にかけて内凹口縁部に黒斑有り、全体に遺失はまだあるが、古墳時代後期。一部反転復元。	
45	図22	18	27	133	第1次 19-62	005井戸下層 歌り上手び	土師器	身舟	口縁部～ 脚柱部	15%	完全にやや剥離・磨滅して美しい。古墳時代後期。反転復元。	
46	図22	18	25	098	第1次 19-62	004井戸上層	土師器	高环	环部	50%	全体に剥離・磨滅して美しい。古墳時代後期。一部反転復元。	
47	図22	18	47	192	第1次 19-62	023落ち込み 011井戸上層 歌り上手び	弥生土器	二重口唇部	口縁部	30%	全体に磨滅して美しい。庄内式併行期新段階、反転復元。	
48	図22	—	42	149	第1次 19-62	032落ち込み 011井戸上層 歌り上手び	土師器	二重口唇部	口縁部	8%	全体に剥離・磨滅して美しい。布笛式併行古段階、反転復元。	
49	図22	18	46	188	第1次 19-62	032落ち込み 011井戸上層 歌り上手び	土師器	身舟	体部～ 脚柱部	50%	外張翼部から底盤部にかけて黒斑有り、全体に剥離・磨滅して美しい。庄内式併行期新段階、反転復元。	
50	図22	—	45	184	第1次 19-62	032落ち込み 011井戸上層 歌り上手び	弥生土器	二重口唇部	口縁部～ 脚柱部	30%	外張翼部から底盤部にかけて黒斑有り、全体に剥離・磨滅して美しい。庄内式併行期新段階、反転復元。	
51	図22	—	44	149	第1次 19-10-11	032落ち込み 011井戸上層 歌り上手び	弥生土器	身舟	口縁部	10%	完全に剥離・磨滅して美しい。庄内式併行期新段階、反転復元。	
52	図22	18	39	141	第1次 19-10-11	032落ち込み 011井戸上層 歌り上手び	弥生土器	高环	环部	25%	完全に磨滅して美しい。庄内式併行期新段階、一部反転復元。	
53	図22	—	40	142	第1次 19-10-11	032落ち込み 011井戸上層 歌り上手び	弥生土器	高环	外縁部～ 脚柱部	50%	全体に剥離・磨滅して美しい。庄内式併行期新段階、反転復元。	
54	図22	18	43	149	第1次 19-10-11	032落ち込み 011井戸上層 歌り上手び	土師器	高环	脚台部	60%	完全に剥離・磨滅して美しい。布笛式併行期古段階、一部反転復元。	
55	図22	—	41	142	第1次 19-10-11	032落ち込み 011井戸上層 歌り上手び	弥生土器	瓶	体部～ 脚柱部	50%	外張翼部から底盤部にかけて黒斑有り、全体に剥離・磨滅して美しい。庄内式併行期古段階、一部反転復元。	
56	図22	18	51	194	第1次 19-10-11	032落ち込み 011井戸上層 歌り上手び	土師器	製造底器	底部	100%	完全に剥離・磨滅して美しい。全體に被破。脚部3式、布笛式併行古段階、一部反転復元。	
57	図22	18	50	194	第1次 19-10-11	032落ち込み 011井戸上層 歌り上手び	土師器	製造底器	底部	50%	完全に剥離・磨滅して美しい。全體に被破。脚部3式、布笛式併行古段階、一部反転復元。	
58	図22	—	49	194	第1次 19-10-11	032落ち込み 011井戸上層 歌り上手び	土師器	製造底器	底部	100%	完全に剥離・磨滅して美しい。全體に被破。脚部3式、布笛式併行古段階、一部反転復元。	
59	図22	—	48	194	第1次 19-10-11	032落ち込み 011井戸上層 歌り上手び	土師器	製造底器	底部	50%	完全に剥離・磨滅して美しい。脚部3式、布笛式併行期古段階、反転復元。	
60	図22	18	22	156	第1次 18-24	001井戸上層 中腹	土師器	身舟	口縁部～ 脚柱部	75%	完全に道存にはまだ良好。奈良時代平城宮段階から。	
61	図22	—	20	075	第1次 18-24	001井戸上層 中腹	土師器	身舟	口縁部～ 脚柱部	15%	完全に磨滅して美しい。奈良時代平城宮段階から、反転復元。	
62	図22	18	24	157	第1次 18-24	第1次標題	001井戸上層	土師器	製造底器	10%	完全に磨滅して美しい。奈良時代、反転復元。	
63	図22	—	21	075	第1次 18-24	第1次標題	001井戸上層	須恵器	口縁部	25%	クロロ回転方向：左回り。奈良時代平城宮段階から、反転復元。	
64	図22	18	23	157	第1次 18-24	第1次標題	001井戸上層	須恵器	平底	95%	外周部縁部から底盤部にかけて黒斑有り、付着する。クロロ回転方向：右回り。奈良時代平城宮段階から。	
65	図22	19	5	045	第1次 19-611	倒溝	—	土師器	身舟	口縁部～ 脚柱部	45%	完全に剥離・磨滅して美しい。奈良時代から、反転復元。
66	図22	19	2	040	第1次 19-611	倒溝	032落ち込み 020可塑性有り	土師器	製造底器	体部～ 脚台部	90%	完全に剥離・磨滅して美しい。全體に被破。脚部3式、布笛式併行古段階、反転復元。
67	図22	—	3	040	第1次 19-611	倒溝	032落ち込み 020可塑性有り	須恵器	身舟	口縁部～ 脚柱部	8%	クロロ回転方向：左回り、右回り、陶器Ⅰ型式第5段階（田辺M147型式）、反転復元。
68	図22	19	4	043	第1次 19-611	倒溝	032落ち込み 020可塑性有り	須恵器	高环	脚台部	10%	クロロ回転方向：右回り、右回り、陶器Ⅱ型式第5段階（田辺M148型式）、反転復元。紙のため標題部分が不明確。
69	図22	19	1	009	第1次 19-18-9	倒溝	—	白磁	皿	口縁部～ 脚柱部	10%	口縁端部及び縁部の丸抜き取り、室町時代、反転復元。
70	図22	—	18	072	第1次 19-711	第1次標題	k-7接糸	瓦器	瓶	底部(瓶底)	45%	完全に剥離・磨滅して美しい。構成焼成過程をしくや軟質化。唐津時代、反転復元。
71	図22	—	19	080	第1次 19-616	第1次標題	k-11接糸	瓦器	小皿	口縁部～ 脚柱部	40%	完全に磨滅して美しい。構成焼成過程をしくや軟質化。唐津時代、反転復元。
72	図22	—	6	020	第1次 19-611	包含層(落ち込)	—	生土器	口縁部	10%	完全に剥離・磨滅して美しい。紀伊伊賀一派式、断面のみ	
73	図22	19	11	104	第1次 19-610	包含層(落ち込)	—	土師器	身舟	口縁部～ 脚柱部	10%	外周部縁部下半に剥離寸法の黒斑有り、全体に剥離・磨滅して美しい。古墳時代中盤から、一部反転復元。
74	図22	19	15	128	第1次 19-611	包含層(落ち込)	—	土师器	高环	脚柱部	50%	完全に剥離・磨滅して美しい。古墳時代後期から、一部反転復元。
75	図22	19	12	104	第1次 19-610	包含層(落ち込)	—	土师器	製造底器	脚台部	50%	完全に剥離・磨滅して美しい。陶器Ⅲ型式第1段階（田辺M15型式）、反転復元。
76	図22	19	13	104	第1次 19-610	包含層(落ち込)	—	土师器	製造底器	脚台部	50%	完全に剥離・磨滅して美しい。全体に被破。脚部3式、布笛式併行古段階、一部反転復元。

2012和田遺跡 出土遺物一覧(土器)

No. 3

遺物番号	添付番号	写真版	実測値 直径(横) 上部厚 底部厚	出土場所 地区 上・下区画	遺構番号 横構造層位	遺物番号 底面 底面形状	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
77 図23	—	10 092	第1次 I9-a-10	包含層 底 第3層	—	須恵器	坪皿	口縁部	10%	ロクロ回転方向:不明、陶色Ⅱ型式第3段階(田辺MT85式)、反転復元	
78 図23	—	9 066	第1次 I9-d-10	包含層 底 第3層	—	須恵器	坪皿	口縁部	10%	ロクロ回転方向:回り、陶色Ⅱ型式第4段階(田辺TK43型式)、削鉗込み	
79 図23	19 17	129	第1次 I9-e-10-11	包含層 底 第3層	—	須恵器	坪身	口縁部～ 底面	25%	外面部表面から底面底面にかけて自然擦落く付着する。ロクロ回転方向:右回り、陶色Ⅱ型式第4段階(田辺TK43型式)、反転復元	
80 図23	19 16	121 043	第1次 I9-e-11 I9-d-11	包含層 底 第3層 側溝	—	須恵器	無蓋高杯	杯部	25%	ロクロ回転方向:右回り、陶色Ⅰ型式第3段階(田辺TK208型式)、反転復元	
81 図23	19 7	027	第1次 I8-e-10	包含層 底 第3層	—	須恵器	平皿	縁部～ 底面	10%	ロクロ回転方向:右回り、陶色Ⅲ型式(田辺K46式前復元)、一部鉛転復元	
82 図23	19 14	127	第1次 I9-a-10-11	包含層 底 第3層	—	須恵器	坪身	口縁部	20%	ロクロ回転方向:左回り、瓦張模様、飛鳥Ⅱ段階、陶色Ⅳ型式第6段階、反転復元	
83 図23	—	8 060	第1次 I9-g-10	包含層 底 第3層	—	信楽系 陶器	碗	部	15%	黄ばらの高内露胎、露胎部:2.5YB/2灰白色。施釉部:2.5YB/3黄色。並転復元	
94 図34	20 124	377	第2次 I8-a-10	第2遺構面 H10-10	2010自然流路 下層 sondage トレンチ	井生土器	広口壺	口縁部～ 底面	25%	全体に剥離、磨滅めて著しい。口縁部下面に凹線文の後半部を有する。外面部表面から底面底面に下に施塗墨状文の痕跡有り。紀伊Ⅱ-3様式、反転復元	
95 国34	20 123	501	第2次 I9-b-10	第2遺構面 H10-2	2010自然流路 下層	井生土器	広口壺	口縁部～ 底面	15%	全体に剥離、磨滅めて著しい。外面部表面に上位に横筋状文、下位に施塗墨状文の痕跡有り。紀伊Ⅱ-1様式、反転復元	
96 国34	20 114	485	第2次 I9-c-24	第2遺構面 H9-24	2010自然流路 下層	井生土器	広口壺	口縁部～ 底面	25%	全体に剥離、磨滅めて著しい。紀伊Ⅱ-1様式、反転復元	
97 国34	20 113	485	第2次 I9-c-24	第2遺構面 H9-24	2010自然流路 下層	井生土器	広口壺	口縁部～ 底面	15%	全体に剥離、磨滅めて著しい。外面部表面に施塗墨状文もしくは墨文の僅かな痕跡有り。紀伊Ⅱ-2様式、反転復元	
98 国34	20 118	520	第2次 I9-a-23	第2遺構面 H9-23	2010自然流路 下層	井生土器	広口壺	口縁部～ 底面	15%	全体に剥離、磨滅めて著しい。紀伊Ⅱ-1様式、反転復元	
99 国34	20 120	538	第2次 I9-b-19	第2遺構面 H10-19	2010自然流路 下層	井生土器	広口壺	口縁部～ 底面	33%	全体に磨滅して著しい。庄内式平行筋古段階、反転復元	
100 国34	20 119	614	第2次 I9-b-15	第2遺構面 H10-15	2010自然流路 下層	井生土器	高杯	口縁部～ 体部	15%	全体に剥離、磨滅めて著しい。紀伊Ⅱ-1様式、反転復元	
101 国34	20 116	485	第2次 I9-c-24	第2遺構面 H9-24	2010自然流路 下層	井生土器	高杯	脚柱部	55%	全体に剥離、磨滅めて著しい。紀伊Ⅱ-1様式、一部反転復元	
102 国34	20 117	499	第2次 I9-b-23	第2遺構面 H9-23	2010自然流路 下層	井生土器	高杯	脚台部	25%	外面部から内面部にかけて裏面有り、全体に剥離、磨滅の度合が著しい。紀伊Ⅱ-1様式、反転復元	
103 国34	20 121	501	第2次 I9-b-10	第2遺構面 H10-10	2010自然流路 下層	井生土器	鉢	口縁部～ 体部	5%	全体に剥離、磨滅して著しい。紀伊Ⅱ-1様式、反転復元。 組みたため底不規整	
104 国34	20 122	501	第2次 I9-c-25	第2遺構面 H10-25	2010自然流路 下層	井生土器	手付平皿	口縁部～ 体部	25%	全体に剥離、磨滅して著しい。外面部には露胎と斜め地子文、下半は本の笠状の形をもねた網目斜格子文を有する。その間に横筋の把付を貼付し、紀伊Ⅲ-2様式、反転復元。組みたため口縫不規整	
105 国34	20 115	485	第2次 I9-c-25	第2遺構面 H9-25	2010自然流路 下層	井生土器	器台	脚台部	25%	外面部に裏面有り、全体に剥離、磨滅して著しい。紀伊Ⅱ-1様式、反転復元	
106 国34	20 126	331	第2次 I9-c-25	第2遺構面 H10-25	2010自然流路 下層	井生土器	広口壺	口縁部	20%	全体に剥離、磨滅して著しい。口縁部下面に円形印摩す+竹管入有り。紀伊Ⅱ-1様式、反転復元	
107 国34	20 127	487	第2次 I9-c-24	第2遺構面 H9-24	2010自然流路 上層	井生土器	広口壺	口縁部	15%	全体に剥離、磨滅して著しい。口縁部下面に横筋点文が僅かに残る。紀伊Ⅱ-1様式、反転復元	
108 国34	20 125	905	第2次 I9-a-18	第2遺構面 H9-18	2010自然流路 上層	井生土器	広口壺	口縁部～ トレンチ鉢	15%	全体に剥離、磨滅して著しい。紀伊Ⅱ-1様式、反転復元	
109 国34	20 133	507	第2次 I9-c-20	第2遺構面 H9-20	2010自然流路 上層	井生土器	広口壺	口縁部～ 底面	15%	全体に剥離、磨滅して著しい。庄内式平行筋古段階、反転復元	
110 国34	20 130	525	第2次 I9-b-19	第2遺構面 H9-19	2010自然流路 上層	井生土器	広口壺	口縁部	25%	全体に剥離、磨滅して著しい。庄内式平行筋古段階、反転復元	
111 国34	20 129	477	第2次 I9-b-24	第2遺構面 H9-24	2010自然流路 上層	井生土器	二重口縁鉢	口縁部	10%	全体に剥離、磨滅して著しい。外面部に貼付された円形印摩す+竹管入の位置は不明、外面部口縫に斜格子文を有する。紀伊Ⅱ-1様式、反転復元	
112 国34	20 134	507	第2次 I9-c-20	第2遺構面 H9-20	2010自然流路 上層	井生土器	鉢	口縁部～ 体部	5%	全体に剥離、磨滅して著しい。紀伊Ⅱ-1様式、反転復元。組みたため口縫不規整	
113 国34	20 131	613	第2次 I9-b-17	第2遺構面 H9-17	2010自然流路 上層	井生土器	鉢	口縁部～ 体部	7%	全体に剥離、磨滅して著しい。紀伊Ⅱ-1様式、反転復元	
114 国34	20 135	465	第2次 I9-c-20	第2遺構面 H9-20	2010自然流路 上層	井生土器	盤	口縁部	6%	全体に剥離、磨滅して著しい。紀伊Ⅱ-1様式、反転復元。組みたため口縫不規整	
115 国34	20 136	466	第2次 I9-c-20	第2遺構面 H9-20	2010自然流路 上層	井生土器	高杯	脚柱部	10%	口縫部から内面部に剥離、磨滅して著しい、外面部の遺存は不明有り、紀伊Ⅱ-1様式、反転復元	
116 国34	20 132	499	第2次 I9-c-21	第2遺構面 H9-c-21	2010自然流路 上層	井生土器	高杯	脚台部	65%	全体に剥離、磨滅して著しい。紀伊Ⅱ-1様式、一部反転復元	
117 国34	20 128	469	第2次 I9-c-20	第2遺構面 H9-c-20	2010自然流路 上層	井生土器	鉢	口縁部～ 拂み鉢	60%	全体に剥離、磨滅して著しい。紀伊Ⅱ-1様式～3様式、一部反転復元	
118 国35	20 103	859	第2次 I9-d-10	第1遺構面 H9-d-10	2001土基底より	井生土器	広口壺	口縁部	25%	全体に剥離、磨滅して著しい。庄内式併行筋古段階、反転復元	
119 国35	20 104	901	第2次 I9-d-10	第1遺構面 H9-d-10	2001土基底より	井生土器	広口壺	口縁部	10%	全体に剥離、磨滅して著しい。庄内式併行筋古段階、反転復元	
120 国35	20 105	901	第2次 I9-d-10	第1遺構面 H9-d-10	2001土基底より	井生土器	鉢	口縁部～ 体部	8%	全体に剥離、磨滅して著しい。庄内式併行筋古段階か、反転復元。絞口のため	
121 国35	20 102	859	第2次 I9-d-10	第1遺構面 H9-d-10	2001土基底より	井生土器	高杯	脚柱部	100%	全体に剥離、磨滅して著しい。庄内式併行筋古段階、一部反転復元	
122 国35	20 99	363	第2次 I9-d-10	第1遺構面 H9-d-10	2005土壟	井生土器	鉢	口縁部～ 体部	10%	全体に磨滅して著しい。庄内式併行筋古段階、反転復元	
123 国35	21 146	596	第2次 I9-c-16	第1遺構面 H9-c-16	2001自然流路 下層トレンチ	井生土器	広口壺	口縁部～ 底面	25%	全体に磨滅して著しい。外面部表面に下に凹線文の後側面の墨文、外面部表面に上位に横筋状文、下位に凹線文の後側面墨状文を有する。紀伊Ⅱ-3様式、反転復元	
124 国35	21 145	593	第2次 I9-c-16	第1遺構面 H9-c-16	2001自然流路 下層トレンチ	井生土器	広口壺	口縁部～ 底面	25%	全体に剥離、磨滅して著しい。紀伊Ⅱ-1様式、反転復元	

2012和田遺跡 出土遺物一覧(土器)

No. 4

遺物番号	添付 番号	写真 図版	実測直徑 実測高さ	出土位置 出土層位	地区 施設名・場所 出土位置 出土層位	遺構名・場所 遺構位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考	
125	図35	21	165	709	第2次 356 19-11	第1遺構面	2011自然流路 下層	土師器	二重口縁	口縁部	10%	全体に剥離・磨滅して美しい、布留式併行期中段階、反転復元
126	図35	21	143	570	第2次 156 19-11	第1遺構面	2011自然流路 下層	弥生土器	腹	口縁部・ 体部	5%	全体に剥離・磨滅して美しい、庄内式併行期古段階、反転復元
127	図35	21	166	749	第2次 356 19-11	第1遺構面	2011自然流路 下層	土師器	腹	口縁部・ 体部	5%	全体に剥離・磨滅して美しい、布留式併行期か、反転復元。絹片のため口縁不明確
128	図35	21	138	553	第2次 126 19-24	第1遺構面	2011自然流路 下層	土師器	腹	口縁部・ 体部	6%	全体に剥離・磨滅して美しい、布留式併行期新段階、反転復元。絹片のために口縁不明確
129	図35	21	144	593	第2次 2-19 19-16	第1遺構面	2011自然流路 下層トレンチ 19-16	弥生土器	高环	耳部	15%	全体に剥離・磨滅して美しい、紀伊伊-1様式、反転復元
130	図35	21	167	749	第2次 356 19-11	第1遺構面	2011自然流路 下層	土師器	(縦)台か 耳部	耳部	50%	内面に剥離や突起等でやや凹、全体に剥離・磨滅して美しい、布留式併行期か、一部反転復元
131	図35	21	141	569	第2次 19-14 19-14	第1遺構面	2011自然流路 下層	土師器	高环	脚台部	80%	全体に剥離・磨滅して美しい、布留式併行期古段階、一部反転復元
132	図35	21	139	554	第2次 19-14 19-14	第1遺構面	2011自然流路 下層	土師器	高环	脚台部	60%	全体に剥離・磨滅して美しい、布留式併行期中段階か、一部反転復元
133	図35	—	142	569	第2次 19-14 19-14	第1遺構面	2011自然流路 下層	須恵器	高环	脚台部	25%	外縁全体に自然剥離く付する。ロクロ回転方向:右回り、陶邑Ⅱ型式第4段階か(田辺TK23式か)、反転復元
134	図35	—	147	652	第2次 2-19 19-11-12 d12	第1遺構面	2011自然流路 下層 トレンチ 19-11-12	弥生土器	広口唇 (縦)台か 耳部	口縁部	14%	全体に遺存はまだ良好、内面奥にまばらにラリットルの付着物有り、庄内式併行期古段階、反転復元
135	図35	—	158	578	第2次 19-14 19-14	第1遺構面	2011自然流路 上層	弥生土器	広口唇	口縁部・ 体部	20%	全体に剥離・磨滅して美しい、庄内式併行期古段階、反転復元
136	図35	21	162	604	第2次 2-18 19-4-1 g13	第1遺構面	2011自然流路 上層	弥生土器	唇	口縁部・ 体部	15%	全体に剥離・磨滅して美しい、庄内式併行期新段階、反転復元
137	図35	21	151	603	第2次 2-18 19-14	第1遺構面	2011自然流路 上層	土師器	二重口縁	口縁部・ 体部	40%	全体に剥離・磨滅して美しい、布留式併行期古段階、反転復元
138	図35	—	154	557	第2次 18-18 H9-17	第1遺構面	2011自然流路 上層	弥生土器	腹	口縁部・ 体部	5%	全体に剥離・磨滅して美しい、庄内式併行期古段階、反転復元。絹片のため口縁不明確
139	図35	—	159	573	第2次 2-18 19-15-16	第1遺構面	2011自然流路 上層	弥生土器	腹	体部・ 底部	50%	外縁全体から底盤裏面にかけて部分的に付着する。全体に剥離・磨滅して美しい、庄内式併行期古段階か、一部反転復元
140	図35	21	150	893	第2次 2-18 19-15	第1遺構面	2011自然流路 下層トレンチ 19-15	土師器	腹	体部・ 底部	75%	外縁全体から底盤裏面にかけて部分的に付着する。全体に剥離・磨滅して美しい、布留式併行期古段階、一部反転復元
141	図35	21	149	591	第2次 2-18 19-14	第1遺構面	2011自然流路 トレンチ	弥生土器	高环	耳部	40%	全体に剥離やや美しい、庄内式併行期古段階、一部反転復元
142	図35	21	160	599	第2次 2-18 19-14	第1遺構面	2011自然流路 上層	弥生土器	高环	脚台部	60%	全体に剥離・磨滅して美しい、庄内式併行期古段階、一部反転復元
143	図35	21	161	602	第2次 2-18 19-14	第1遺構面	2011自然流路 上層	土師器	脚台部	40%	全体に剥離・磨滅して美しい、布留式併行期古段階、一部反転復元	
144	図35	21	153	542	第2次 19-19 H9-15	第1遺構面	2011自然流路 上層	土師器	脚台部	50%	全体に剥離・磨滅して美しい、布留式併行期古段階、一部反転復元	
145	図35	21	156	561	第2次 19-19 19-15	第1遺構面	2011自然流路 上層	土師器	脚柱部	100%	全体に剥離・磨滅して美しい、布留式併行期古段階、一部反転復元	
146	図35	21	148	591	第2次 2-18 19-14	第1遺構面	2011自然流路 トレンチ	土師器	高环	脚台部	50%	全体に剥離・磨滅して美しい、布留式併行期古段階、一部反転復元
147	図35	21	152	535	第2次 19-19 19-14	第1遺構面	2011自然流路 上層	土師器	高环	脚台部	50%	全体に剥離・磨滅して美しい、布留式併行期古段階、一部反転復元
148	図36	22	140	562	第2次 19-19 19-11	第1遺構面	2011自然流路 上層	須恵器	环	天井部・ 口縁部	50%	外縁全体に自然剥離く付する。ロクロ回転方向:右回り、陶邑Ⅰ型式第3段階(田辺TK20型式)、一部反転復元
149	図36	22	157	564	第2次 19-19 19-11	第1遺構面	2011自然流路 上層	須恵器	环	天井部・ 口縁部	20%	ロクロ回転方向:右回り、陶邑Ⅰ型式第4段階(田辺TK20型式)、一部反転復元
150	図36	22	163	702	第2次 356 19-13	第1遺構面	2011自然流路 上層	須恵器	环	天井部・ 口縁部	15%	ロクロ回転方向:右回り、陶邑Ⅱ型式第3段階(田辺TK85型式)、反転復元
151	図36	22	164	708	第2次 356 19-11	第1遺構面	2011自然流路 上層	須恵器	舟舟	口縁部・ 底部	10%	外縁全体に自然剥離く付する。ロクロ回転方向:左回り、陶邑Ⅱ型式第4段階(田辺TK43型式)、一部反転復元
152	図36	22	137	553	第2次 19-19 H9-14	第1遺構面	2011自然流路 下層 上層	須恵器	• 舟舟	口縁部・ 底部	50%	外縁全体と内面口縁部に自然剥離く付する。ロクロ回転方向:右回り、陶邑Ⅱ型式第3段階(田辺TK47型式)、一部反転復元
153	図36	22	155	559	第2次 18-19 19-17	第1遺構面	2011自然流路 上層	須恵器	高环	环部・ 脚台部	25%	外縁全体に自然剥離く付する。ロクロ回転方向:右回り、陶邑Ⅱ型式第3段階(田辺TK46型式)、一部反転復元
154	図36	22	110	435	第2次 2-29 H10-x1	第1遺構面	2021溝状遺構	須恵器	舟舟	口縁部・ 体部	5%	ロクロ回転方向:左回り、陶邑Ⅱ型式第2段階・第6段階、反転復元。絹片のため口縁・底部不明確
155	図36	22	112	547	第2次 2-29 H10-y1	第1遺構面	2048土坑	須恵器	舟舟	口縁部・ 体部	6%	ロクロ回転方向:左回り、陶邑Ⅱ型式第5段階・第6段階、反転復元。絹片のため口縁・底部不明確
156	図36	22	100	403	第2次 19-19 H9-y25	第1遺構面	2019土坑 (土坑則)	須恵器	舟舟	口縁部・ 体部	5%	外縁全体に自然剥離く付する。ロクロ回転方向:右回り、陶邑Ⅱ型式第6段階、反転復元。絹片のため口縁不明確
157	図36	22	109	435	第2次 2-29 H10-x1	第1遺構面	2021溝状遺構	須恵器	舟舟	天井部・ 口縁部	15%	ロクロ回転方向:左回り、陶邑Ⅱ型式第1段階か、反転復元
158	図36	22	101	400	第2次 19-19 H9-y25	第1遺構面	2019土坑 (土坑則)	須恵器	舟舟	天井部 (高台)	25%	ロクロ回転方向:右回り、陶邑Ⅱ型式第1段階か、鳥糞or奈良時代か、反転復元
159	図36	22	108	435	第2次 2-29 H10-x1	第1遺構面	2021溝状遺構	須恵器	舟舟	体部	10%	ロクロ回転方向:左回り、陶邑Ⅱ型式第1段階か、鳥糞or奈良時代か、反転復元
160	図36	22	111	436	第2次 2-29 I10-y1	第1遺構面	2021溝状遺構	須恵器	舟舟	口縁部	5%	ロクロ回転方向:右回り、陶邑Ⅱ型式第1段階か、反転復元。絹片のため口縁不明確
161	図36	22	106	434	第2次 2-29 H10-x1	第1遺構面	2021溝状遺構	黑色土器 A類	舟舟	口縁部・ 底部	20%	外縁は部分的に若いヘラケジ調整、全体に磨滅して、平安時代後期、反転復元
162	図36	22	107	454	第2次 2-29 H10-x1	第1遺構面	2021溝状遺構	瓦器	舟舟 (高台)	100%	全体に磨滅して美しい、焼成度やや軟質化、平安時代後期、一部反転復元	
163	図36	22	93	259	第2次 2-29 H10-x1	岱合層 第1層	—	須恵器	舟舟	天井部・ 口縁部	15%	ロクロ回転方向:右回り、陶邑Ⅱ型式第3段階(田辺TK85型式)、反転復元

2012和田遺跡 出土遺物一覧(土器)

No. 5

遺物番号	添付番号	写真版	実測書類	出土位置 区分	地区 区分	遺構面 別	遺構名 と年層 区分	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
164	図36	22	85	114	第2次 1区 19-a274	包含層 第2層	——	須恵器	坪壠	天井部- 口縁部	15%	外腹全體に自然輪廓く付する。ロクロ回転方向:右回り。 陶色Ⅱ型式第3段階(田辺K215型式)、反転復元。
165	図36	22	88	142	第2次 2-29 H10-y2-2	包含層 第2層	——	須恵器	坪壠	天井部- 口縁部	8%	ロクロ回転方向:右回り、陶色Ⅱ型式第1段階(田辺K217型式)、反転復元。照片のため口径不明確。
166	図36	22	96	336	第2次 2-28 H10-y2	包含層 第2層	——	須恵器	坪壠	天井部- 口縁部	——	ロクロ回転方向:左回り、陶色Ⅱ型式第3段階(田辺K171型式)、反転復元。反転復元。照片のため口径不明確。
167	図36	22	91	259	第2次 2-29 H10-x2	包含層 第2層	——	須恵器	坪壠	——	8%	ロクロ回転方向:右回り、陶色Ⅱ型式第1段階-第2段階。反 転復元。照片のため口径不明確。
168	図36	22	84	112	第2次 1区 H9-y2-2	包含層 第2層	——	須恵器	身舟	口縁部- 底部	15%	ロクロ回転方向:右回り、陶色Ⅱ型式第3段階-第5段階(田 辺K105型式-M75型式)、反転復元。
169	図36	22	98	368	第2次 2-29 H10-y2	包含層 第2層	——	須恵器	身舟	口縁部- 底部	15%	ロクロ回転方向:左回り、陶色Ⅱ型式第4段階(田辺K445型 式)、反転復元。
170	図36	22	97	368	第2次 2-29 H10-v6	包含層 第2層	——	須恵器	身舟	口縁部- 底部	10%	ロクロ回転方向:右回り、陶色Ⅱ型式第5段階(田辺K209型 式)、反転復元。
171	図36	22	90	255	第2次 2-29 H10-v6	包含層 第2層	——	須恵器	舟	口縁部	8%	ロクロ回転方向:左回り、陶色Ⅱ型式か、反転復元。照片の ため口径不明確。
172	図36	22	94	281	第2次 2-29 H10-x4	包含層 第2層	——	須恵器	舟	口縁部- 底部	15%	ロクロ回転方向:右回り、陶色Ⅱ型式か、反転復元。
173	図36	22	86	131	第2次 1区 H9-y2	包含層 第2層	——	須恵器	腹	口縁部	6%	ロクロ回転方向:右回り、陶色Ⅱ型式第1段階(田辺K73型 式)、反転復元。照片のため口径不明確。
174	図36	22	95	333	第2次 2-29 H10-x3	包含層 第2層	——	須恵器	腹	口縁部	5%	ロクロ回転方向:右回り、陶色Ⅱ型式第1段階(田辺K217型 式)、反転復元。照片のため口径不明確。
175	図36	22	89	142	第2次 2-29 H10-y2-3	包含層 第2層	——	須恵器	腹	口縁部	10%	内腹全体に自然輪廓く付する。ロクロ回転方向:左回り。 陶色Ⅱ型式6段階。反転復元。照片のため口径不明確。
176	図36	22	92	259	第2次 2-29 H10-x3	包含層 第2層	——	須恵器	高脚	脚台部	15%	内腹全体に自然輪廓く付する。ロクロ回転方向:左回り。 陶色Ⅱ型式4段階(田辺K23型式)。反転復元。
177	図36	22	87	279	第2次 1区 I9-d13	包含層 第2層	——	土師器	高脚	脚柱部	100%	脚柱は土器上部単純化上げ法によること成形。全体に刻離・磨 擦地で著しい。布石併用。刮削古擦痕。一部反転復元。
196	図50	24	177	734	第2次 3区 ——	——	3019土筑 取り上げて6区5 v1-2-10	弥生土器	広口	口縁部- 底部	15%	全体に刻離・磨擦地で著しい。外腹全体に刃形切妻地で 著しい。外腹全体に体部上に突出し出現。紀伊+7標準+1条の規格 次第。
197	図50	24	175	731	第2次 3区 ——	——	3019土筑 取り上げて6区5 v1-2-10	弥生土器	広口	口縁部- 底部	20%	内腹全体に自然輪廓く付する。ロクロ回転方向:左回り。 陶色Ⅱ型式6段階。反転復元。
198	図50	24	183	737	第2次 3区 I10-cb-69	3019土筑 取り上げて6区5 v1-2-10	弥生土器	広口	口縁部- 底部	60%	外腹全体から体部上と体部下から底部にかけて裏腹有 り。全体に刻離・磨擦地で著しい。外腹全体上に刻離地 或之次上。上部削り出る。紀伊-1-2標準。反転復元。	
199	図50	24	178	735	第2次 3区 ——	——	3019土筑 取り上げて6区5 v1-2-10	弥生土器	広口	口縁部	20%	全体に刻離・磨擦地で著しい。外腹全体に刻離地或之次上 を施す。紀伊-1-2標準。反転復元。
200	図50	—	181	742	第2次 3区 ——	——	3019土筑 取り上げて6区5 v1-2-10	弥生土器	広口	口縁部	60%	全体に刻離・磨擦地で著しい。外腹全体に刻離地或之次上 を施す。紀伊-1-2標準。反転復元。
201	図50	24	174	724	第2次 3区 ——	——	3019土筑 取り上げて6区4 v1-2-10	弥生土器	広口	口縁部	20%	内腹に刻離・磨擦地で著しい。外腹は要無し。紀伊-1- 2標準。反転復元。
202	図50	24	180	731	第2次 3区 ——	——	3019土筑 取り上げて6区5 v1-2-10	弥生土器	腹	体部	5%	全体に刻離・磨擦地で著しい。外腹全体上位に削り出し要無し地 或之次上。紀伊-1-2標準。反転復元。細部のため口径不明確。
203	図50	24	176	731	第2次 3区 ——	——	3019土筑 取り上げて6区5 v1-2-10	弥生土器	腹	口縁部- 底部	8%	全体に刻離・磨擦地で著しい。外腹全体上位に刻離地 或之次上。縫合線を施す。紀伊-1-2標準。反転復元。細部のため口 径不明確。
204	図50	—	182	742	第2次 3区 ——	——	3019土筑 取り上げて6区5 v1-2-10	弥生土器	腹	体部- 底部	50%	外腹全体から底面部にかけて裏腹有り。全体に刻離・磨 擦地で著しい。紀伊-1-2標準。一回反転復元。
205	図50	—	179	689	第2次 3区 110-d11	3019土筑 取り上げて6区4 v1-2-10	弥生土器	腹	底部	100%	外腹全体から底面部にかけて裏腹有り。全体に刻離・磨 擦地で著しい。紀伊-1-2標準。或之次上。反転復元。	
206	図50	24	187	724	第2次 3区 ——	——	3019土筑 取り上げて6区5 v1-2-10	縄文土器	深鉢	体部	5%	全体に刻離・磨擦地で著しい。貼付突起上に深いV字剥 離地が認められる。縄文時代地殻。細部のため天地逆の可能性も 有り。
207	図50	24	196	742	第2次 3区 ——	——	3019土筑 取り上げて6区5 v1-2-10	縄文土器	深鉢	体部	5%	全体に刻離・磨擦地で著しい。貼付突起上に深いV字剥 離地が認められる。縄文時代地殻。細部のため天地逆の可能性も 有り。
208	図50	24	194	735	第2次 3区 ——	——	3019土筑 取り上げて6区5 v1-2-10	縄文土器	深鉢	体部	5%	全体に刻離・磨擦地で著しい。貼付突起上に深いV字剥 離地が認められる。縄文時代地殻。細部のため天地逆の可能性も 有り。
209	図50	24	195	741	第2次 3区 I10-d10	3019土筑 取り上げて6区5 v1-2-10	弥生土器	腹	口縁部- 底部	8%	全体に刻離・磨擦地で著しい。口部部に浅いV字剥離みが施 される。紀伊-1-2標準。或之次上。反転復元。	
210	図50	24	184	724	第2次 3区 ——	——	3019土筑 取り上げて6区5 v1-2-10	弥生土器	腹	口縁部- 底部	12%	部分的に刻離・磨擦地で著しい。紀伊-1-2標準。反転復元。
211	図50	24	197	885	第2次 3区 I10-e10	3019土筑 取り上げて6区5 v1-2-10	弥生土器	腹	口縁部	5%	全体に刻離・磨擦地で著しい。外腹裏底部に浅いV字剥 離地有り。紀伊-1-2標準。細部のため口径不明確。	
212	図50	24	192	733	第2次 3区 ——	——	3019土筑 取り上げて6区5 v1-2-10	弥生土器	腹	口縁部- 底部	10%	全体に刻離・磨擦地で著しい。口部部に浅いV字剥 離地有り。細部のため口径不明確。
213	図50	24	185	724	第2次 3区 ——	——	3019土筑 取り上げて6区5 v1-2-10	弥生土器	腹	口縁部	8%	全体に刻離・磨擦地で著しい。外腹全体に複数のV字剥 離地が認められる。紀伊-1-2標準。反転復元。
214	図50	24	198	886	第2次 3区 I10-e10	3019土筑 取り上げて6区5 v1-2-10	弥生土器	腹	口縁部	5%	全体に刻離・磨擦地で著しい。紀伊-1-2標準。細部のため口 径不明確。	
215	図50	—	186	724	第2次 3区 ——	——	3019土筑 取り上げて6区5 v1-2-10	弥生土器	腹	口縁部- 底部	5%	全体に刻離・磨擦地で著しい。紀伊-1-2標準。細部のため 口徑と外腹のみ。
216	図50	24	191	731	第2次 3区 ——	——	3019土筑 取り上げて6区5 v1-2-10	弥生土器	腹	口縁部- 底部	12%	全体に刻離・磨擦地で著しい。紀伊-1-2標準。反転復元。
217	図50	24	189	724	第2次 3区 ——	——	3019土筑 取り上げて6区5 v1-2-10	弥生土器	腹	口縁部- 底部	15%	外腹全体下部に裏腹有り。部分的に刻離・磨擦地で著 しい。紀伊-1-2標準か、反転復元。
218	図50	24	188	724	第2次 3区 ——	——	3019土筑 取り上げて6区5 v1-2-10	弥生土器	腹	口縁部- 底部	10%	部分的に刻離・磨擦地で著しい。紀伊-1-2標準か、反転復 元。
219	図50	24	190	730	第2次 3区 ——	——	3019土筑 取り上げて6区5 v1-2-10	弥生土器	腹	口縁部	50%	外腹全体から底面部にかけて裏腹有り。内腹の一部 に強いて刻離・磨擦地で著しい。紀伊-1-2標準か、反転復 元。

2012和田遺跡 出土遺物一覧(土器)

No. 6

遺物 番号	添付 番号	写真 図版	実測値 寸法(横幅× 奥行き× 高さ)	出土場所 と回数	地区 取上面	遺構面 と埋蔵 層位	遺物番号・年月 と組合せ	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
220	図50	24	193	734	第2次 3B 110~b10	——	3019土坑 取り上げ品第5	弥生土器	鉢	底部	100%	外亞底部から底部底面の一部にかけて黒茎有り、全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊I~2様式か、反転復元
221	図51	25	234	845	第2次 3B 110~d~e5	——	3135土坑 縄文土器	深鉢	口縁部~ 体部	5%	外亞底部の貼付安差にて保付帯の痕跡有り、口部と体部の剥離・磨滅極めて著しい、外面部に黒茎やや著しい、口部と底部の貼付帯は上に深いV字形跡が施される。縄文時代焼成、反転復元、組合のために口部不確	
222	図51	25	232	851	第2次 3B 110~d~e5	——	3099土坑 弥生土器	広口壺	口縁部~ 体部	15%	外亞底部に保付帯の跡有り、全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊I~2様式か、反転復元	
223	図51	25	233	812	第2次 3B 110~d~e5	——	3104土坑 3099土坑跡	弥生土器	壺	口縁部~ 体部	15%	外亞底部以下に保付帯の痕跡有り、全体に剥離・磨滅極めて著しい、外面部に黒茎やや著しい、口部と底部の貼付帯は上に深いV字形跡が施される。焼成時間による焼付の割合を施す。紀伊I~2様式、反転復元
224	図51	25	217	743	第2次 3B 110~d~e5	——	3032井戸 弥生土器	広口壺	口縁部	25%	全体にやや黒茎ざみ、庄内式併行古縁鉢、反転復元	
225	図51	25	218	927	第2次 3B 110~d~e5	——	3032井戸 弥生土器	広口壺	口縁部	10%	全体に黒茎極めて著しい、庄内式併行古縁鉢、反転復元	
226	図51	25	219	933	第2次 3B 110~d~e5	——	3032井戸 弥生土器	広口壺	口縁部	25%	内面部に黒茎ざみ、外面部に黒茎やや著しい、口部と底部の貼付帯は下に深いV字形跡が施される。焼成時間による焼付の割合を施す。紀伊I~2様式、反転復元	
227	図51	25	222	938	第2次 3B 110~d~e5	——	3037井戸 番下層	弥生土器	壺	口縁部~ 底部	95%	全体に遺存はまま良好、庄内式併行古縁鉢段階、一部反転復元
228	図51	25	221	933	第2次 3B 110~d~e5	——	3032井戸 弥生土器	壺	口縁部~ 底部	50%	外亞底部下から底部底面にかけて黒茎有り、全体に遺存はまま良好、庄内式併行古縁鉢段階、一部反転復元	
229	図51	—	216	743	第2次 3B 110~d~e5	——	3032井戸 弥生土器	壺	部~ 底部	10%	内面部に黒茎ざみ、外面部に黒茎やや著しい、外面部の遺存はまま良好、庄内式併行古縁鉢段階、一部反転復元	
230	図51	25	220	933	第2次 3B 110~d~e5	——	3032井戸 弥生土器	鉢か 壺	部~ 底部	60%	内面部に底部下が黒茎やや黒色する。全体に剥離やや著しい、庄内式併行古縁鉢段階、一部反転復元	
231	図51	25	205	915	第2次 3B 110~d~e5	——	3031井戸 附	弥生土器	二重口壺	口縁部	8%	外面部・黒茎ざみ、全体に剥離やや著しい、庄内式併行古縁鉢、反転復元、組合のために口部不確
232	図51	25	204	915	第2次 3B 110~d~e5	——	3031井戸 附	弥生土器	広口壺	口縁部	12%	全体に黒茎極めて著しい、阿波式土器、庄内式併行古縁鉢、反転復元
233	図51	25	207	872	第2次 3B 110~d~e5	——	3027土坑 取り上げ!	須恵器	耳壺	口縁部	100%	外亞部以下に自然剥離多く付着する。クロロ回向方向・回向・陶邑式型式M1段階(田辺M15型式)
234	図51	25	206	876	第2次 3B 110~d~e5	——	3027土坑 取り上げの下	須恵器	耳壺	口縁部~ 底部	30%	外亞部以下に自然剥離多く付着する。クロロ回向方向・回向・陶邑式型式M1段階(田辺M15型式)、反転復元
235	図51	25	206	716	第2次 3B 110~d~e5	——	3027土坑 取り上げ2	土師器	手作小深鉢	口縁部~ 底部	80%	外亞部から底部中位までの反転の体積中位の位置に所在する黒茎あり、内面部の剥離や著しい、外面部の遺存はまま良好、庄内式併行古縁鉢段階、一部反転復元
236	図51	25	210	876	第2次 3B 110~d~e5	——	3027土坑 取り上げM5	土師器	手作小小鉢	口縁部~ 底部	100%	縁部の歪み著しい、全体に剥離や著しい、古晩時代後期
237	図51	25	214	878	第2次 3B 110~d~e5	——	3027土坑 取り上げM5	土師器	手作小小鉢	口縁部~ 底部	100%	縁部の歪み極めて著しい、全体に剥離や著しい、古晩時代後期
238	図51	25	212	876	第2次 3B 110~d~e5	——	3027土坑 取り上げM5	土師器	手作小小鉢	口縁部~ 底部	100%	縁部の歪み著しい、全体に剥離や著しい、古晩時代後期
239	図51	25	213	877	第2次 3B 110~d~e5	——	3027土坑 取り上げM5	土師器	手作小小鉢	口縁部~ 底部	100%	縁部の歪み著しい、全体に剥離や著しい、古晩時代後期
240	図51	25	215	879	第2次 3B 110~d~e5	——	3027土坑 取り上げM5	土師器	手作小小鉢	口縁部~ 底部	100%	縁部の歪み著しい、全体に剥離や著しい、古晩時代後期
241	図51	25	209	876	第2次 3B 110~d~e5	——	3027土坑 取り上げM5	土師器	手作小小鉢	口縁部~ 底部	100%	縁部の歪み著しい、全体に剥離や著しい、古晩時代後期
242	図51	25	211	876	第2次 3B 110~d~e5	——	3027土坑 取り上げM5	土師器	手作小小鉢	口縁部~ 底部	100%	縁部の歪み著しい、全体に剥離や著しい、古晩時代後期
243	図51	26	225	882	第2次 3B 110~d~e5	——	3062土坑 取り上げM5	土師器	壺	口縁部	95%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、古晩時代後期か
244	図51	26	224	881	第2次 3B 110~d~e5	——	3062土坑 取り上げ1	土師器	壺	口縁部	95%	口縁部の歪み著しい、全体に剥離・磨滅極めて著しい、古晩時代後期か
245	図52	26	200	728	第2次 3B 110~d~e5	——	3030土坑 取り上げの下	弥生土器	広口壺	口縁部~ 体部	20%	内面部の剥離・磨滅極めて著しい、外面部は部分的に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊I~2様式、反転復元
246	図52	26	201	728	第2次 3B 110~d~e5	——	3030土坑 取り上げの下	弥生土器	壺	口縁部~ 底部	50%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊I~2様式か、一部反転復元
247	図52	26	252	843	第2次 3B 110~d~e5	——	3124土坑 取り上げ	土師器	高壺	脚柱部	100%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、布留式併行古縁鉢か、一部反転復元
248	図52	26	203	728	第2次 3B 110~d~e5	——	3030土坑 取り上げ1	須恵器	耳壺	口縁部	5%	クロロ回向方向・右回り・陶邑式型式第3段階(田辺M15型式)、反転復元、照片のため口部不確
249	図52	—	251	842	第2次 3B 110~d~e5	——	3122土坑 取り上げの下	須恵器	耳壺	天井部~ 口縁部	25%	クロロ回向方向・左回り・陶邑式型式第3段階(田辺M15型式)、反転復元
250	図52	26	250	842	第2次 3B 110~d~e5	——	3122土坑 取り上げの下	須恵器	耳壺	天井部~ 口縁部	25%	外亞全体に自然剥離多く付着する。クロロ回向方向・右回り・陶邑式型式第3段階(田辺M15型式)、反転復元
251	図52	26	253	843	第2次 3B 110~d~e5	——	3124土坑 取り上げ	須恵器	耳壺	天井部~ 口縁部	30%	クロロ回向方向・右回り・陶邑式型式第2段階~第3段階(田辺K10型式)、反転復元。
252	図52	26	255	843	第2次 3B 110~d~e5	——	3124土坑 取り上げ	須恵器	耳壺	天井部~ 口縁部	15%	外亞全体に自然剥離多く付着する。クロロ回向方向・右回り・陶邑式型式第3段階(田辺K10型式)、反転復元
253	図52	26	254	843	第2次 3B 110~d~e5	——	3124土坑 取り上げ	須恵器	耳壺	天井部~ 口縁部	25%	クロロ回向方向・左回り・陶邑式型式第4段階(田辺K10型式)、反転復元。
254	図52	26	199	713	第2次 3B 110~d~e5	——	3021土坑 取り上げ	須恵器	耳壺	天井部~ 口縁部	25%	クロロ回向方向・右回り・陶邑式型式第2段階(田辆K10型式)、反転復元。
255	図52	26	202	728	第2次 3B 110~d~e5	——	3030土坑 取り上げ	須恵器	耳壺	天井部~ 口縁部	5%	クロロ回向方向・右回り・陶邑式型式第4段階(田辆K10型式)、反転復元。
256	図52	26	223	768	第2次 3B 110~d~e5	——	3046土坑 取り上げ	須恵器	耳壺	天井部~ 口縁部	10%	クロロ回向方向・右回り・陶邑式型式第5段階(田辆K10型式)、反転復元。
257	図52	26	228	808	第2次 3B 110~d~e5	——	3094土坑 取り上げ	須恵器	耳壺	天井部~ 口縁部	15%	クロロ回向方向・左回り・陶邑式型式第3段階(田辆K10型式)、反転復元。
258	図52	26	230	802	第2次 3B 110~d~e5	——	3098土坑 取り上げ	須恵器	耳壺	天井部~ 口縁部	75%	クロロ回向方向・右回り・陶邑式型式第2段階(田辆K10型式)、反転復元。
259	図52	26	257	843	第2次 3B 110~d~e5	——	3124土坑 取り上げ	須恵器	耳壺	天井部~ 口縁部	10%	外亞部以下に自然剥離多く付着する。クロロ回向方向・右回り・陶邑式型式第5段階(田辆K10型式)、反転復元、照片のため口部不確

2012和田遺跡 出土遺物一覧(土器)

No. 7

遺物番号	種類番号	写真番号	実測値 直径(横) 高さ(縦)	出土場所 取扱い 取扱い年	地区 施設区分 取扱い年	遺構面 施設区分 取扱い年	遺物番号 年度 施設区分 取扱い年	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
260	図52	26	227	808	第2次 3回 H10~e-b15	——	3094土灰	須恵器	香	口縁部	25%	外全體に自然輪廓く付する。ロクロ回転方向:左回り。陶色Ⅱ型式第3段階(田辺M785型式)、反転復元
261	図52	26	256	843	第2次 3回 H10~y-15	——	3124土灰	須恵器	広口香	口縁部～ 腹部	10%	ロクロ回転方向:左回り。陶色Ⅱ型式第3段階(田辺M785型式)、反転復元。縞片のめ口縁不正確
262	図52	26	229	808	第2次 3回 H10~b15	——	3094土灰	須恵器	壺	口縁部	20%	内外部共に自然輪廓く付する。ロクロ回転方向:右回り。陶色Ⅱ型式第3段階(田辺M785型式)、反転復元
263	図52	26	258	868	第2次 3回 I9~d24	——	3162土灰	須恵器	器台	口縁部～ 底部	5%	内外部共に自然輪廓く付する。ロクロ回転方向:左回り。陶色Ⅱ型式第1段階(田辺M785型式)、反転復元。縞片のめ口縁不正確
264	図52	26	226	918	第2次 3回 I10~e-15	——	3091土灰	土器質土器	絹袋	口縁部～ 底部	25%	外全體から縞片にかけて厚岸く付する。全体に縫合や直し、江戸時代後期復元
265	図52	26	231	802	第2次 3回 I10~e-15	——	3098土灰	陶器	瓶	口縁部～ 底部	50%	化粧土器、全体に直し貫入有り。片側開き草文を施す。底部は露窓
266	図53	27	237	934	第2次 3回 H10~y-10	——	3115井戸 井側内	土師器	皿	口縁部～ 底部	30%	全体に遺存はま直好。裏面底面糊痕有り。見込か口縁にかけて放射状縞片文が施され、奈良時代平城三段階か一部反転復元
267	図53	27	236	934	第2次 3回 H10~y-10	——	3115井戸 井側内	土師器	皿	口縁部～ 底部	55%	全体に遺存はま直好。見込か口縁にかけて放射状縞片文が施され、奈良時代平城三段階か、反転復元
268	図53	27	236	934	第2次 3回 H10~y-10	——	3115井戸 井側内	土師器	皿	口縁部～ 底部	40%	底面底面糊痕有り。全体に直し貫入有り。見込か口縁にかけて放射状縞片文が施され、奈良時代平城三段階か、反転復元
269	図53	27	238	935	第2次 3回 H10~y-10	——	3115井戸 井側内	須恵器	皿	口縁部～ 底部	95%	全体に刺繡・磨滅等や直好。見込か口縁に付する縞片文が施され、奈良時代平城三段階か、反転復元
270	図53	27	249	937	第2次 3回 H10~y-10	——	3115井戸 井側内	土師器	蓋省	口縁部～ 底部	90%	底面底面糊痕有り。全体に刺繡・磨滅等や直好。見込か口縁に付する縞片文が施され、奈良時代平城三段階か
271	図53	27	246	935	第2次 3回 H10~y-10	——	3115井戸 井側内	土師器	盤	口縁部～ 底部	95%	底面底面糊痕有り。全体に刺繡・磨滅等や直好。見込か口縁に付する縞片文が施され、奈良時代平城三段階か、反転復元
272	図53	27	245	935	第2次 3回 H10~y-10	——	3115井戸 井側内	土師器	盤	口縁部～ 底部	90%	底面底面糊痕有り。全体に刺繡・磨滅等や直好。見込か口縁に付する縞片文が施され、奈良時代平城三段階か
273	図53	27	244	934	第2次 3回 H10~y-10	——	3115井戸 井側内	土師器	盤	口縁部～ 底部	75%	外全體に直し貫入有り。内面部上から縞片文にかけて放射状縞片文が施される。全体に遺存はま直好。内面部は直位のケ縫調整が施され、奈良時代平城三段階か、反転復元
274	図53	27	239	934	第2次 3回 H10~y-10	——	3115井戸 井側内	土師器	盤	口縁部～ 底部	67%	外全體に直し貫入有り。内面部上から縞片文にかけて放射状縞片文が施される。全体に遺存はま直好。内面部は直位のケ縫調整が施され、奈良時代平城三段階か、一部反転復元
275	図53	27	243	854	第2次 3回 H10~y-10	——	3115井戸 井側内	土師器	盤	口縁部～ 底部	80%	外全體に底面糊痕有り。全体に遺存はま直好。内面部上から縞片文にかけて放射状縞片文が施される。全体に遺存はま直好。内面部は直位のケ縫調整が施され、奈良時代平城三段階か、一部反転復元
276	図53	27	242	934	第2次 3回 H10~y-10	——	3115井戸 井側内	土師器	盤	口縁部～ 底部	75%	外全體下から縞片文にかけて厚岸く付する。全体に遺存はま直好。内面部は直位のケ縫調整が施され、奈良時代平城三段階か、一部反転復元
277	図54	28	241	934	第2次 3回 H10~y-10	——	3115井戸 井側内	土師器	盤	体部～ 底部	75%	外全體下から縞片文にかけて厚岸く付する。全体に遺存はま直好。内面部は直位のケ縫調整が施され、奈良時代平城三段階か、一部反転復元
278	図54	28	240	934	第2次 3回 H10~y-10	——	3115井戸 井側内	土師器	盤	口縁部～ 底部	90%	外全體下から縞片文にかけて厚岸く付する。全体に遺存はま直好。内面部は直位のケ縫調整が施され、奈良時代平城三段階か、一部反転復元
279	図54	28	247	935	第2次 3回 H10~y-10	——	3115井戸 井側内	土師器	盤	口縁部～ 底部	25%	外全體に底面糊痕有り。内面部は直位のケ縫調整が施され、奈良時代平城三段階か、反転復元
280	図54	28	248	934	第2次 3回 H10~y-10	——	3115井戸 井側内	須恵器	盤	口縁部～ 底部	5%	外全體下から縞片文にかけて厚岸く付する。全体に遺存はま直好。内面部は直位のケ縫調整が施され、奈良時代平城三段階か、反転復元
281	図54	28	173	751	第2次 3回 I10~e-15	——	須恵器	坪蓋	口縁部	ロクロ回転方向:左回り、陶色Ⅱ型式第3段階(田辺M785型式)、反転復元	10%	外全體に自然輪廓く付する。ロクロ回転方向:左回り、陶色Ⅱ型式第3段階(田辺M785型式)、反転復元
282	図54	28	171	750	第2次 3回 I9~f-15	——	須恵器	坪身	口縁部～ 底部	ロクロ回転方向:右回り、陶色Ⅱ型式第3段階(田辺M785型式)、反転復元	20%	ロクロ回転方向:右回り、陶色Ⅱ型式第3段階(田辺M785型式)、反転復元
283	図54	28	172	750	第2次 3回 I9~f-15	——	須恵器	皿	口縁部～ 底部	ロクロ回転方向:左回り、奈良時代、縞片のため動画のみ	——	外全體下から縞片文にかけて厚岸く付する。ロクロ回転方向:右回り、奈良時代、縞片のため動画のみ
284	図54	28	168	574	第2次 3回	——	須恵器	坪蓋	口縁部～ 底部	5%	外全體下から縞片文にかけて厚岸く付する。ロクロ回転方向:右回り、奈良時代、縞片のため動画のみ	
285	図54	28	169	575	第2次 3回	——	中国製染付	瓶	体部～ 底部	25%	粗大貫入孔に有り、蓋付は露窓、外面部体に黒文。江戸時代、反転復元	
286	図54	28	170	637	第2次 3回	——	肥前製染付	瓶	体部～ 底部	8%	外面部体に墨花文。外面部合部に7条の墨線、蓋付は露窓、江戸時代、反転復元	
293	図59	29	282	451	第2次 4回 I10~a-10	——	4040土灰 (土器屋なり)	土師器	高杯	口縁部	5%	内面部に刺繡・磨滅等で直好し、古唐時代後期か、反転復元。縞片のめ口縁不正確
294	図59	29	283	410	第2次 4回 H10~e-15	——	4040土灰 (土器屋なり)	土師器	高杯	口縁部	25%	全体に刺繡・磨滅等で直好し、古唐時代後期か、反転復元
295	図59	29	281	305	第2次 4回 I10~a-15	——	4040土灰 (土器屋なり)	土師器	高杯	脚柱部	75%	全体に刺繡・磨滅等で直好し、古唐時代後期か、一部反転復元
296	図59	29	274	186	第2次 4回 H10~e-15	——	4017漢 ——	須恵器	平瓶か	口縁部～ 底部	50%	内面部に自然輪廓く付する。ロクロ回転方向:右回り、陶色Ⅱ型式第3段階、反転復元

2012和田遺跡 出土遺物一覧(土器)

No. 8

遺物番号	発掘番号	写真番号	実測直角座標	出土直角座標	地区	遺構番号・堆積層位	遺物番号・堆積層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考	
297	図59	29	273	168	第2次	495 H10→y25	—	4015漢	縄文土器	深鉢	—	全体に磨滅致し、口部の貼付突起上に深いV字刻みが施される。縄文時代後期。	
298	図59	29	279	317 430	第2次	496 H10→y15	—	4021漢 4039漢	土師器	壺	口縁部～ 頸部	17%	全体に剥離・磨滅致めて著しい。奈良時代、反転復元。細片のため口径不明確。
299	図59	29	280	450	第2次	497 H10→y25	—	4022漢	土師器	土壺	口縁部	8%	全体に剥離・磨滅致めて著しい。室町時代、反転復元。細片のため口径不明確。
300	図59	29	284	294	第2次	498 H10→y15	—	4052土灰	須恵器	壺	口縁部	5%	ロクロ回転方向：右回り。陶色Ⅱ型式第4段階（田辺TK23型式）。反転復元。細片のため口径不明確。
301	図59	29	277	213	第2次	499 H10→y24	—	4020漢	須恵器	壺	口縁部～ 頸部	7%	ロクロ回転方向：左回り。陶色Ⅰ型式第5段階（田辺TK47型式か）。反転復元。細片のため口径不明確。
302	図59	29	276	211	第2次	500 H10→y24	—	4018漢	須恵器	平瓶	口縁部～ 全体	30%	ロクロ回転方向：右回り。陶色Ⅱ型式第6段階（田辺TK24型式）。反転復元。
303	図59	29	285	294	第2次	501 H10→y15	—	4052土灰	須恵器	舟身	口縁部～ 全体	5%	ロクロ回転方向：左回り。陶色Ⅱ型式第4段階（田辺TK43型式）。反転復元。細片のため口径不明確。
304	図59	29	286	343	第2次	502 H10→b15	—	4064土灰	須恵器	舟身	口縁部～ 全体	5%	ロクロ回転方向：左回り。陶色Ⅱ型式第4段階（田辺TK43型式）。反転復元。細片のため口径不明確。
305	図59	29	275	249	第2次	503 H9→b20	—	4018漢	須恵器	甕	天井部～ 全体	30%	全体に磨滅致し、ロクロ回転方向：右回り。陶色Ⅱ型式第3段階（田辺TK10型式）。反転復元。細片のため口径不明確。
306	図59	29	278	246	第2次	504 H10→y25	—	4021漢	堅耳釜系 青磁	瓶	口縁部	8%	外径33mm・片切妻による背面が施される。室町時代、反転復元。細片のため口径不明確。
307	図59	29	267	81	包含層 H10→b14	第2層	—	須恵器	短颈壺	口縁部～ 全体	15%	外底面部に自然輪廓付する。ロクロ回転方向：右回り。陶色Ⅱ型式第2段階（田辺TK10型式）。反転復元。	
308	図59	29	260	8	包含層 H10→v24	第2層	—	須恵器	壺	口縁部～ 全体	10%	内底面部に自然輪廓付する。ロクロ回転方向：左回り。陶色Ⅱ型式第2段階（田辺TK10型式）。反転復元。細片のため口径不明確。	
309	図59	29	266	78	第2次	495 H10→a15	包含層 第3層	—	須恵器	壺	口縁部～ 全体	10%	全体に磨滅致めて著しい。ロクロ回転方向：左回り、垂れ出糸。陶色Ⅱ型式第4段階（田辺TK43型式）。反転復元。
310	図59	29	272	109	包含層 H10→b15	第3層	—	須恵器	舟身	口縁部～ 全体	15%	全体に磨滅致し、陶色Ⅱ型式第3段階（田辺TK85型式）。反転復元。	
311	図59	29	271	109	第2次	496 H10→b15	包含層 H10→v15	—	須恵器	甕	天井部～ 全体	60%	外底面部に自然輪廓付する。ロクロ回転方向：右回り。金剛山時代早中期Ⅱ段階前後か。一部反転復元。
312	図59	29	270	109	第2次	497 H10→b15	包含層 H10→v15	—	須恵器	甕	天井部～ 全体	50%	ロクロ回転方向：右回り。奈良時代平城期Ⅱ段階前後か。一部反転復元。
313	図59	29	264	43	包含層 H10→v25	第3層	—	須恵器	壺	口縁部～ 全体	25%	全体に磨滅致し、やや軟質。奈良時代平城Ⅲ段階前後か。反転復元。	
314	図59	29	268	81	包含層 H10→b14	第3層	—	東條系 須恵器	壺	口縁部	6%	外底面部に自然輪廓付する。雄略時代、反転復元。細片のため口径不明確。	
315	図59	29	262	26	包含層 H10→v16	第3層	—	東條系 須恵器	壺	口縁部	5%	外底面部に自然輪廓付する。雄略時代、反転復元。細片のため口径不明確。	
316	図59	29	261	11	包含層 H10→v25	第3層	—	白磁	碗	口縁部～ 全体	8%	雄略時代、反転復元。細片のため口径不明確。	
317	図59	29	269	86	包含層 H10→v16	第3層	—	肥前系 須恵器	壺	底盤 (高台)	25%	蓋付は露胎。江戸時代、反転復元。	
318	図59	29	263	29	第2次	498 H10→v18	包含層 H10→v18	—	瀬戸系 磁器	蓋夷宿口	体部～ 全体	25%	江戸時代、反転復元。
319	図59	29	259	4	包含層 H10→v25	—	包含層 H10→v15	—	肥前系 磁器	鉢	体部～ 全体	10%	底盤表面の船は削り取り、内面に胎土痕あり。江戸時代、反転復元。
320	図59	29	265	68	第2次	499 H10→x15	包含層 第3層	—	土製品	鉢	—	90%	全体に磨滅致し、直径4.2cm・厚み2.8cm・重量（55g）

和田遺跡 出土遺物一覧 石器(S)・金属(M)

No. 9

遺物 番号	種類 番号	写真 図版	出土遺物 登録番号	出土遺物 登録番号	取上 区分	直横番 層位	直横番 層位	遺物種類	器種	法量				石材	備考	
										長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
64 図24 19 S 6 270	1次 I-9-16	1次 台面層 (第3層)	打製石器	石鏡	2.75	2.0	0.35	(1.34)	サヌカイト	磨石						
65 図24 19 S 3 020	1次 I-9-1	台面層 (第3層)	打製石器	石鏡	3.5	1.55	0.1~ 0.45	1.85	サヌカイト	石鏡の可能性有り						
66 図24 19 S 1 040	1次 I-9-b11	側溝 032 薄み込み の可能性有り	石製品	瓦芯円盤	2.3	2.5	0.25	3.45	滑石	画面に斜めの擦痕有り						
67 図24 19 S 4 109	1次 I-9-e11	台面層 (第4層)	石製品	臼玉	0.5	0.5	0.25	0.11	滑石	丸の直徑0.15cm						
68 図24 19 S 8 415	1次 I-9-c10	205自然流路 碧製石器 片刃石斧	碧製石器	小笠扁平 片刃石斧	3.75	2.1	1.05	(16)	緑色碧 セトモリ	色調2.5GY7/1~5GY7/1明才 リーフ色を有する						
69 図24 19 S 5 241	1次 I-9-d10	台面層 032 薄み込み の可能性有り	石製品	墨石	(6.1)	(5.2)	1.6	(83)	滑石	画面に形成したため擦痕有り						
70 図24 19 S 2 040	1次 I-9-b11	側溝 032 薄み込み の可能性有り	石鏡	敲石	9.1	4.6	3.45	220	粗粒砂岩	内部と外側に鋸歯状、片側面の風化層 らしい						
71 図24 19 S 10 487	1次 I-9-e6	205自然流路 遺物集出 取り上げ	石鏡	敲石	13.6	7.9	6.7	1034	チャート質	画面に敲打痕						
72 図24 19 S 7 327	1次 I-9-e11	205自然流路	石鏡	石皿	(16.1)	23.1	7.5	(4170)	粗粒砂岩	中央の凹み部に敲打痕有り、尖頭部は 比較的古い破れ						
73 図24 19 S 9 422	1次 I-9-b10	205自然流路 遺物集出 取り上げ	石鏡	墨石	(8.85)	(10.05)	5.8	(858)	粗粒砂岩	比較的の確、尖頭部は比較的古い破れ						
176 図37 23 S 15 618	2次 I-9-c16	第2道溝 下段	打製石器	石鏡	2.3	1.15	0.3	0.66	サヌカイト	磨石						
179 図37 23 S 23 604	2次 I-9-n15	第1道溝 上段	打製石器	石鏡	(2.45)	(1.3)	0.4	1.02	サヌカイト	磨石						
180 図37 23 S 24 604	2次 I-9-n15	第1道溝 上段	打製石器	石鏡	2.75	1.8	0.3	1.13	サヌカイト	磨石						
181 図37 23 S 16 475	2次 I-9-a10	第2道溝 上段	打製石器	石鏡	(2.1)	(1.5)	0.4	1.37	サヌカイト	磨石						
182 図37 23 S 18 625	2次 I-9-n16	第2道溝 上段	打製石器	スクリュー バー	7.8	4.75	0.8	(31.95)	サヌカイト	磨石、全体に風化著しい、背面の一部 に風化の通路						
183 図37 23 S 26 585	2次 I-9-n15	第1道溝 上段	打製石器	スクリュー バー	7.8	4.4	0.65	29.49	サヌカイト	1cm以下の白色粒を少量含む、画面 の大部に風化が進んでおり						
184 図37 23 S 21 559	2次 I-9-e11	第1道溝 上段	打製石器	スクリュー バー	7.3	7.75	1.0	52.92	サヌカイト	磨石、両側縁は未調整						
185 図37 23 S 14 926	2次 H9-n24	第2道溝 D-1区段	碧製石器	石磨丁	(8.6)	5.65	0.6	(45)	緑泥片岩	右部に刃剥離れ有り、紛失した画面から の跡は朱色						
186 図37 23 S 11 387	2次 I-9-e2	球土中	碧製石器	石磨丁	(5.75)	(5.0)	0.7	(30)	緑泥片岩	画面丸い刻離面を残す、紛失した画面 から中の穿孔						
187 図37 23 S 28 777	2次 I-9-n15	第1道溝 下段	2011自然流路 下段	碧石器	敲石	15.5	6.7	3.8	544	粗粒砂岩	両端に鋸歯状、両側縁に削くいい 無数の敲打痕					
188 図37 23 S 22 559	2次 I-9-e11	第1道溝 上段	2011自然流路 上段	碧石器	敲石	13.3	7.7	5.6	913	粗粒砂岩	両端に鋸歯状、片面は鉄打痕、片面 は風化が進んでおり					
189 図37 23 S 12 154	2次 I-9-n15	第2層	碧石器	敲石	10.6	5.6	3.8	380	輝緑岩	表面形状整備、使用時に上半部は既に 削減しているか判断できる						
190 図37 23 S 19 591	2次 I-9-c16	第1道溝 Gトレンチ	2011自然流路 上段	碧石器	敲石	9.8	3.4	3.15	177	緑泥片岩	画面丸い刻離面を残す、紛失した画面					
191 図37 23 S 13 896	2次 I-9-n15	第1道溝 取り上げ	2001推進リム 取り上げ	碧石器	敲石	12.9	5.9	3.4	405	粗粒砂岩	画面に鋸歯状、両側縁に削くいい 無数の敲打痕					
192 図38 23 S 17 621	2次 I-9-n22	第2道溝 上段	2010自然流路 上段	碧石器	敲石	11.7	12.4	8.85	2050	粗粒砂岩	画面に鋸歯状による凹み、側縁の全面 に鉄打痕					
193 図38 ---- S 27 697	2次 I-9-n13	第1道溝 上段	2011自然流路 上段	碧石器	敲石	(12.25)	11.45	5.7	(1255)	緑泥片岩	画面丸い刻離面有り					
194 図38 23 S 20 503	2次 H9-n24	第1道溝 上段	2011自然流路 上段	石製品	磨擦車	6.0	5.1	1.4	48.7	滑石	斜め面に複数の弦文が均等に 並んでおり、斜め面に鉄打痕、画面の左側 に刃剥離れ有り、紛失した画面から左側 の穿孔					
195 図38 23 S 25 505	2次 I-9-d15	第1道溝 上段	2011自然流路 上段	石製品	瓦芯円盤	5.2	4.7	0.55	(26.8)	滑石	斜め面に複数の弦文が均等に 並んでおり、斜め面に鉄打痕、画面の左側 に刃剥離れ有り、紛失した画面から左側 の穿孔					
287 図54 28 S 29 812	2次 I-10-e6	3014土坑	打製石器	調整石器 か	10.25	6.7	3.3	190	サヌカイト	画面に鋸歯状、片面は鉄打痕、画面 の左側に刃剥離れ有り						
288 図54 28 S 33 924	2次 I-10-e6	3109土坑	打製石器	石剣	(2.7)	(2.6)	0.6	(4.68)	サヌカイト	基部の一部に画面が違う						
289 図54 28 S 30 934	2次 H9-n9-10	3115井戸 井側面	碧石器	敲石	17.3	15.3	7.65	3450	緑泥片岩	画面に凹み、片面に鉄打痕、画面 の左側に刃剥離れ有り						
290 図54 28 S 31 868	2次 I-10-e6	3162土坑	碧石器	敲石	8.35	4.25	2.35	145	緑泥片岩	画面に複数の凹み、画面に鉄打痕、画面 の左側に刃剥離れ有り						
291 図54 28 S 32 924	2次 I-10-e6	3169土坑	碧石器	敲石	13.8	5.8	4.9	710	緑泥片岩	画面に複数の凹み、画面に鉄打痕、画面 の左側に刃剥離れ有り						
292 図54 28 M 795	2次 I-10-e11	3091土坑	——	小型鉄斧	5.6	4.3	2.1	(73)	——	強化が極めて美しい、正確な鋲部が不 正確						
321 図59 29 S 37 305	2次 I-10-e16	4040土坑 (土壁まで)	打製石器	石鏡	2.0	1.8	0.25	1.02	サヌカイト	画面						
322 図59 29 S 38 299	2次 H10-y16	4061土坑	打製石器	石鏡	2.1	(1.4)	0.3	(0.81)	サヌカイト	画面						
323 図59 29 S 35 199	2次 H10-i-1 <u>u1</u>	4010土坑	碧製石器	石磨丁	(6.45)	(4.2)	0.8	(31.25)	緑泥片岩	全体に光沢度有り、絆失した画面から の穿孔						
324 図59 29 S 34 7	2次 H10-u-27	4040土坑 第2層	碧製石器	石磨丁	(6.6)	(4.5)	0.8	(33.88)	緑泥片岩	全体に風化著しい、絆失した画面から の穿孔						
325 図59 29 S 36 409	2次 H10-z16	4040土坑 (土壁まで)	石製品	管玉	4.7	0.9	1.0	860	碧玉	全体にくすんだ色調を呈する、 3.5H-4.5H、又は黄色系、ZKオーリーブ 色。孔は穿孔からの穿孔						



1 調査地全景（北東上空から）



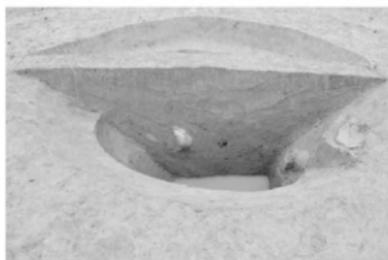
2 調査地全景（真上空から：右側が北）



3 調査遺構全景（北北西から）



1 018 井戸完掘状況・木杭検出状況（南東から）



2 018 井戸断面土層・遺物出土状況（南から）



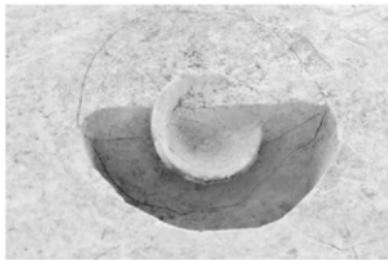
3 018 井戸遺物出土状況（南西から）



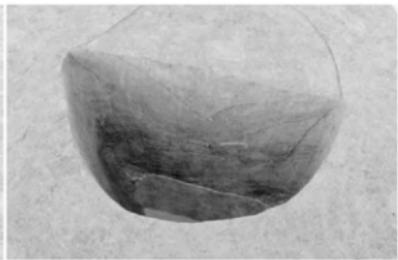
4 018 井戸 木杭検出状況（東から）



5 037 小穴土器出土状況（南から）



6 037 小穴断面土層（北から）



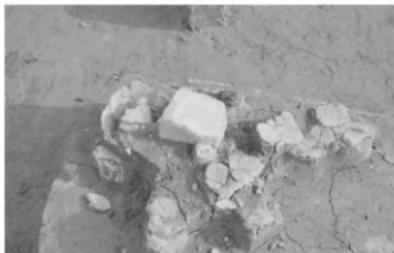
7 209 土坑断面土層（南から）



1 205 自然流路 遺物集中4出土状況（南から）



2 205 自然流路 遺物集中4出土状況（南から）



3 205 自然流路 遺物集中9出土状況（北から）



4 205 自然流路 遺物集中13出土状況（北西から）



5 205 自然流路 B-B'断面土層（南東から）



1 調査地全景（南南西上空から）



2 調査地全景（真上上空から：左側が北）



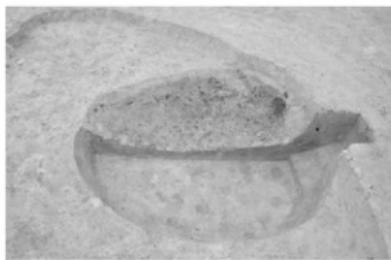
3 調査遺構全景（南西から）



1 206 土坑完掘状況（北東から）



2 206 土坑断面土層（北から）



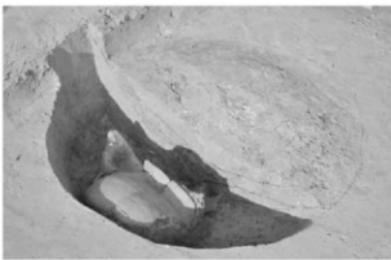
3 012 土坑断面土層（北東から）



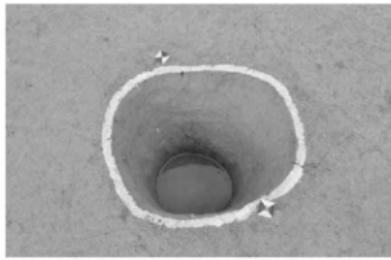
4 011 井戸完掘状況（南から）



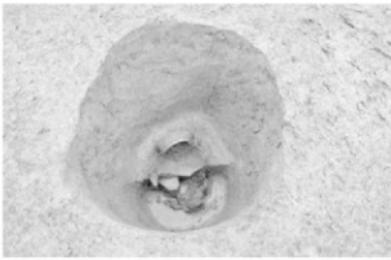
5 011 井戸上層遺物出土状況（西から）



6 011 井戸断面土層（南東から）



7 005 井戸完掘状況（南から）



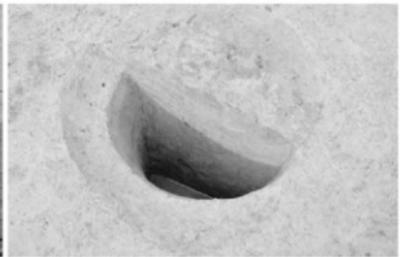
8 005 井戸下層遺物出土状況（南西から）



1 032 落ち込み遺物出土状況（西から）



2 032 落ち込み礫出土状況（南西から）



3 004 井戸断面土層（北西から）



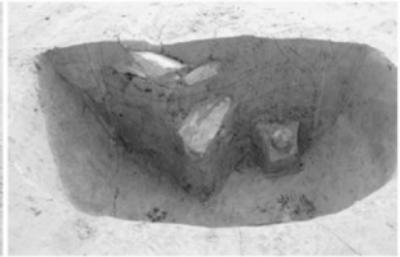
4 001 井戸木枠出土状況（北から）



5 001 井戸遺物出土状況（北から）



6 001 井戸板石出土状況（北から）



7 001 井戸断面土層（北から）



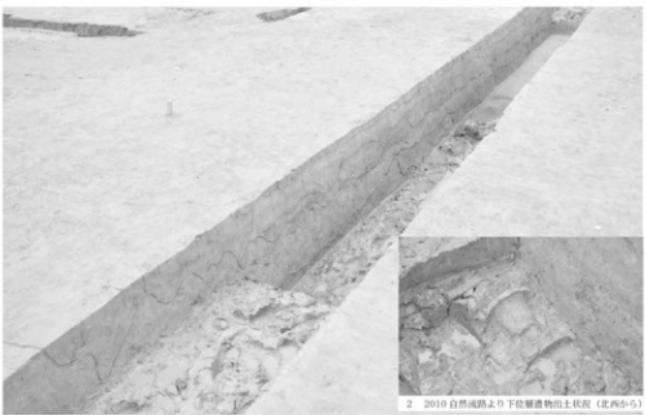
1 調査地全景（東上空から）
(左側奥は3区)



2 調査地全景（北上空から）
(右側奥は3区)



3 調査遺構全景（北から）
(右側奥は3区)



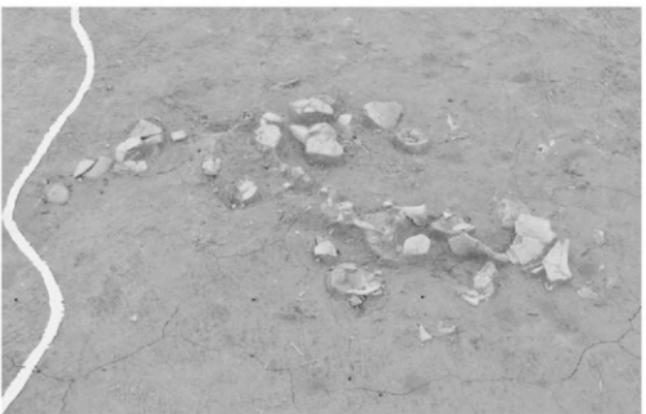
1 2010 自然流路 下層確認Eトレンチ断面土層（北東から）



2 2010 自然流路より下位層遺物出土状況（北西から）



3 2010 自然流路 下層確認Fトレンチ断面土層（西から）



4 2010 自然流路上層 2001 土器溝まり（南から）



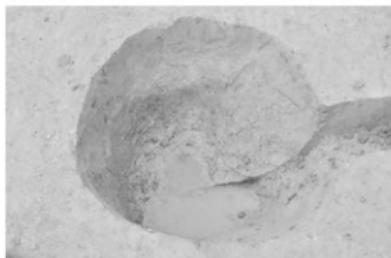
1 調査地全景（真上空から：右側が北）
(2010・2011 自然流路検出状況)



2 調査遺構全景（北から）
(2010・2011 自然流路検出状況)



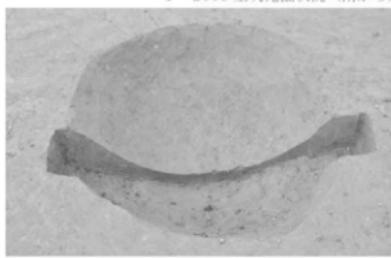
3 2011 自然流路 下層確認Gトレンチ断面土層（南東から）



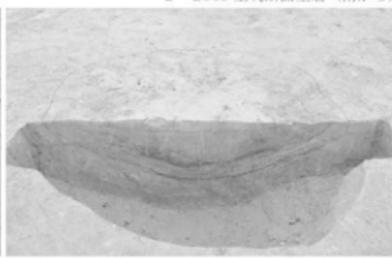
1 2005 土坑完掘状況（南から）



2 2005 土坑断面土層（南から）



3 2003 土坑完掘状況（南から）



4 2003 土坑断面土層（南から）



5 2021 溝状遺構・土坑列（東から）



6 2021 溝状遺構・土坑列断面土層（西南西から）(調査区 2-2 区 北壁)



1 調査地全景（西上空から）
(左側奥は1・2区 第2遺構面)



2 調査地全景（南上空から）
(右側は1・2区 第2遺構面)



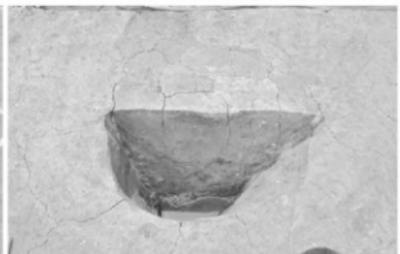
3 調査遺構全景（南から）
(右側奥は1・2区 第2遺構面)



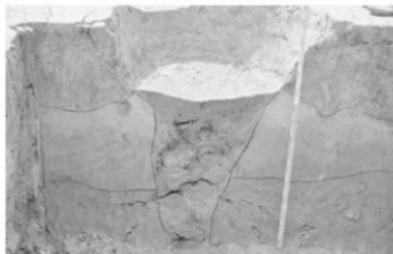
1 3019・3099 土坑掘削状況（南東から）



2 3032 井戸掘削状況（南南東から）



3 3032 井戸上位層断面土層（東から）



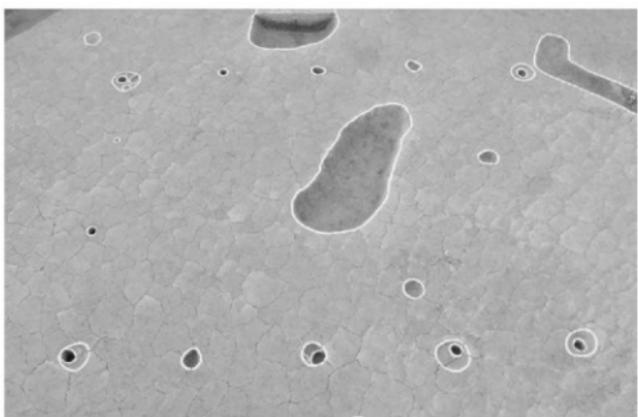
4 3032 井戸下位層断面土層（東から）



5 3031 井戸断面土層（北から）



6 掘立柱建物1掘削状況（南東から）



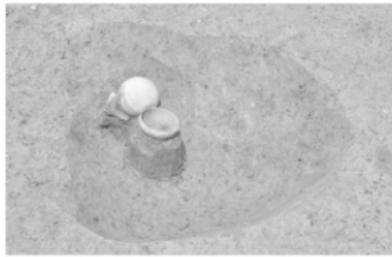
1 挖立柱建物2完掘状況（南東から）



2 3027 土坑遺物出土状況（北北西から）



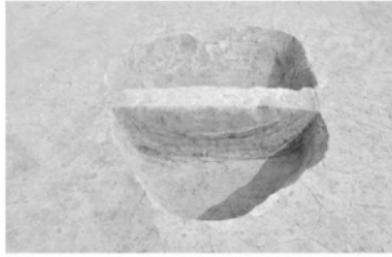
3 3027 土坑遺物出土状況（北東から）



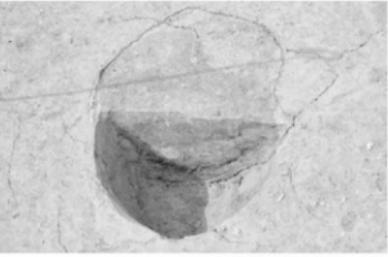
4 3062 土坑遺物出土状況（南東から）



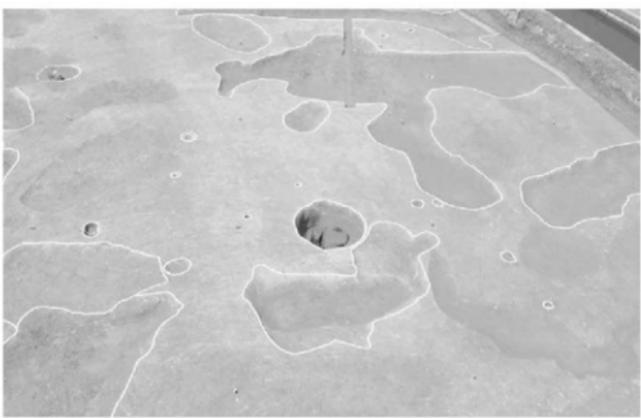
5 3062 土坑遺物出土状況（南から）



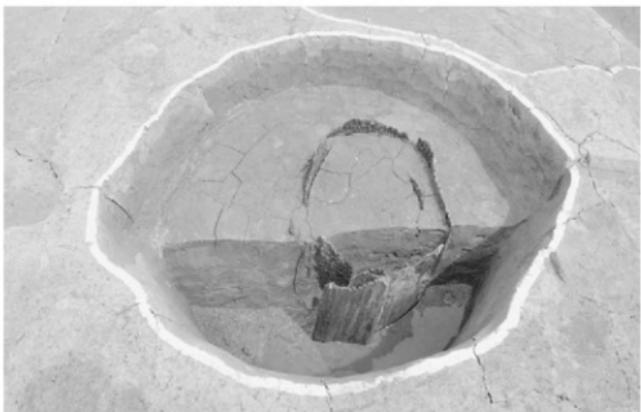
6 3039 土坑断面土層（北西から）



7 3108 土坑断面土層（南から）



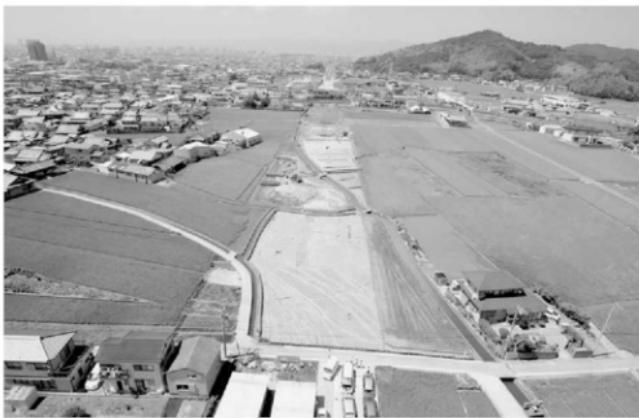
1 3115 井戸とその周辺（南西から）



2 3115 井戸掘削状況（西から）



3 3115 井戸断面土層（西から）



1 調査地全景（南上空から）
(奥は1・2区 第1遺構面)



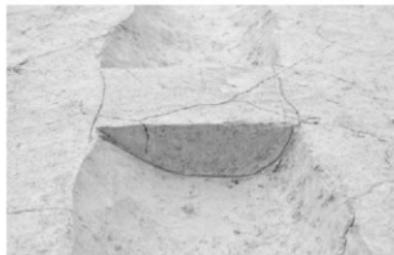
2 調査地全景（真上空から：右側が北）



3 杖列・溝群（南東から）



1 4040 土坑遺物出土状況（南南西から）



2 4003 溝断面土層（南東から）



3 4004・4009 溝断面土層（南東から）



4 4007 溝断面土層（南から）



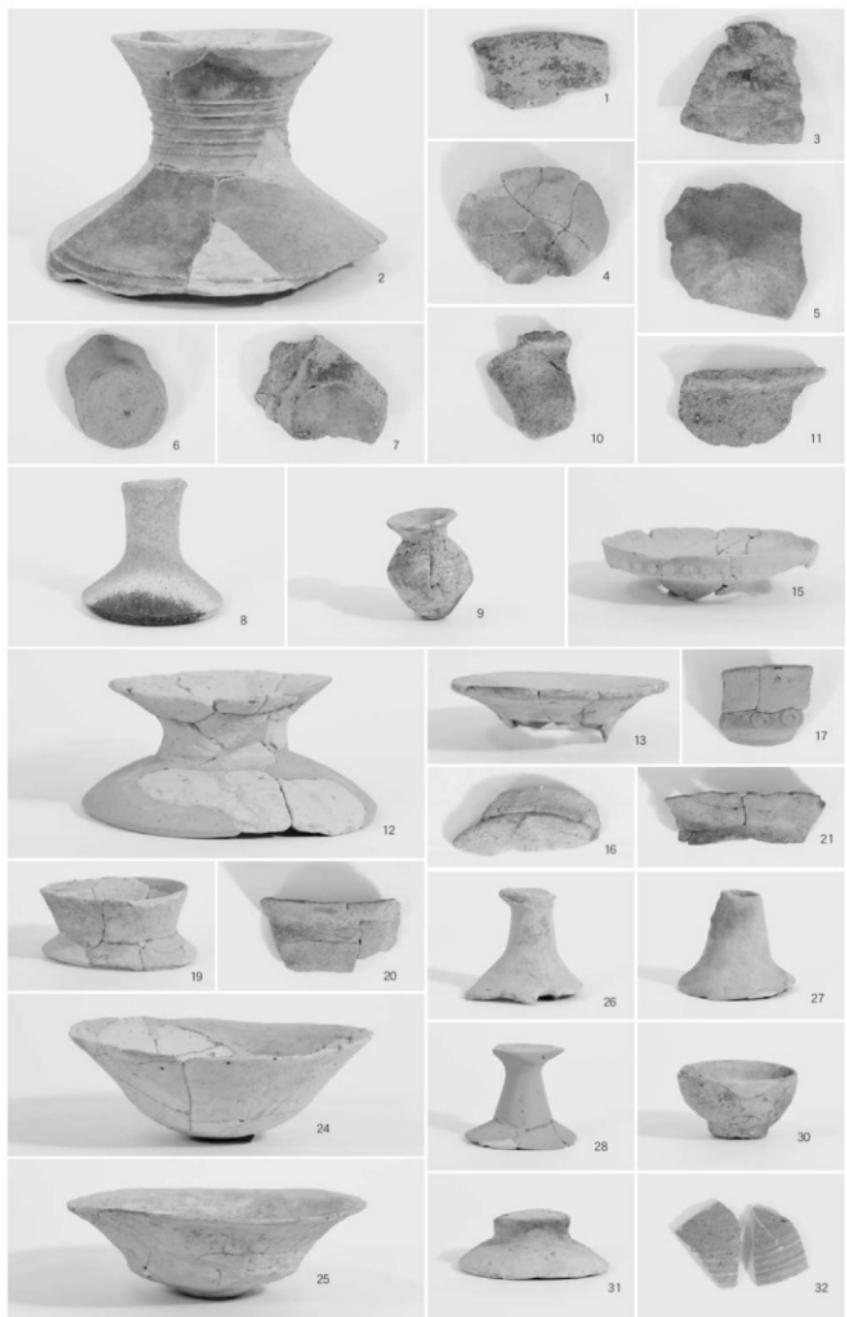
5 4012 溝断面土層（西から）



6 4017 溝断面土層（南東から）



7 4042 溝状遺構断面土層（南東から）



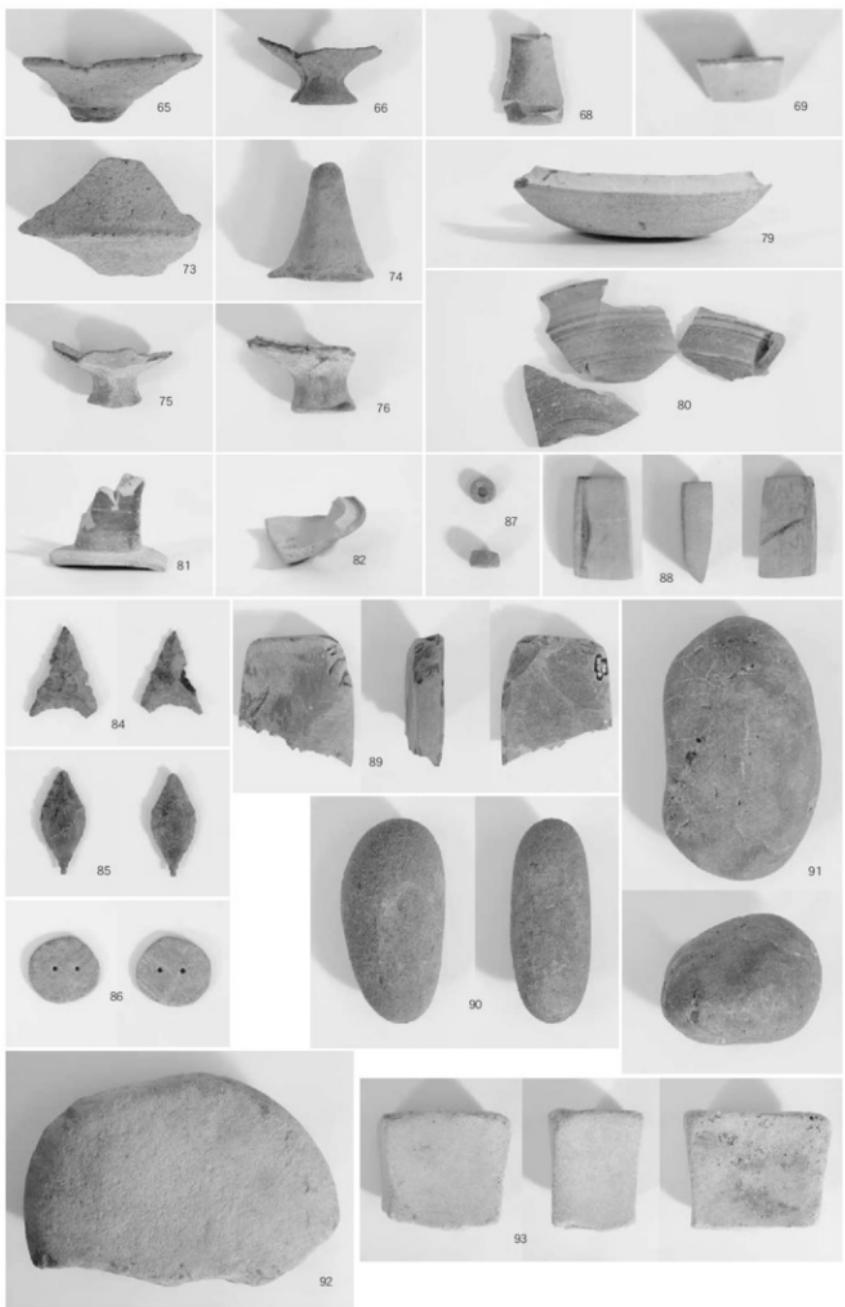
1~7: 018 井戸、8: 037 小穴、9: 209 土坑、10~13・15~17・19~21・24~28・30~32: 205 自然流路

図 21・22 に対応



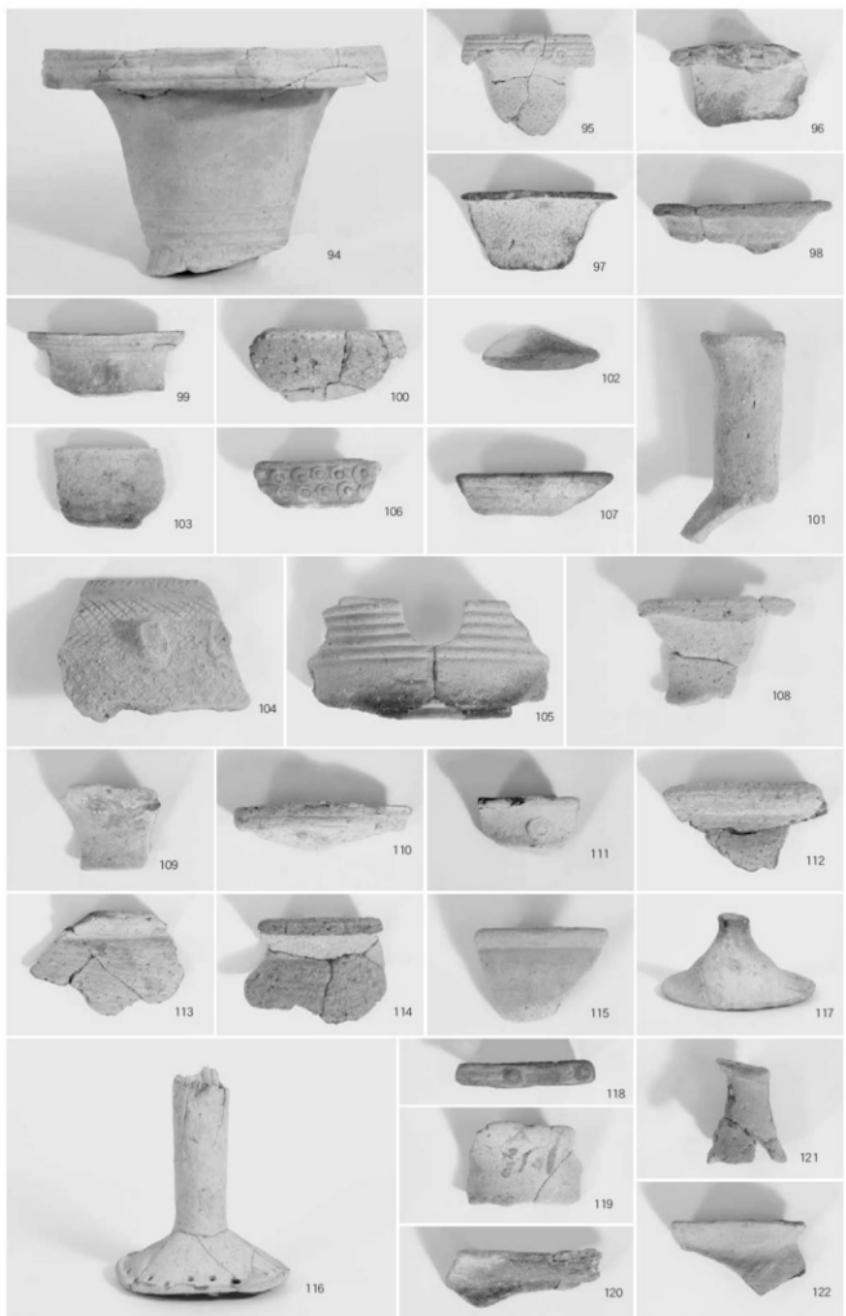
33~38: 遺物包含層第4層、40~43: 011 井戸、44・45: 005 井戸、46: 004 井戸、
47・49・52・54・56・57: 032 落込み、60・62・64: 001 井戸

図22・23に対応



65・66・68・69・86・90：調査区側溝、73～76・79～82・85：遺物包含層第3層、
84・87・89：遺物包含層第4層、88・91～93：205自然流路

図23・24に対応



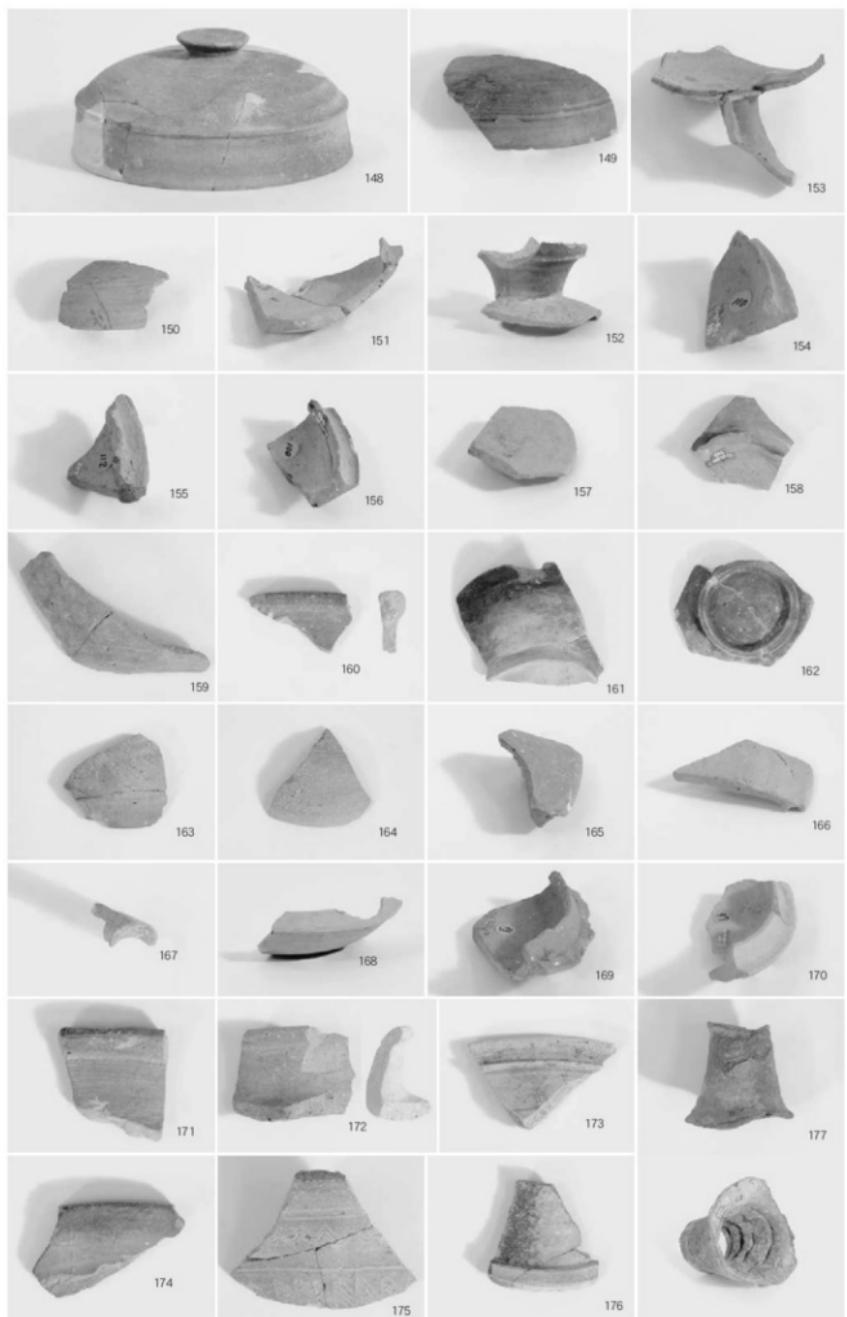
94: 2010 自然流路より下位層、95~105: 2010 自然流路下層、106: 2010 自然流路中層、
107~117: 2010 自然流路上層・層位無し、118~121: 2001 土器窓まり、122: 2005 土坑

図34・35に対応



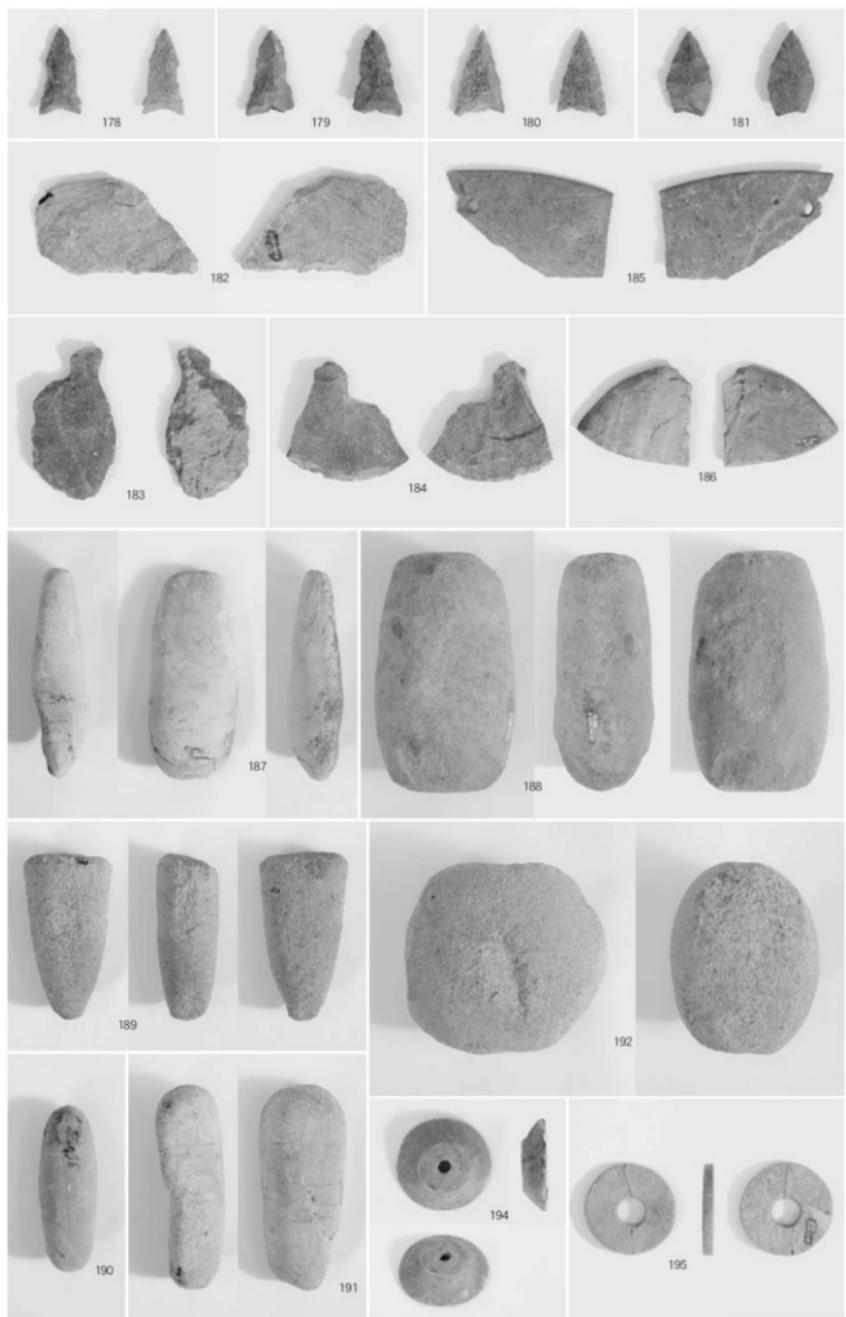
123~132: 2011 自然流路下層, 136・137・140~147: 2011 自然流路上層・層位無し

図35に対応



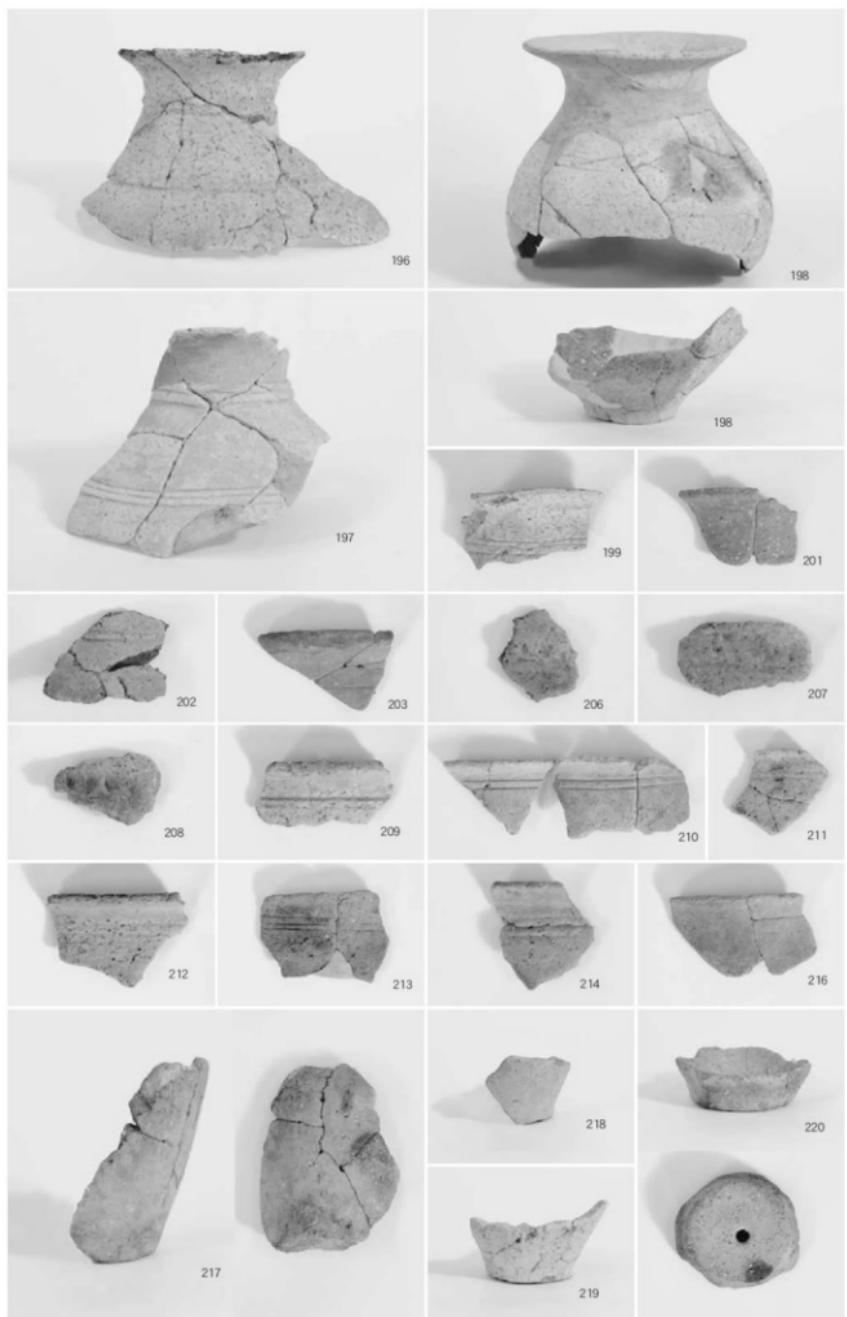
148~153: 2011 自然流路上層、154・157・159~162: 2021 溝状遺構、155: 2048 土坑、
156・158: 2019 土坑、163~177: 遺物包含層第2層

図36に対応



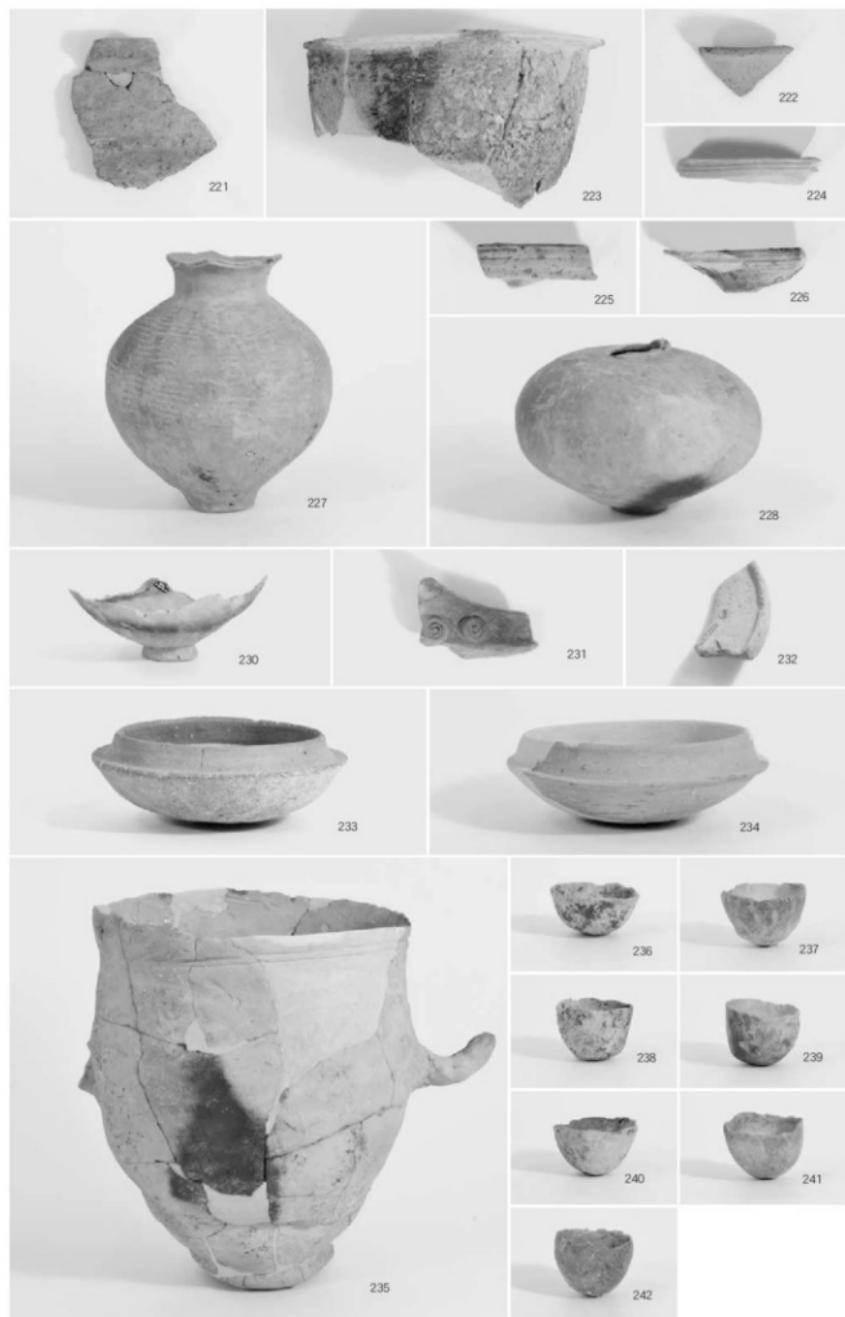
178 : 2010 自然流路下層、179・180・183・184・188・190・194・195 : 2011 自然流路上層・層位無し。
 181・182・192 : 2010 自然流路上層・層位無し、185 : 2010 自然流路最下層、186 : 排土、187 : 2011 自然流路下層、189 : 遺物包含層第2層、191 : 2001 土器埋まり

図37・38に対応



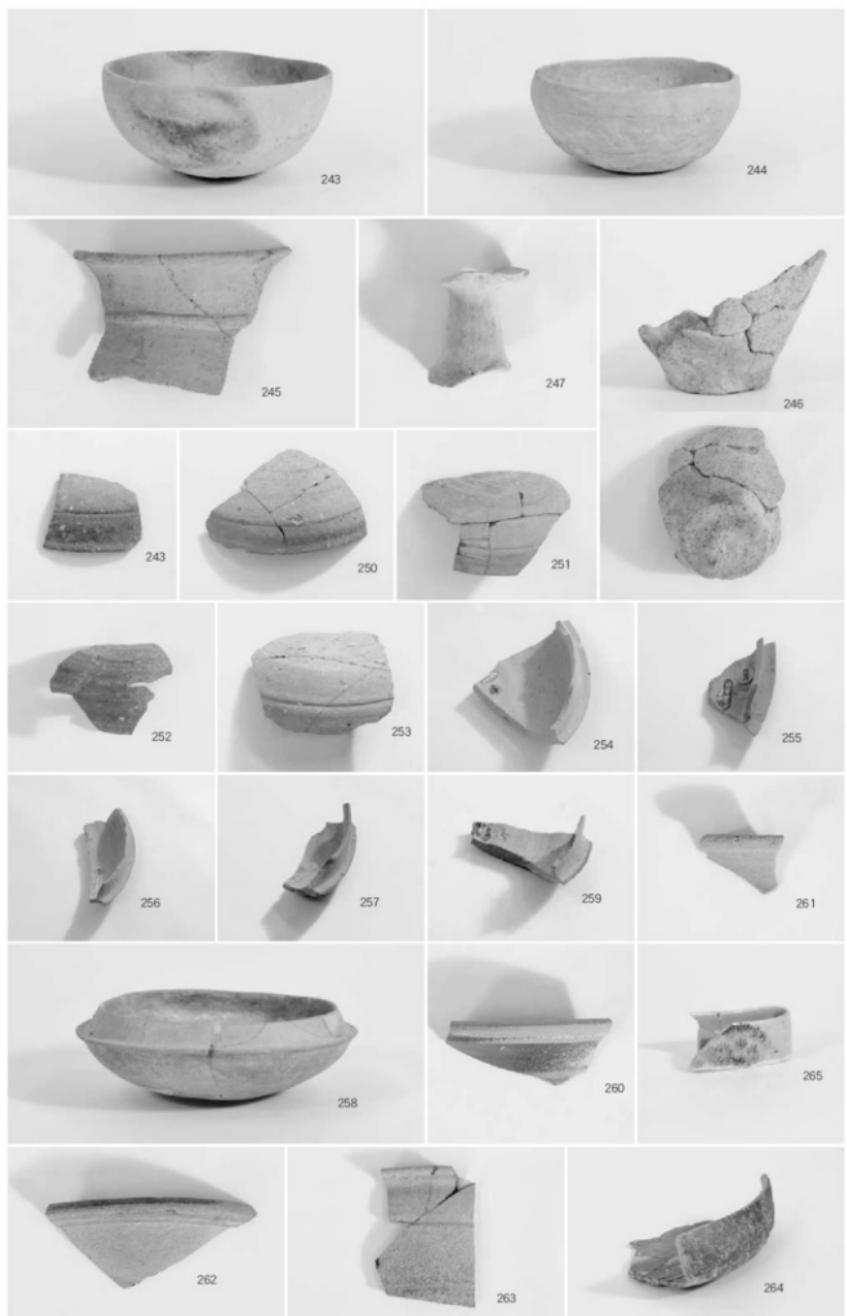
196~199・201~203・206~214・216~220: 3019 土坑

図50に対応



221: 3135 土坑、222: 3099 土坑、223: 3104 土坑、224~228・230: 3032 井戸、231・232: 3031 井戸、
233~242: 3027 土坑

図51に対応



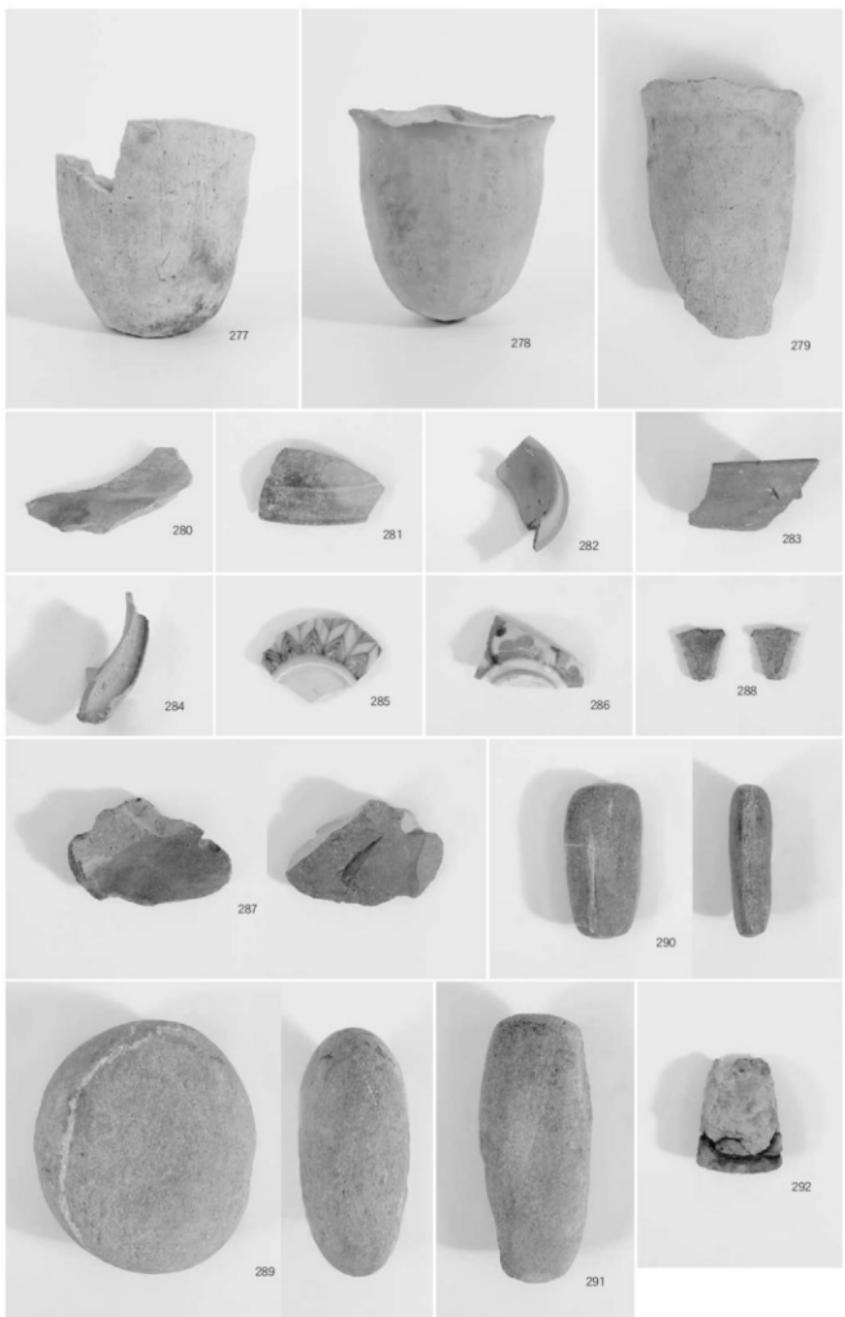
243・244: 3062 土坑、245・246・248・255: 3030 土坑、247・251~253・259・261: 3124 土坑、
250: 3122 土坑、254: 3021 土坑、256: 3046 土坑、257・260・262: 3094 土坑、258・265: 3098 土坑、
263: 3162 土坑、264: 3091 土坑

図51・52に対応



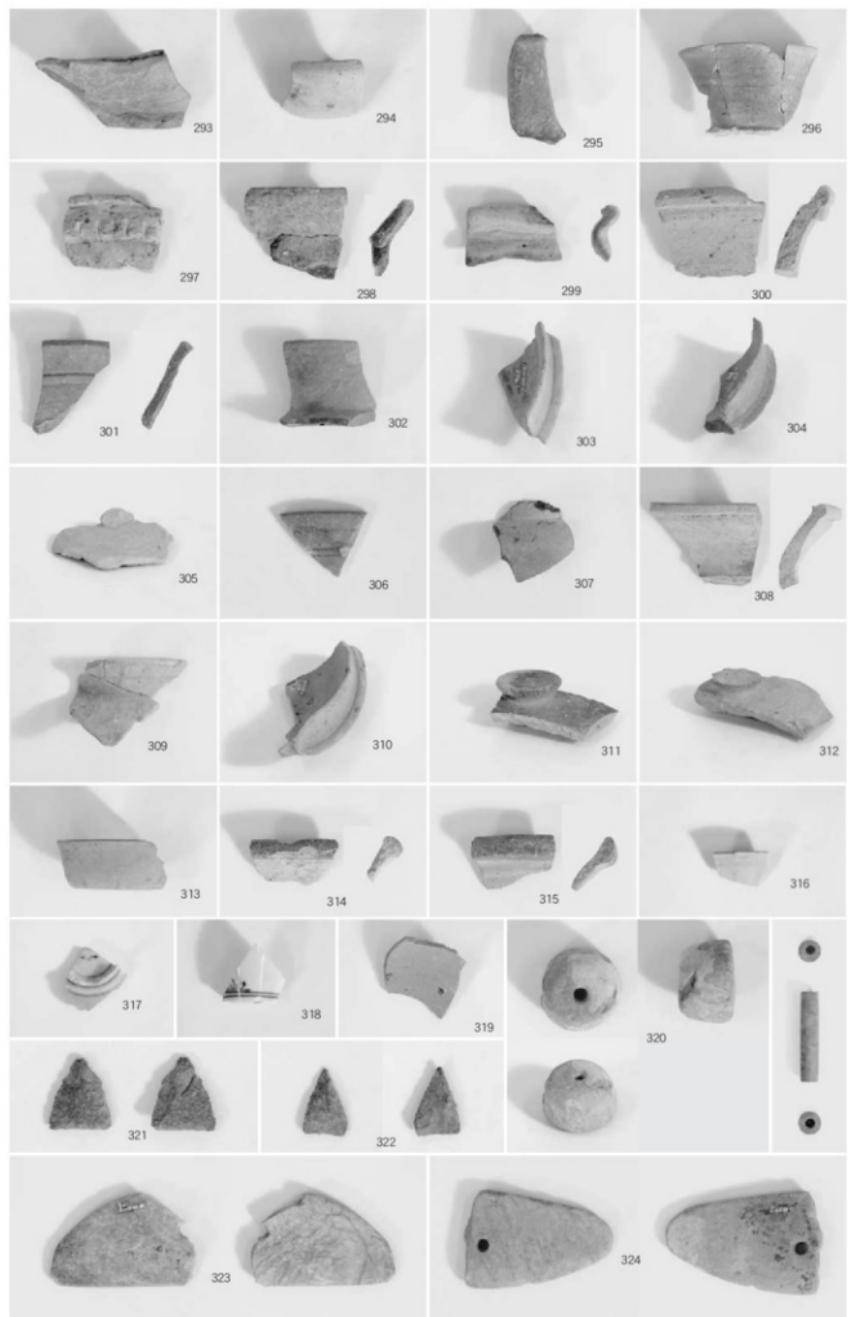
266~276 : 3115 井口

図53に対応



277~280・289:3115 井戸、281~283:遺物包含層第3層関係、284~286:遺物包含層第2層関係、
287:3104 土坑、288・291:3169 土坑、290:3162 土坑、292:3091 土坑

図54に対応



293~295・321・325:4040 土坑(土器埋まり)、296:4017 溝、297:4015 溝、298・306:4021 溝、
299:4022 溝、300・303:4052 土坑、301:4020 溝、302・305:4018 溝、304:4064 土坑、307~
320・324:遺物包含層第2層、322:4061 土坑、323:4010 溝

図59に対応

報告書抄録

和田遺跡

－秋月海南線道路改良工事に伴う発掘調査報告書－

発行年月日：2015年3月18日

編集・発行：公益財団法人和歌山県文化財センター
和歌山県和歌山市岩橋1263-1

印刷・製本：初田印刷株式会社
和歌山県和歌山市吹上5丁目4-40